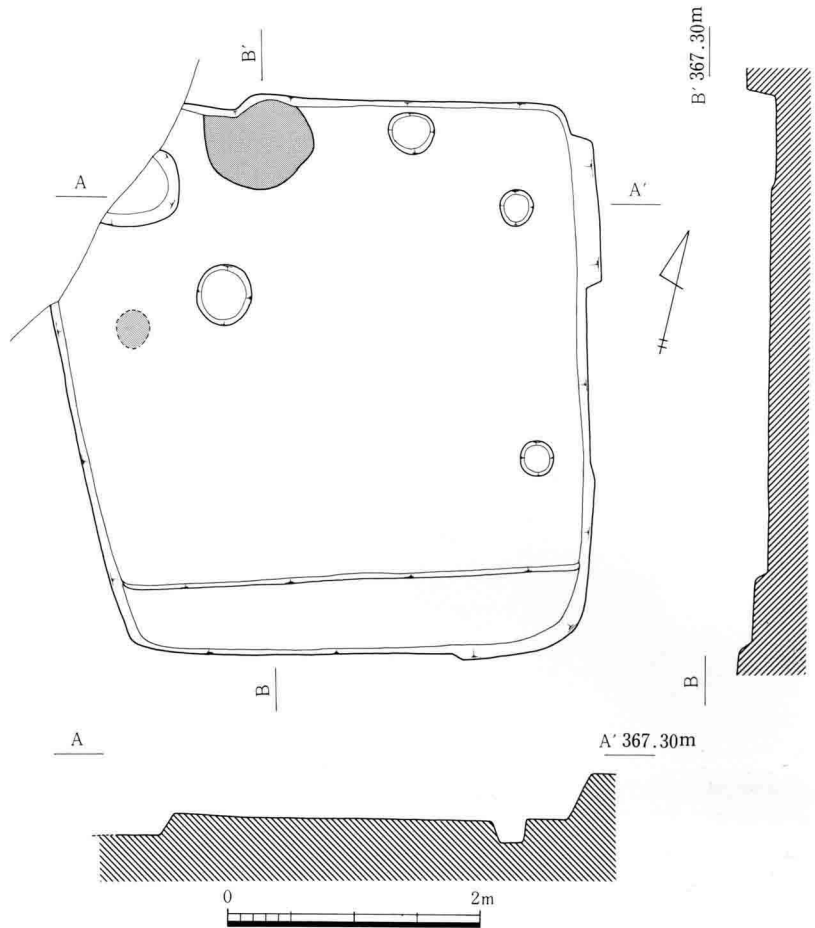


(6) A 2号住居址

遺構 A 1号住居址より古い。北西隅を除きほぼ全体を検出した。上面には人頭大から拳大に至る大小の礫が集積して、床面上部まで住居址のほぼ全体をおおっていた。この集石は住居址本来のものではなく、後に投棄されたものであろう。住居址の形態は不整形を呈するものであるが、南壁は2段になる。主軸4.44m・東西軸4.5mを予想する。掘り込みは、北壁19cm・南壁の上段11cm・下段10cm・東壁34cm・西壁28cmを測る。床面は平坦でやや北・東側に傾斜する。カマドは北壁中央付近に構築されており、検出時には厚さ5cm程の焼土が舟底形ピット内に残存していた。遺物の出土はこの周辺からのものが多い。柱穴状のピットが東壁添いに2個確認されたが西壁側に



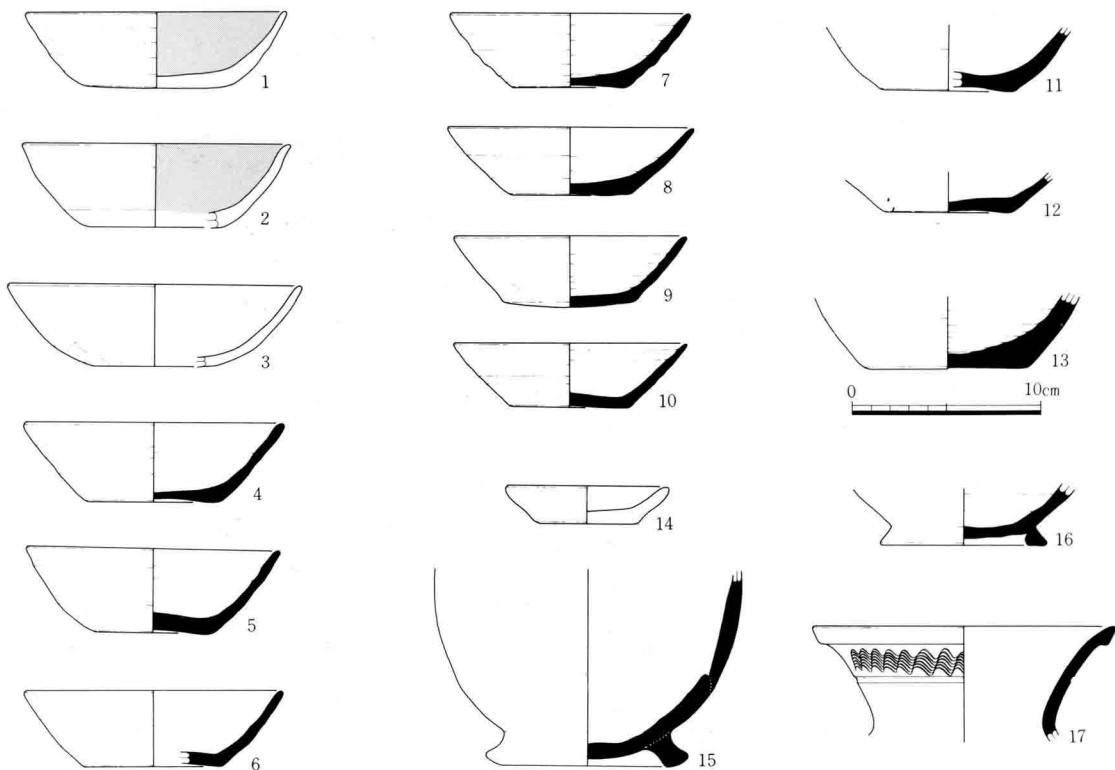
III-117 A 2号住居址実測図



III-118 A 2号住居址集石



III-119 A 2号・A 1号住居址



III-120 A 2号住居址出土土器実測図

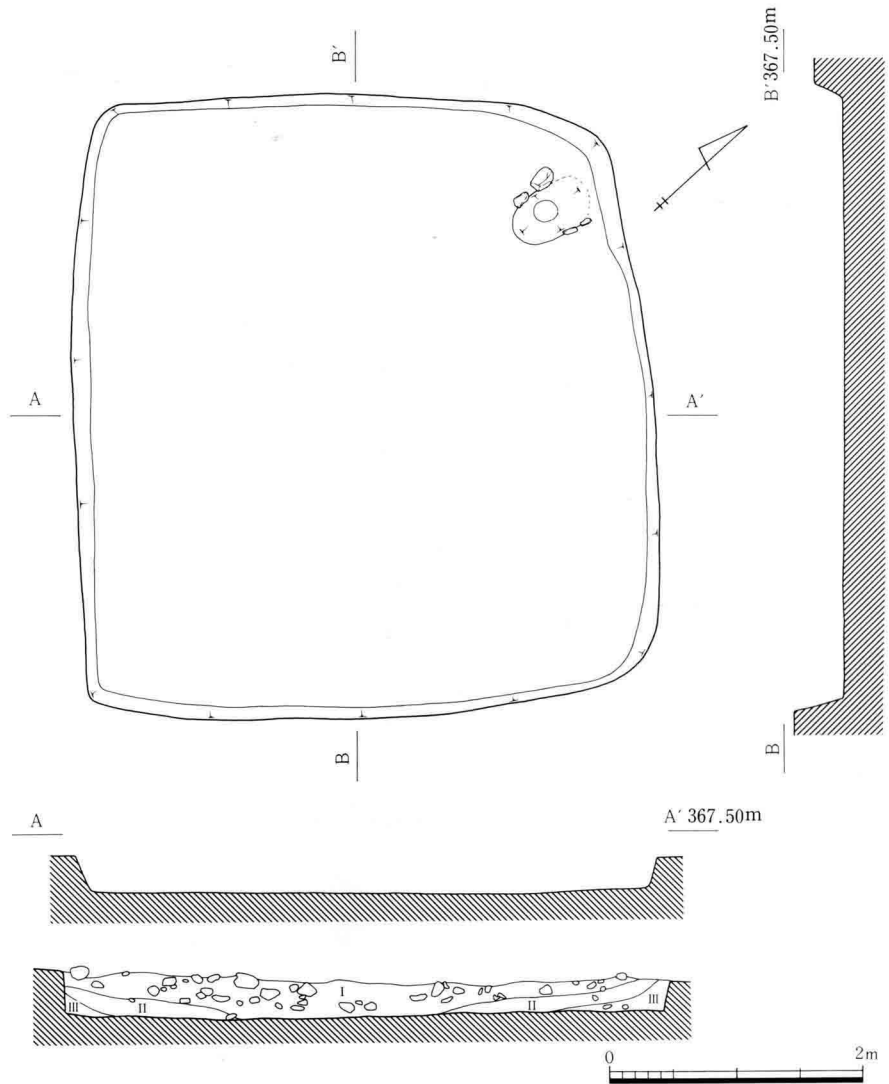
はない。カマド左側の楕円形の掘り込みは貯蔵穴であろう。

遺物 出土量は多く、器種には、須恵器坏 (III-120-4~10)・甕 (13)、土師器坏 (1~3)・甕、灰釉陶器碗等が当住居址の時代のものであろう。鉄釘 (III-231-25)・半球状鉄製品 (30)、獣骨等がある。

(7) A 3号住居址

遺構 調査区下方にあり単独検出である。形態は北壁がやや短い台形状を呈する。規模は主軸4.97m・短軸4.62mで、主軸方向はN-42°-Eを指す。掘り込みは、北壁21cm・南壁39cm・東壁22cm・西壁28cmを測る。カマドと推定されるものは北西隅にあり、両袖に2個ずつの立石が認められ、舟底状ピット内にわずかに焼土が確認できたにすぎない。柱穴は確認されなかった。覆土は礫の混入が多い3層からなる。I層の入り込む床面中央付近直上から古墳時代の遺物が多く出土したので、当初この時代の住居址とも考えた。

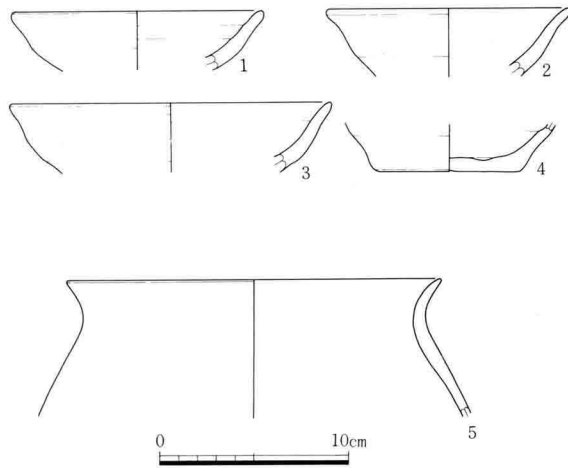
遺物 出土量は比較的多いが、そのほとんどは破片である。器種には、須恵器・蓋・



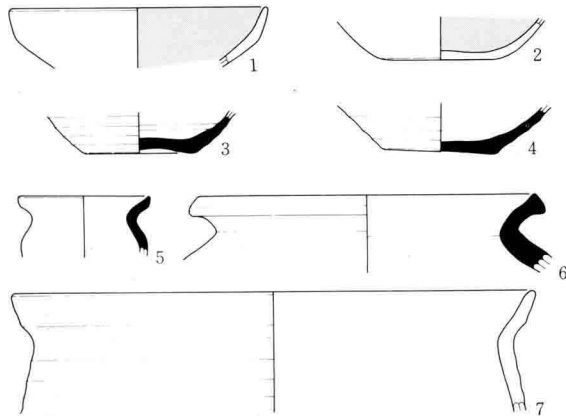
III-121 A 3号住居址実測図



III-122 A 3号住居址



III-123 A 3号住居址出土土器実測図



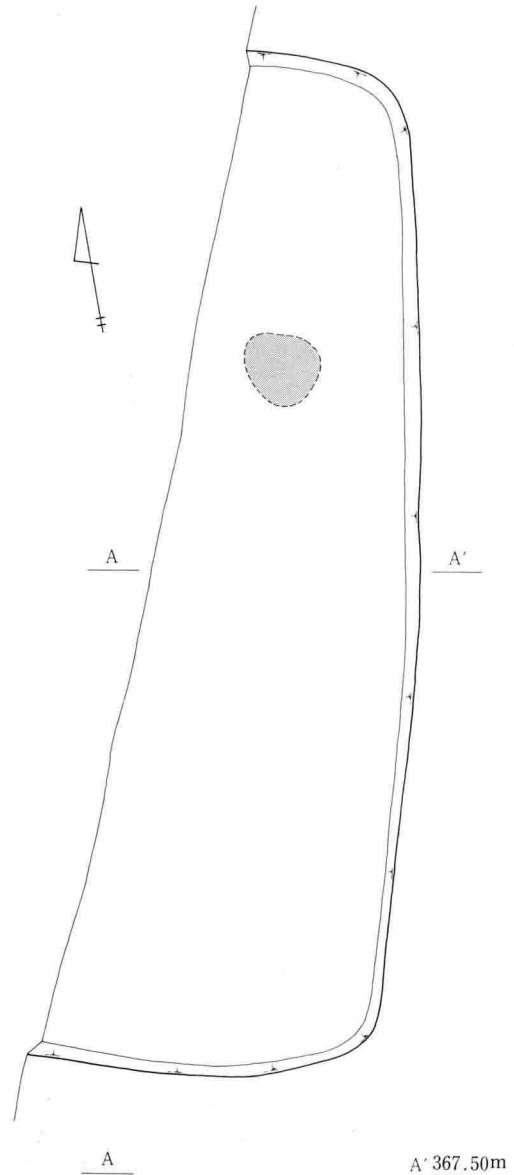
III-124 A 4号住居址出土土器実測図

甕、土師器杯 (III-123-1~3)・甕 (4・5) があり、古墳時代のものに土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕片がある。このほか細い篋状の骨角器片 (III-229-21) が出土している。

(8) A 4号住居址

遺構 調査区北端中央に位置し、調査は南側の一部を実施したにすぎない。この住居址の大きさからY地区へも延びていそうであったが、その痕跡も認められなかった点を考えれば、2軒複合の住居址である可能性が高い。即ち南壁の中央付近にある屈曲部をもって分離する。調査した計測値等を記すると、形態は隅丸(長)方形を呈し、東西軸8.1mの規模になる。掘り込みは、各壁とも25cm内外である。床面は西に傾斜し、礫の露出が認められる。焼土は東壁よりに認められたがカマドではないであろう。柱穴等は認められなかった。

遺物 出土量は少ない。器種には、土師器杯 (III-124-1・2)・甕 (7)、須恵器杯 (3・4)・小形壺 (5)・甕 (6)・蓋、灰釉陶器碗等である。

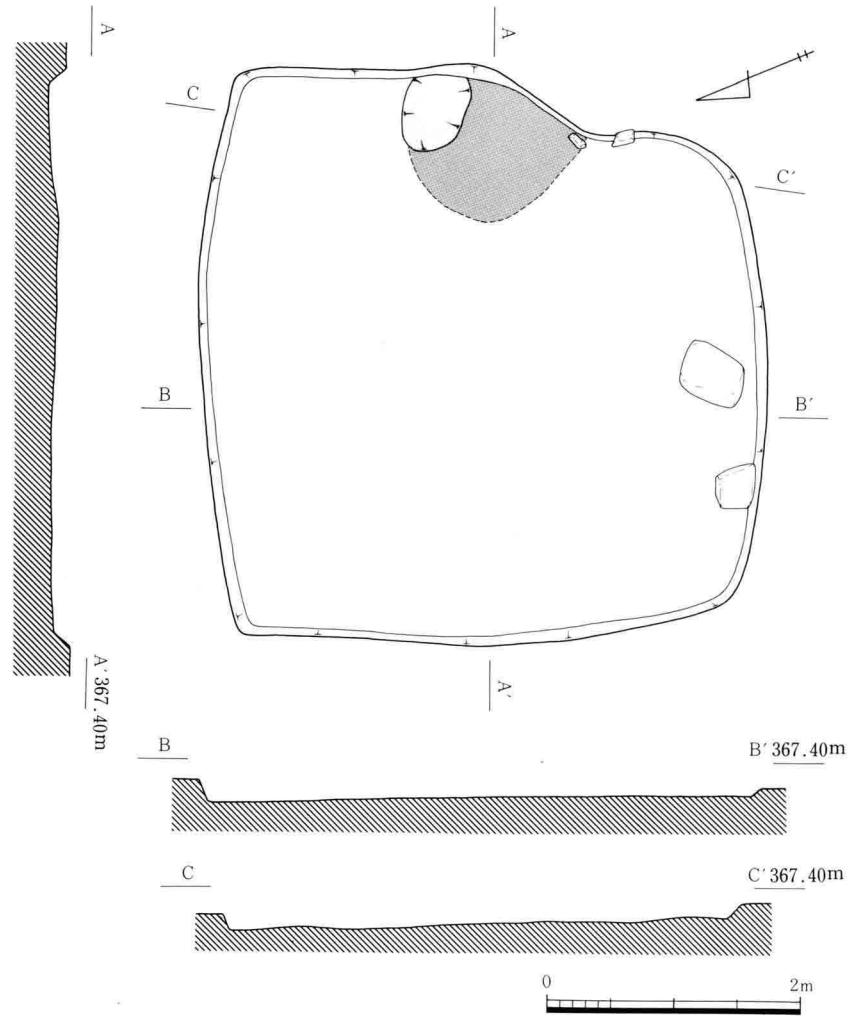


III-125 A 4号住居址実測図

(9) A 5号住居址

遺構 A 6号住居址との関係・調査経緯についてはA 6号住居址の項で触れた。形態は隅丸方形を呈するが、東壁が張り出すほか各壁とも丸味を帯びる。規模は主軸4.57m・短軸4.46mで、主軸方向はN-113°-Eを指す。掘り込みは、北壁21cm・南壁39cm・東壁22cm・西壁28cmを測る。床面は平坦であるが西・北方向へ傾斜する。西壁付近にA 1号集石址の礫の露出がある(III-127)。カマドは東壁中央に構築されるが、厚さ6cm程の焼土が舟底状ピット内に堆積していたのみであった。遺物はこの付近及び東壁下に集中して認められ、南壁付近に工作台と思われる自然石が置かれていた。柱穴はない。

遺物 出土量は多い。器種に

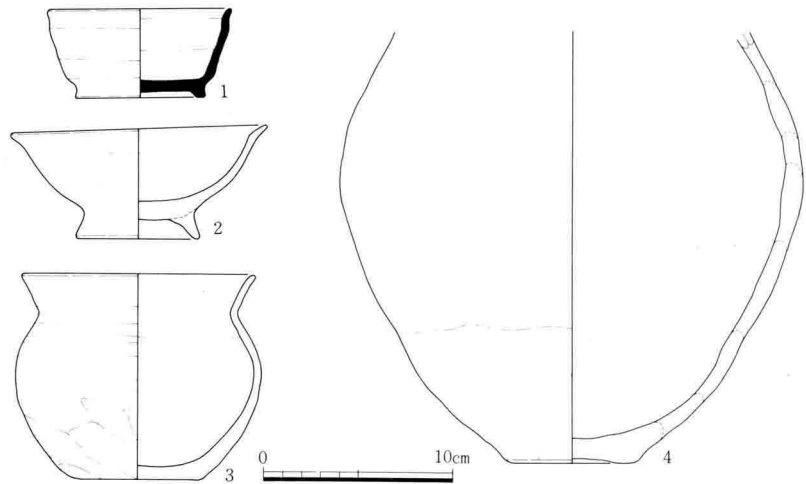


III-126 A 5号住居址実測図



III-127 A 5号住居址

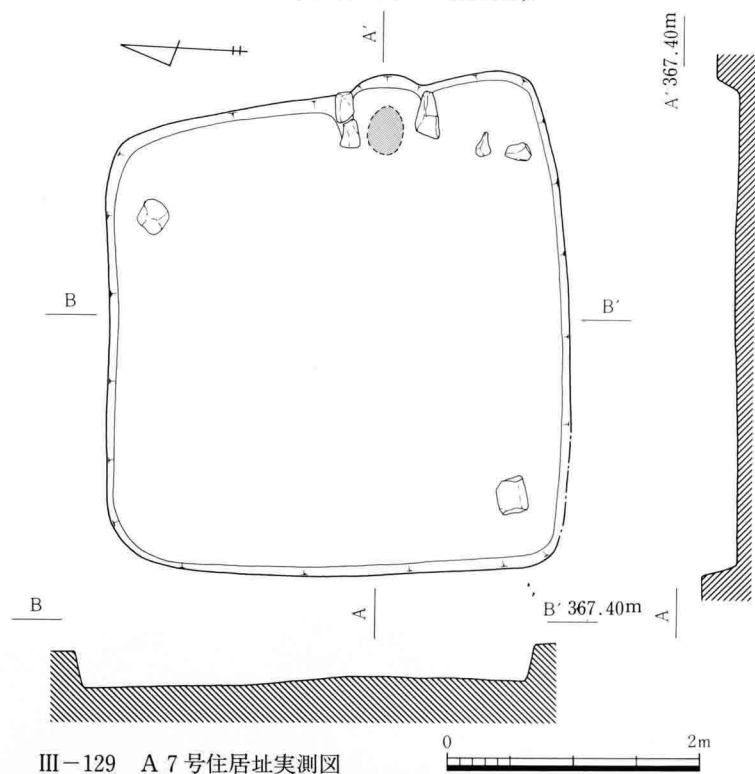
は、須恵器高台付坏（Ⅲ-128-1）・坏・蓋、土師器坏・高台付坏（2）・鉢（3）・甕（4）、灰釉陶器碗等がある。このほか筒状鉄製品（Ⅲ-231-19）・断截平滑化獣骨（Ⅲ-229-10）・鹿角切断先端加工品（12・13）・弓筈と思料される鹿骨製品（22）及び多量の獣骨片が出土している。



Ⅲ-128 A 5号住居址出土土器実測図

(10) A 7号住居址

遺構 調査区北端の東側にある、A 6号住居址と重複関係にある。形態は南壁がやや張り出す隅丸方形を呈する。規模は主軸3.96m・短軸3.66mを測り、主軸方向はN-89°-Eを指す。掘り込みは深く、北壁29cm・南壁27cm・東壁16cm・西壁28cmを測る。床面は北・西方向へ傾斜する。カマドは東壁南寄りに構築される石芯両袖形のものである。遺物はこのカマド周辺から多く出土している。



Ⅲ-129 A 7号住居址実測図

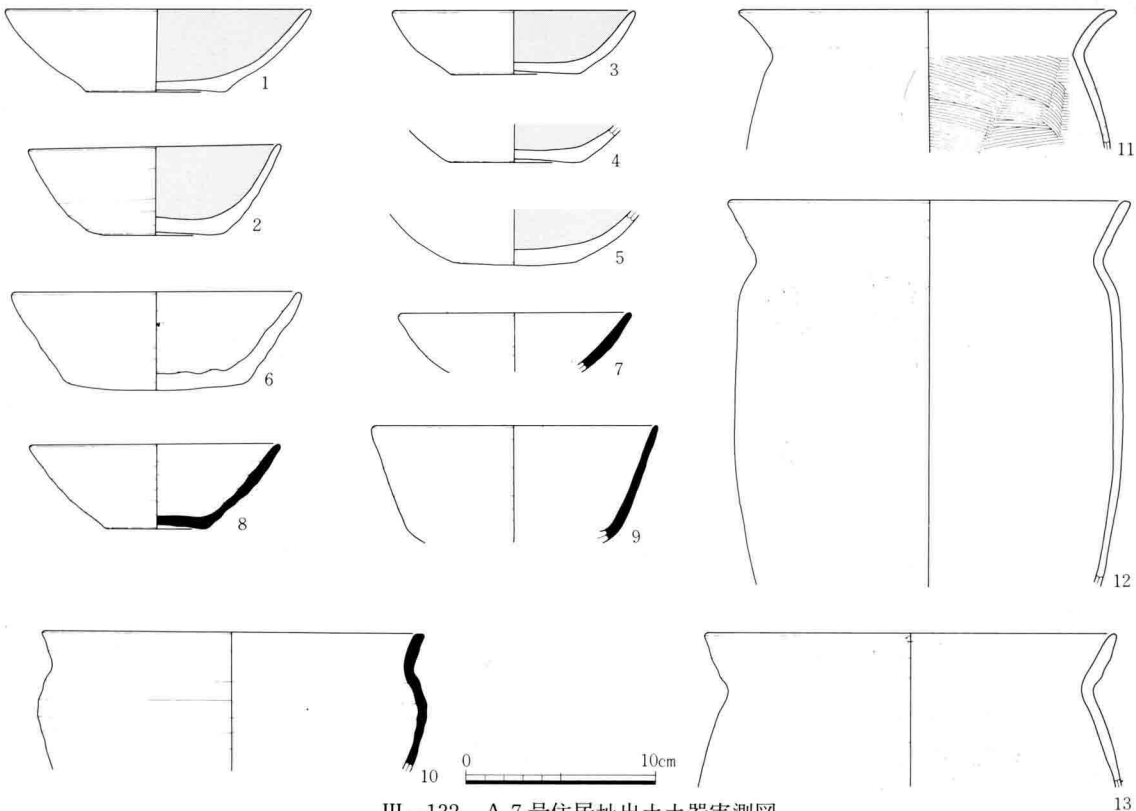
遺物 出土量は比較的多い。器種には、土師器坏（Ⅲ-132-1～6）・甕（11～13）、須恵器坏



Ⅲ-130 A 7号実測図カマド

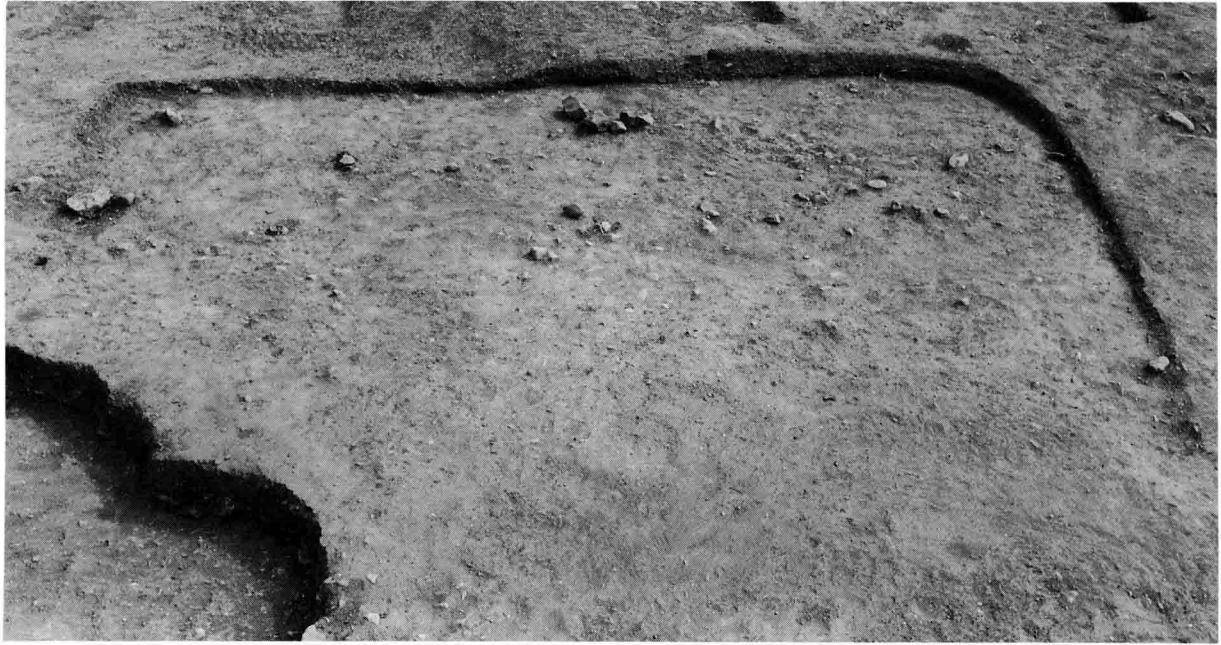


III-131 A 7号住居址

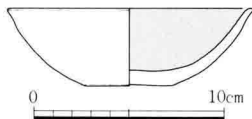


III-132 A 7号住居址出土土器実測図

(7~9)・鉢(10)・甕・蓋等がある。5の坏底部は回転ヘラケズリが施こされ、他は回転糸切り痕を残す。甕はヘラケズリ様ナデが多用されるが、11の内面調整はハケによっている。13はヘラケズリにより体部器壁が薄くなり所謂武蔵形甕形態になる。



III-133 A11号住居址

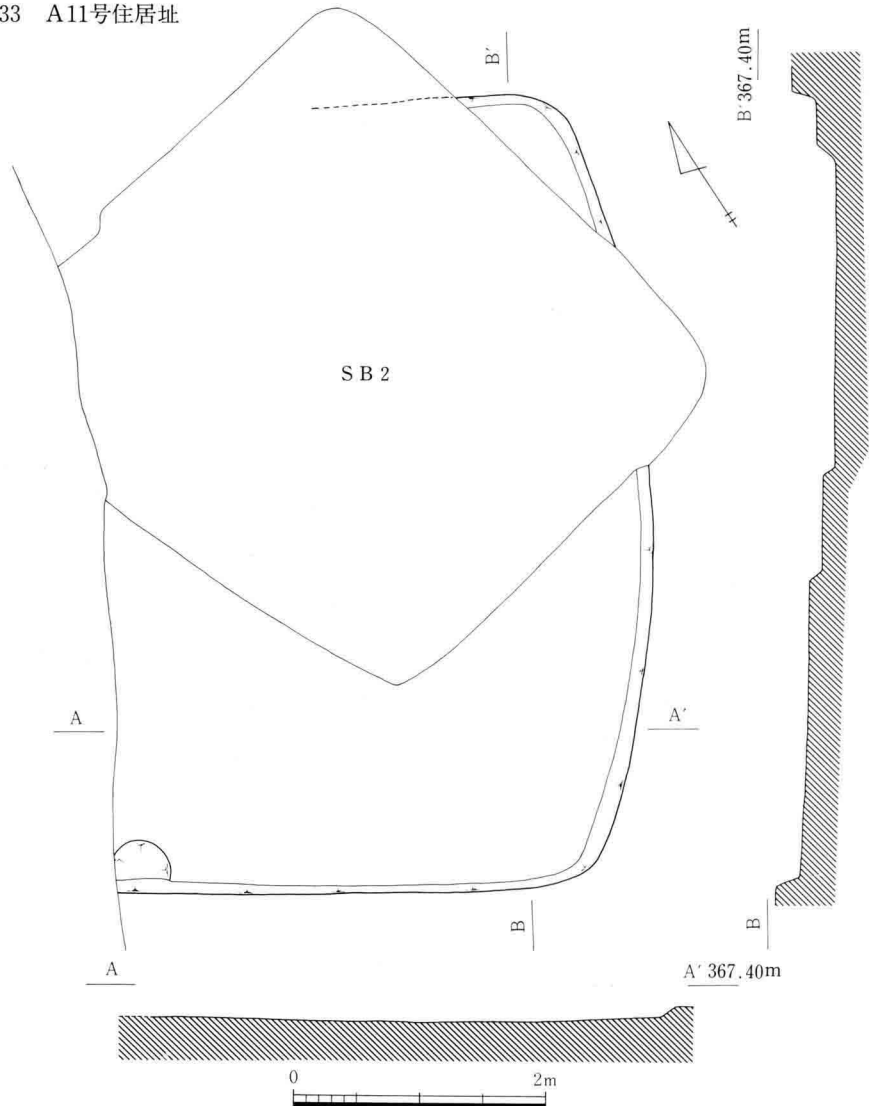


III-134 A11号住居址
出土土器実測図

(1) A11号住居址

遺構 調査区中央付近にあり、南側半分程調査したにすぎない。形態は隅丸方形を呈し、東西軸5.4mの規模になる。掘り込みは、南壁12cm・東壁3cm・西壁6cmであり、床面は平坦で、黄褐色砂質土の貼り床が認められた。カマド・柱穴は確認できなかった。

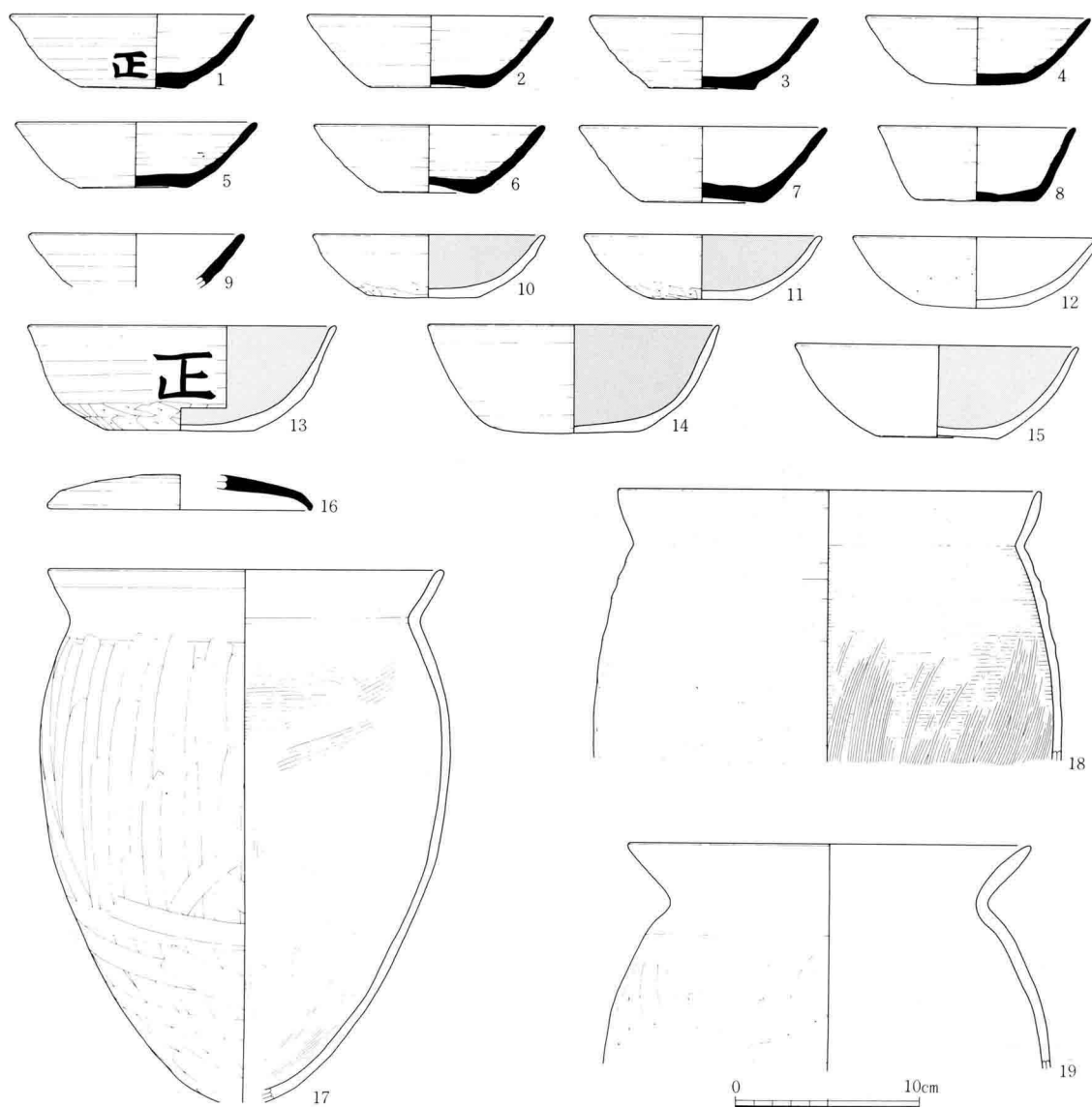
遺物 少量出土しており、図示できるものはIII-134の坏1点だけである。このほか土製円板(III-230-18)・鹿骨切断品(III-229-11)・獣骨の出土があった。



III-135 A13号住居址実測図

(2) A13号住居址

遺構 調査区下方に位置し、



III-136 A13号住居址出土土器実測図

A2号住居址と重複関係にあり、これよりも古い。また西側半分程は調査区域外へ延びる。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北軸6.18mを測り、該期のものとしては大形の住居址である。掘り込みは、北壁18cm・南壁15cm・東壁10cmを測る。床面は中央付近が若干低くなる。カマド・柱穴等は確認できなかった。

遺物 出土量は比較的多い。器種には須恵器坏 (III-136-1~9)・蓋 (16)、土師器坏 (10~15)・甕 (17~19)・羽釜、灰釉陶器碗等がある。坏の2点には墨書がある。甕外面はヘラケズ及びナデ調整が施こされ、内面はハケによっている。17は底部が丸底になり砲弾形を呈する。このほかにフィゴの羽口片・鉄滓が出土しており、土製円板 (III-230-21) や獣骨もある。

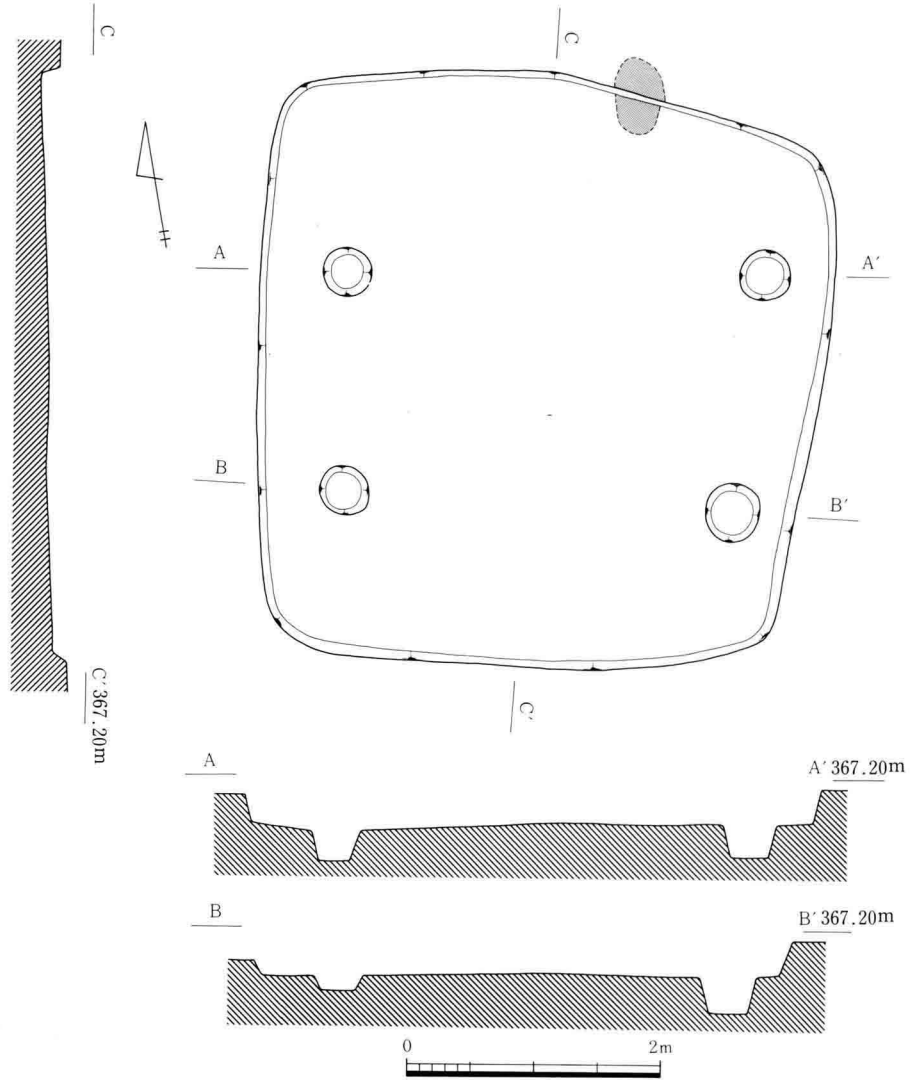
(13) A17号住居址

遺構 調査区の中央東に位置し、単独で検出された。形態は北壁がやや長く、各壁とも内湾気味になる隅丸方形を呈する。主軸4.73m・短軸4.48mの規模になり、主軸方向をN-12°-Eにとる。掘り込みは、北壁12cm・南壁13cm・東壁26cm・西壁14cmを測り、床面は中央付近で若干高くなる。焼土は北壁上面から床面近くまで認められた。カマドの痕跡であろう。柱穴は径38~46cm・深さ11~28cmのものが4個方形配列になる。

遺物 出土量は多くなく、時期を比定する土器に、須恵器坏の底部にヘラケズリが施こされた高台付坏と土師器甕片があるだけである。

(14) A20号住居址

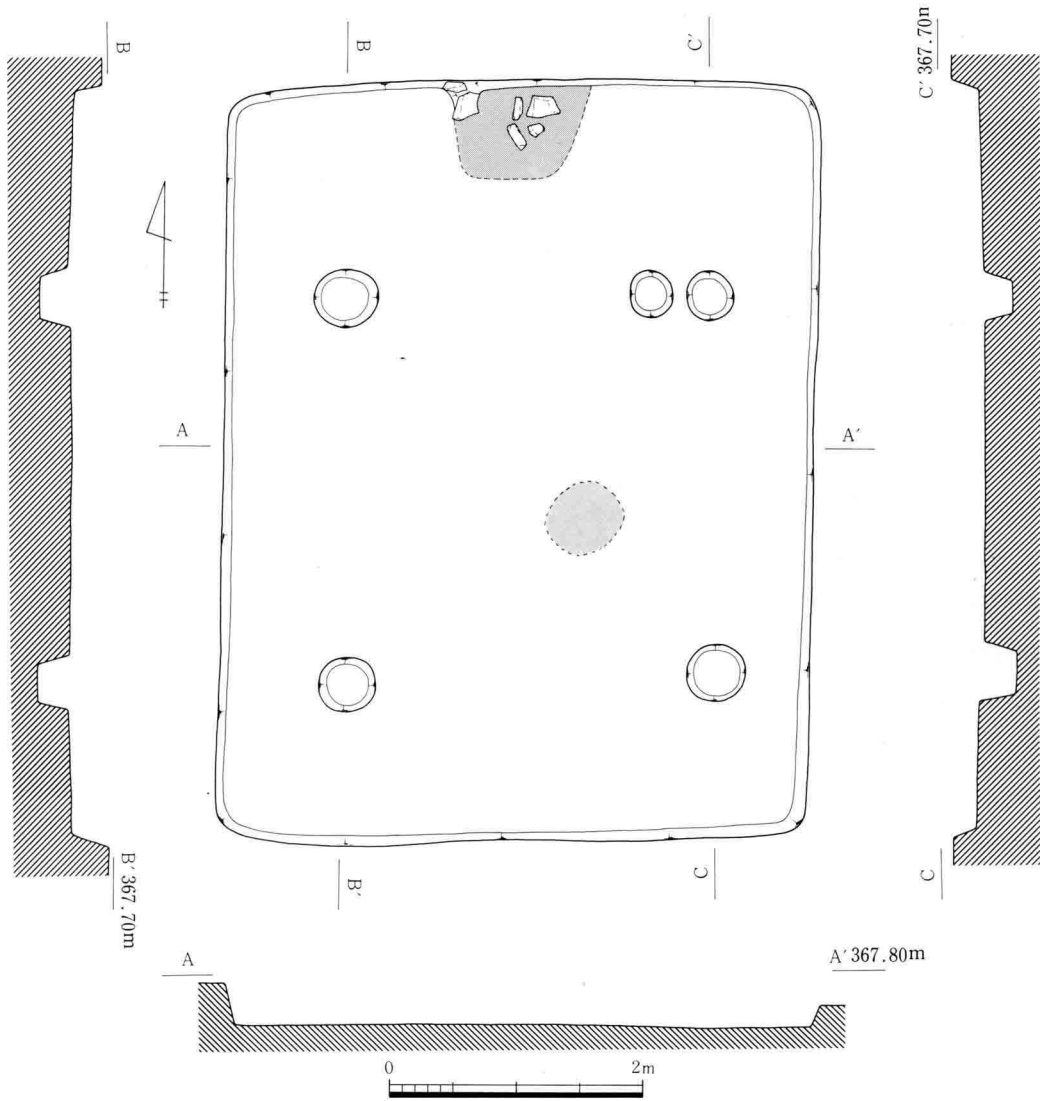
遺構 調査区上方の重複する住居址群内の1つで、最も新しい住居址である。形態は隅丸長方形を呈し、主軸6.03m・短軸4.7mの規模になる。掘り込みは、北壁21cm・南壁25cm・東壁15cm・西壁26cmを測り、床面は中央付近がやや凹み南側へ傾斜する。カマドは北壁中央に構築され、厚さ5cmの焼土と構築用礫が残存していた。また住居址中央付近にも約60cmの範囲で焼土が認められた。柱穴は4個方形配列で、北東のものには支柱穴がある。径42~46cm・深さ



III-137 A17号住居址実測図



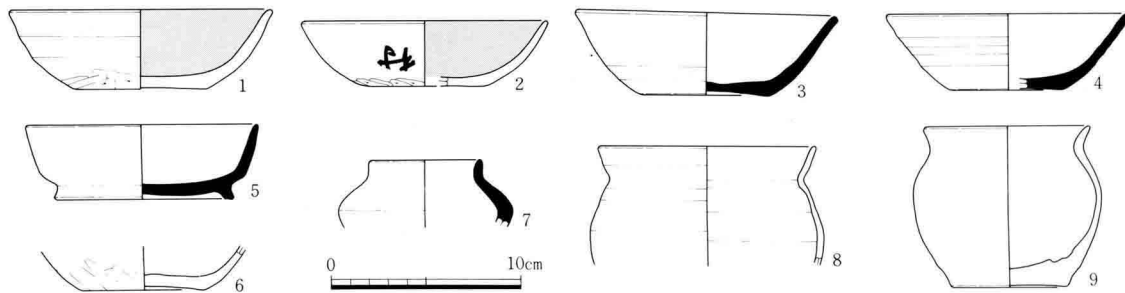
III-138 A17号住居址



III-139 A20号住居址实测图



III-140 A20号住居址



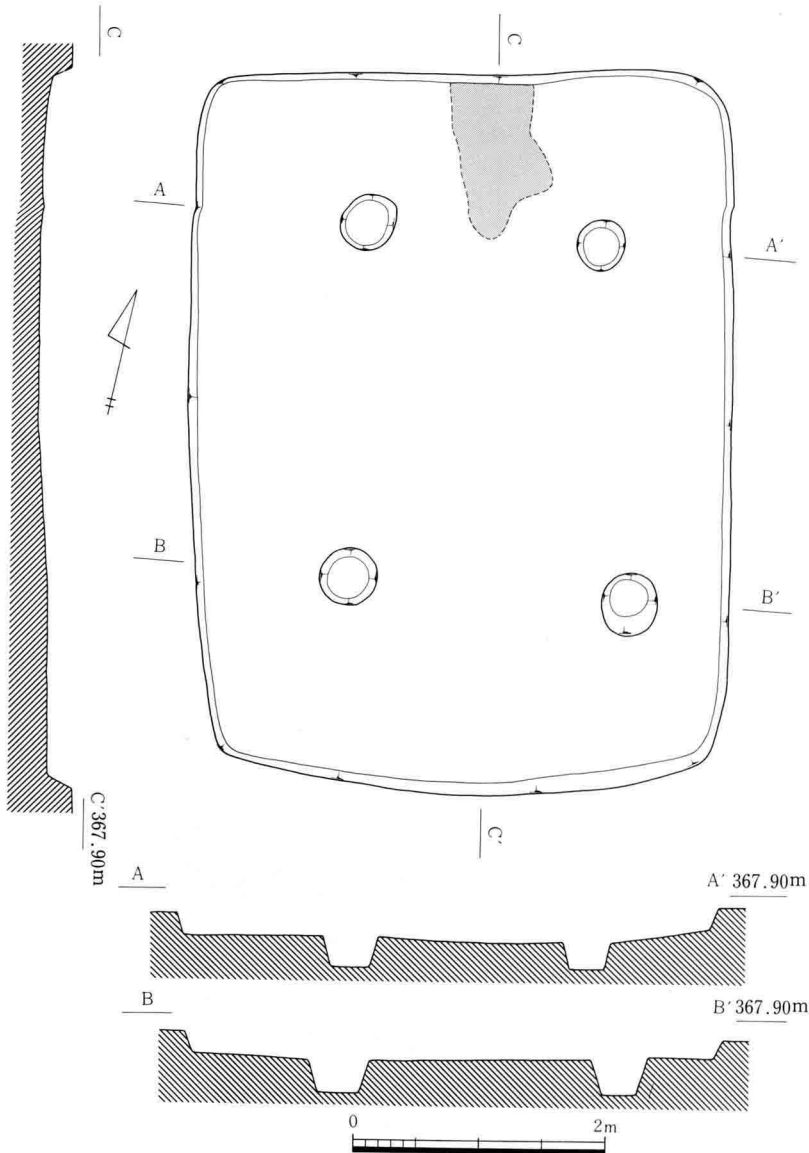
III-141 A20号住居址出土土器実測図

22~25cmとほぼ均等である。

遺物 出土量は多くない。器種には、須恵器坏 (III-141-3・4)・高台付坏 (5)・小形壺 (7)・蓋・甕、土師器坏 (1・2・6)・小形甕 (8・9) 等がある。2の坏には墨書がある。このほかに土製円板 (III-231-1~3)・獣骨片が出土している。

(15) A21号住居址

遺構 調査区上方で単独で検出された。形態は隅丸長方形を呈し、主軸5.72m・短軸4.36mの規模になる。主軸方向はN-12°-Wになる。掘り込みは、北壁17cm・南壁21cm・東壁15cm・西壁17cmを測る。床面は中央がやや凹み北側に傾斜する。礫の露出が著しいが焼土より観察すれば、使用時の面はこれほど露出していなかったものと思われる。カマドは北壁中央に構築され、壁際で厚さ15cm程の焼土塊を残存する。柱穴は4個確認され方形配列になる。径40~50cm・深さ20~25cmのものである。

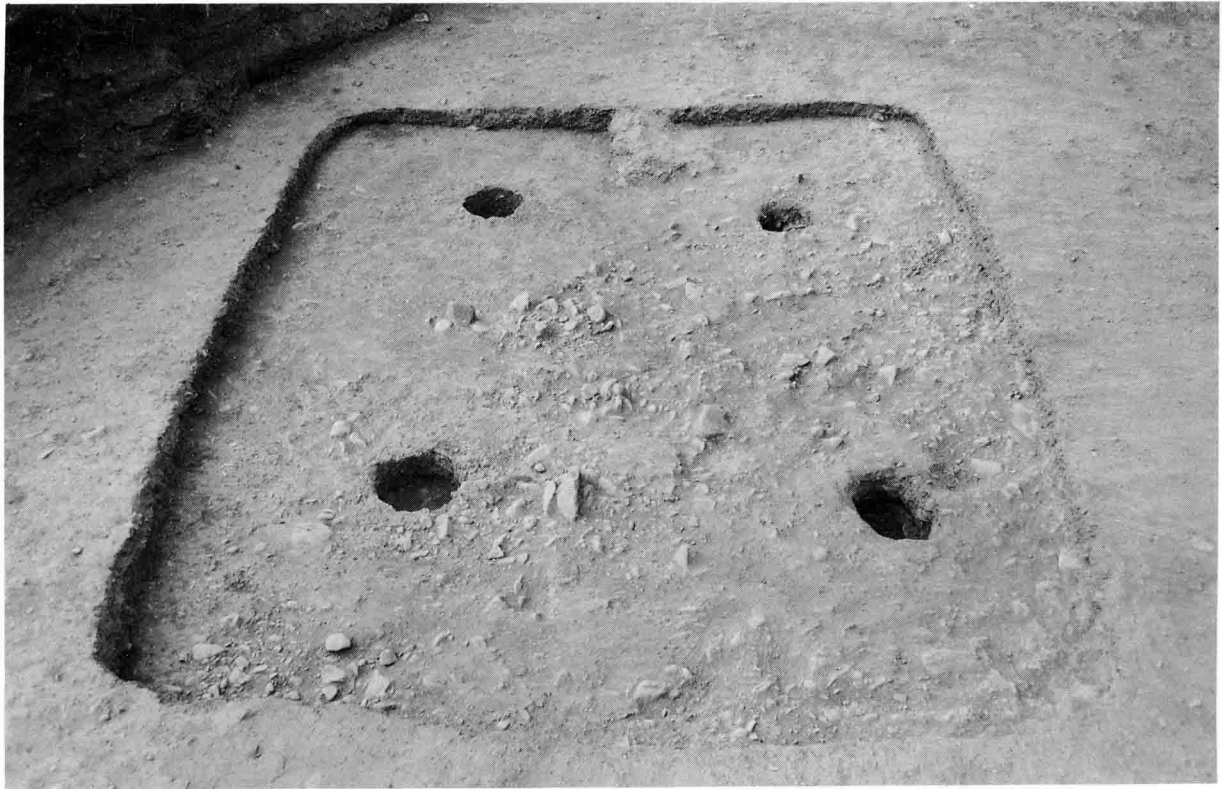


III-142 A21号住居址実測図

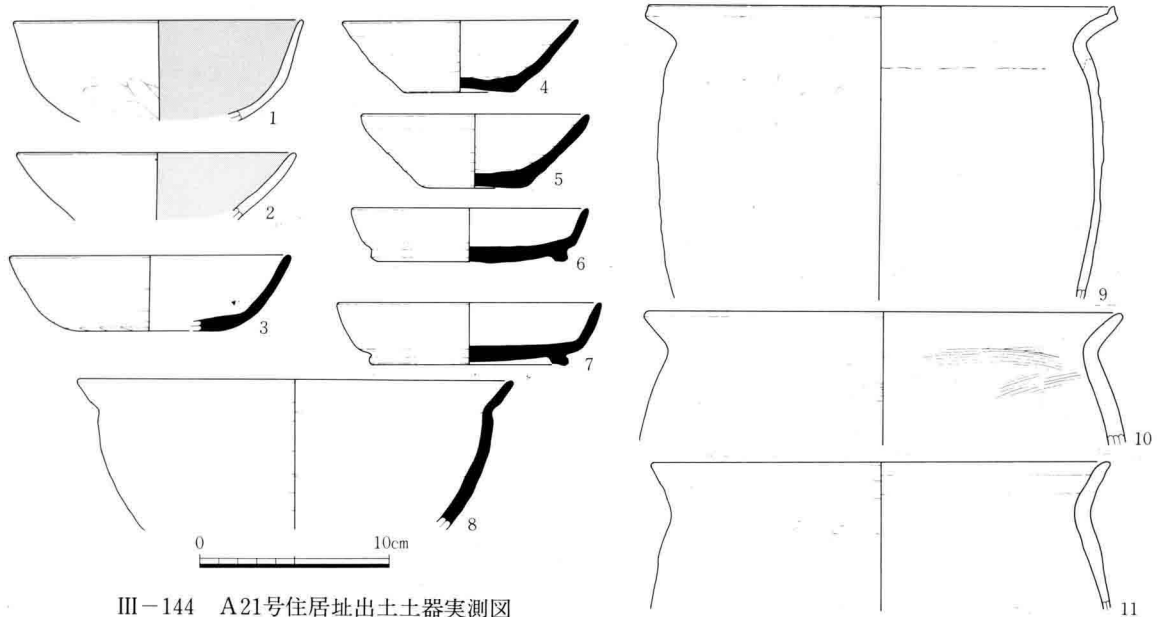
遺物 出土量はそれ程多くない。器種には、須恵器坏 (III-144-3~5)・高台付坏 (6・7)・鉢 (8)・甕、土師器坏 (1・2)・甕 (9~11) 等がある。3・6の坏は、ロクロからの切離を糸によっているが、周辺部には回転ヘラケズリが施こされる。7の底部調整は回転ヘラケズリである。

(16) A22号住居址

遺構 調査区の最も上方に位置し、単独で検出された。検出面は隣接するA21号・A24号住居址と同様の黄褐



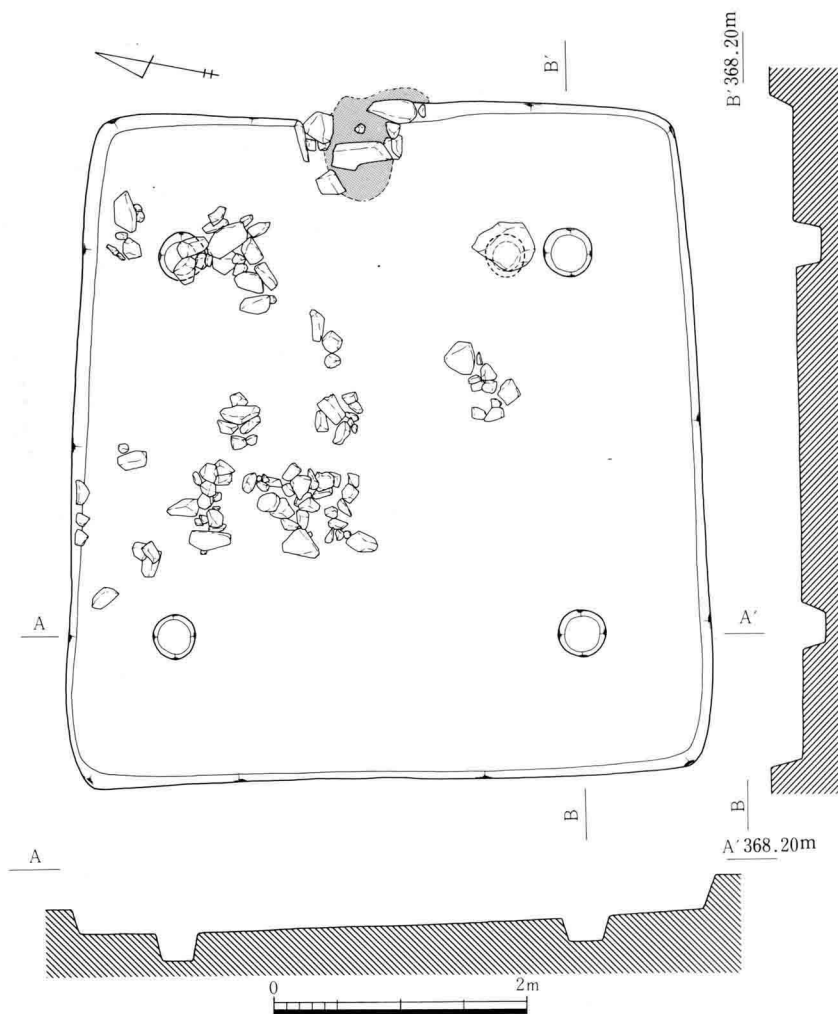
III-143 A21号住居址



III-144 A21号住居址出土土器実測図

色砂質土であり、覆土は黒褐色砂質土である。形態は隅丸方形を呈すが北壁はやや短い。規模は主軸5.36m・短軸5.02mで、主軸方向をN-78°-Eを指す。掘り込みは、北壁14cm・南壁26cm・東壁19cm・西壁11cmを測り、床面は平坦であるが西・北側へ傾斜を有する。床面上には人頭大から拳大の礫による集積が認められたが、この中から遺物等の出土はなく、焼土も確認されなかった。性格不明の集石である。カマドは東壁に構築され、立石芯粘土製両袖形のものである。左袖には3個の自然石が、右側にも2個の立石が旧来のまま残存していた。カマド焚口には天井石が2つに折れ落下しており、中央には支脚石が埋め込まれていた。カマド支脚部の内法42cmで、焼土の長軸は約80cmを測る。柱穴は4個確認され方形配列になる。径35~42cm・深さ17~21cm程のものである。

遺物 出土量は比較的多い。器種には、須恵器坏（Ⅲ-148-3～5）・高台付坏（6）・蓋（7）・甕、土師器坏（1・2）・甕（8）等がある。坏底部のロクロからの切離はヘラによっており、3・4にはその痕跡をとどめている。2・5・6の底部調整は回転ヘラケズリが施こされる。8の甕頸部付近には粘土紐の成形痕が観察されるなど技法的に古い要素を抽出することができる。このほか獣骨に切痕を残すもの（Ⅲ-229-8）が出土しており、肉を切離する際の痕跡か、骨製品の加工途上のもののいずれかであろう。



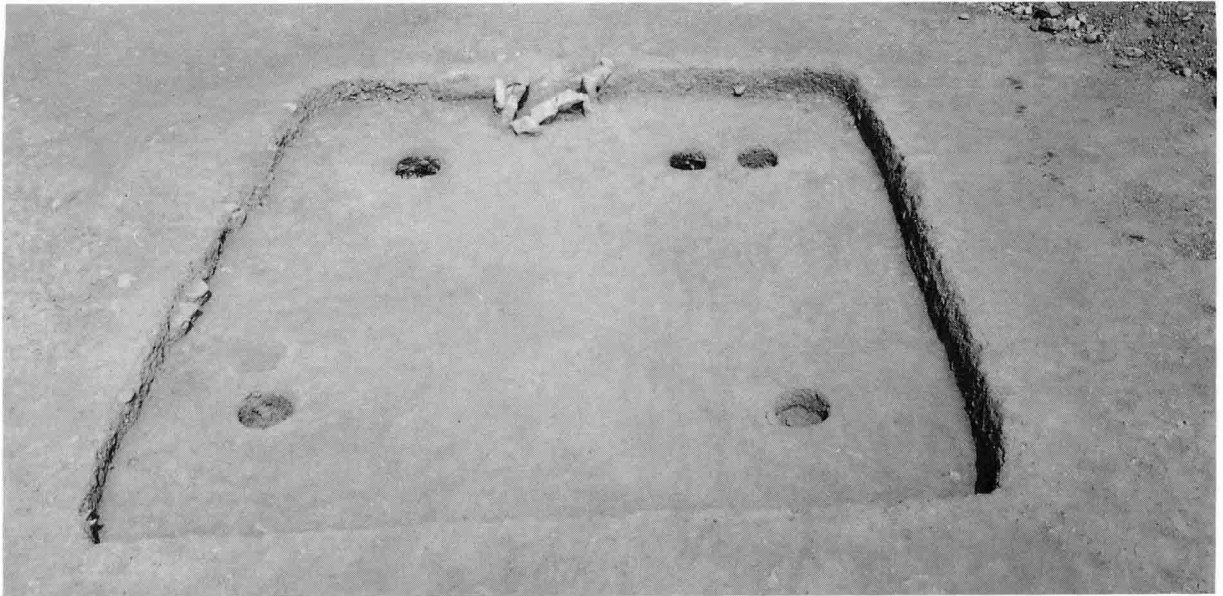
Ⅲ-145 A22号住居址実測図

(17) B1号住居址

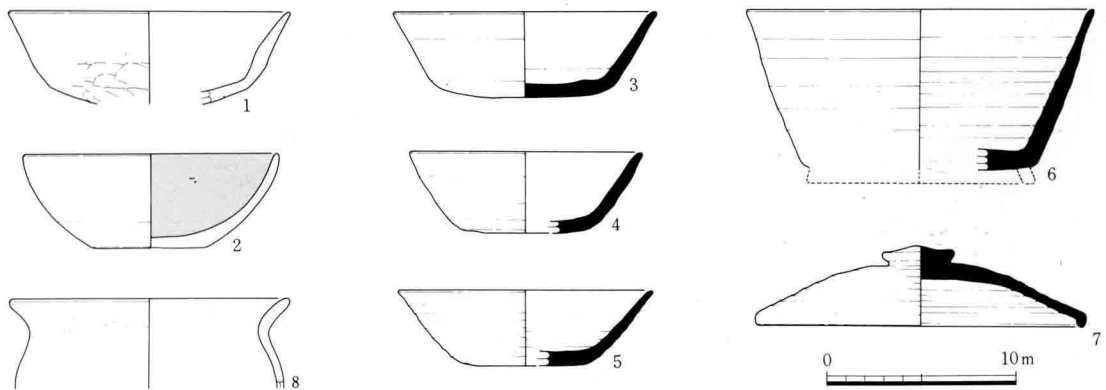
遺構 調査区北端にあり、B1号土壙墓と重複し、これより



Ⅲ-146 A22号住居址



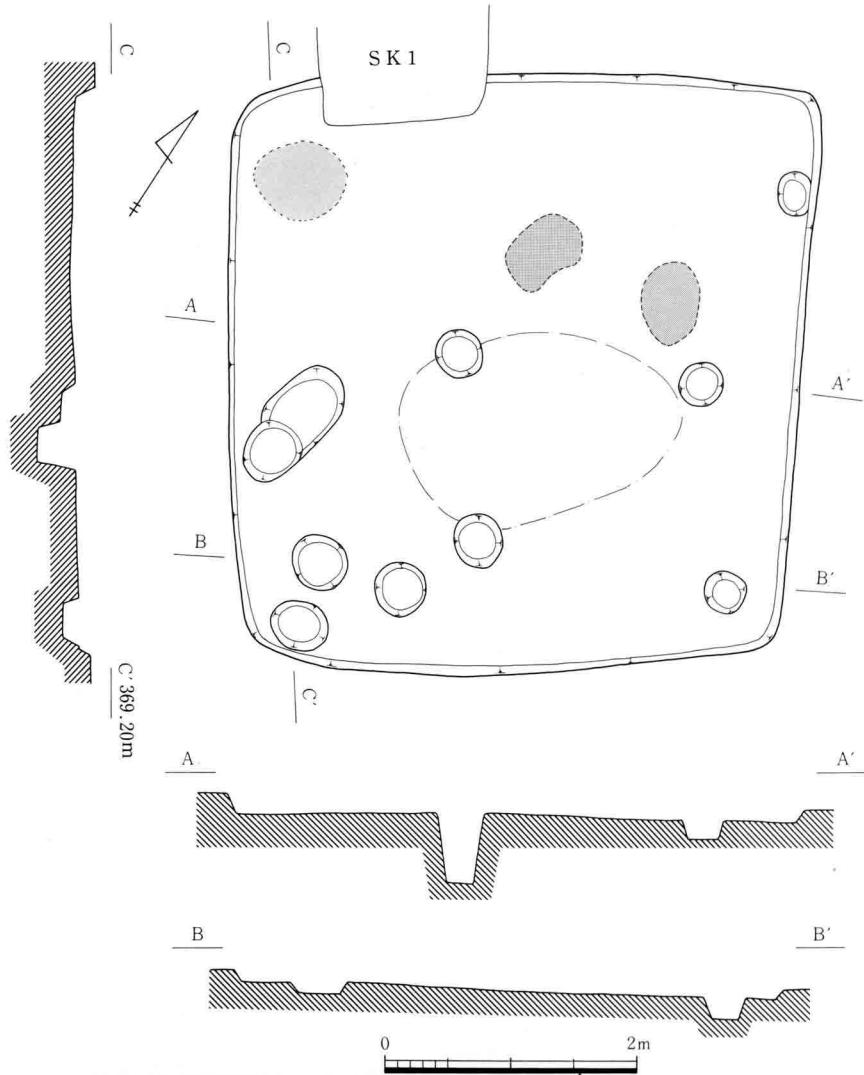
III-147 A22号住居址、同カマド



III-148 A22号住居址出土土器実測図

も古い。形態は隅丸方形を呈し、主軸4.77m・短軸4.56mの規模になる。主軸方向はN-148°-Eである。掘り込みは浅く、最も深い北壁で17cmを測る。カマドは北西隅に構築され、焼土及び構築用礫が散在していたほか床面上に2ヶ所焼土が確認された。カマド左側には工作台と思われる平石がおかれていた。また床面中央付近は貼り床され堅緻であった。住居址内のピットは本住居址のものではなく上面のピット群のものである。

遺物 出土量は多くない。器種には、土師器・皿(III-151-2・3)・甕、灰釉陶器碗がある。このほか鉄鍬茎(III-232-12)・刀子(18)・火打ち金具(III-231-16) 富寿神寶(III-232-37)、及び獣骨の出土も多い。



III-149 B1号住居址実測図

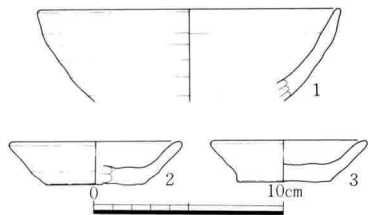


III-150 B1号住居址

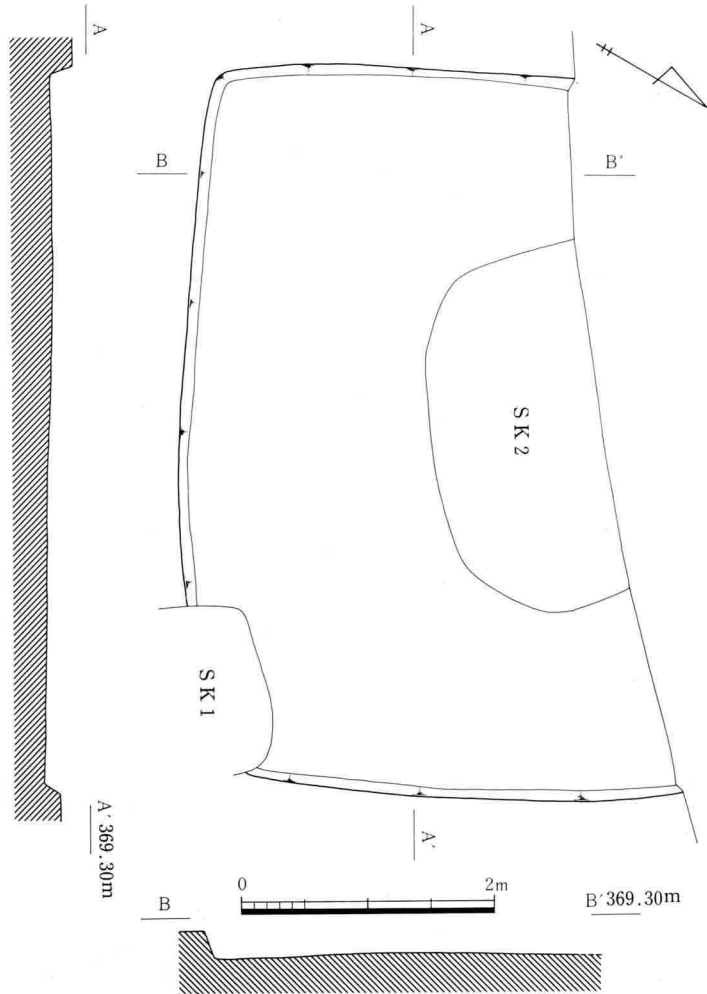
(18) B 2 号住居址

遺構 調査区北端に位置し、住居址の南半分を調査したにすぎない。B 1 号・B 2 号土壇と重複する。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、東西軸の規模は5.79mを測る。掘り込みは、南壁25cm・東壁10cm・西壁17cmになる。床面は平坦で東側へ傾斜する。カマド・柱穴等は確認できなかった。この住居址西側に後述する土器集中箇所があり、出土遺物の様相が同一であるので何らかの関係があったものと思われる。

遺物 出土量は少ない。土師器皿(Ⅲ-154-1~10)・台付皿(13~17)・坏(11・12)・甕等が出土している。このほかに獣骨の出土も多い。



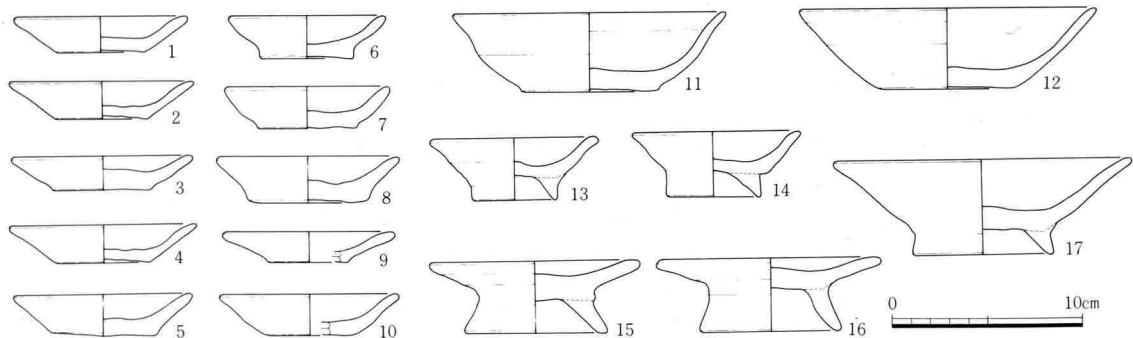
Ⅲ-151 B 1 号住居址出土土器実測図



Ⅲ-152 B 2 号住居址実測図



Ⅲ-153 B 2 号住居址

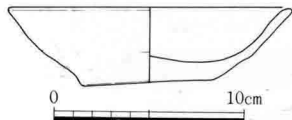


Ⅲ-154 B 2 号住居址出土土器実測図

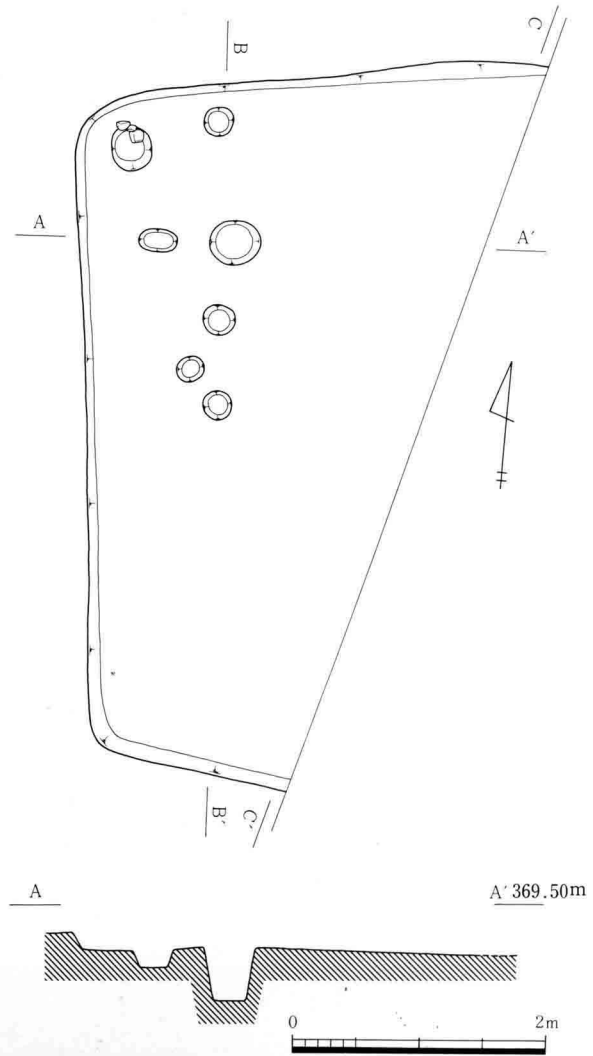
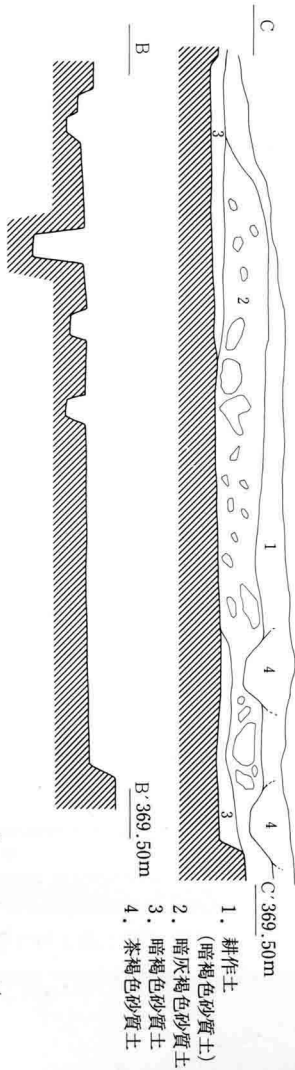
(19) B 3号住居址

遺構 調査区下方東側にあり、住居址の東半分は調査対象地区外に延びる。形態は隅丸方形を呈すると思われるが、南壁はやや張り出し気味になる。南北軸最大幅で5.65mを測り、掘り込みは浅く、北壁7cm・南壁15cm・西壁9cmである。床面は北側に傾斜する。カマドはない。北西隅に散在するピットは、本住居址のものではなく、上面のピット群に所属するものであろう。

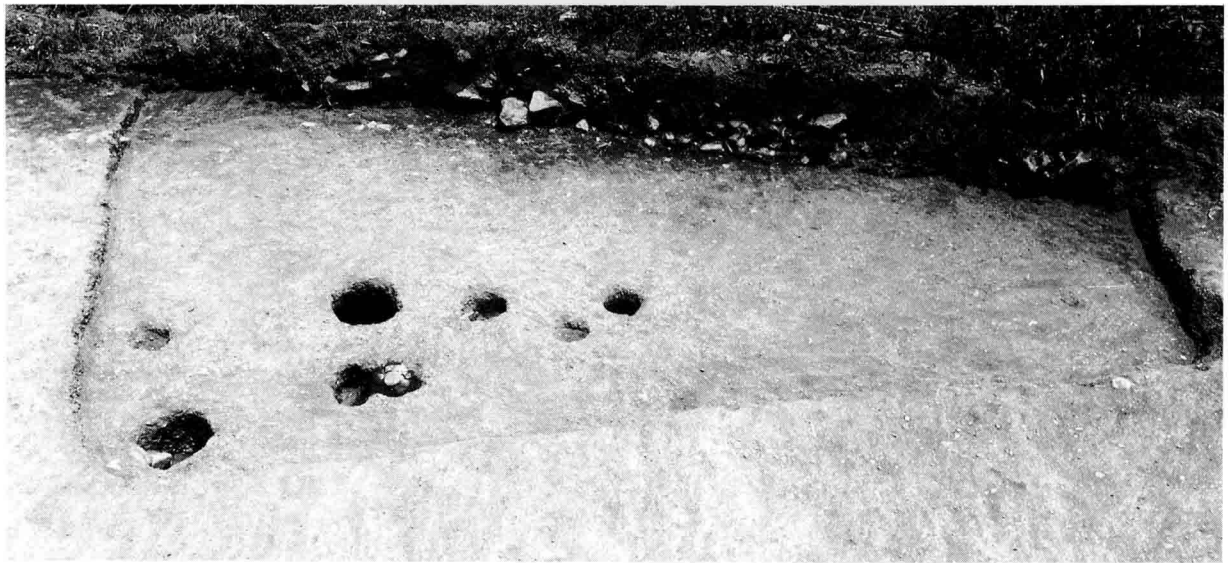
遺物 出土量は少ない。土師器坏(III-155)・甕、灰釉陶器碗・瓶の土器類のほか、鉄鏃茎(III-232-6・7)がある。



III-155 B 3号住居址出土土器実測図



III-156 B 3号住居址実測図

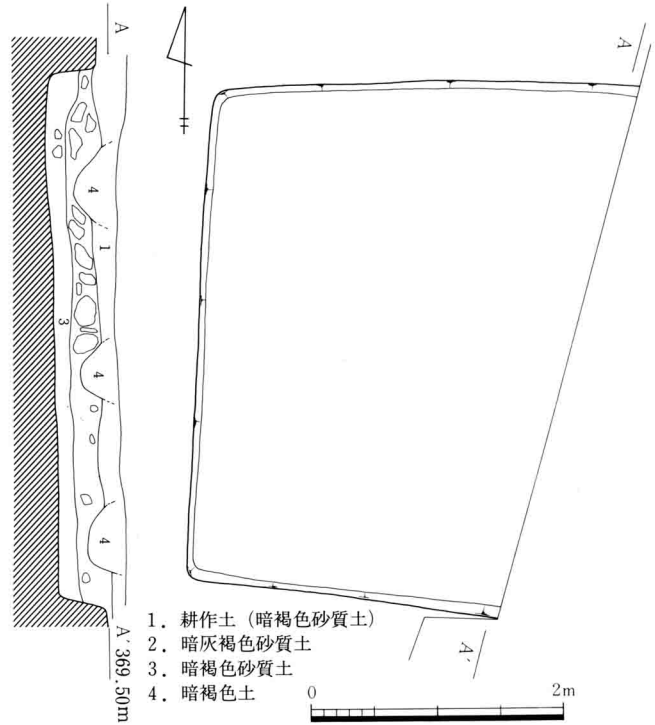


III-157 B 3号住居址

(20) B 4 号住居址

遺構 B 3 号住居址南側に隣接する。この住居址も東半分以上は調査対象区域外にある。形態は方形を呈するものであろうが南壁はやや張り出し気味になる。南北軸最大幅で4.28mを測り、掘り込みは深く、北壁54cm・南壁54cm・西壁25cmになる。床面は凹凸が見られやや北側へ傾斜する。覆土は2層になり上層は暗灰褐色砂質土、下層は暗褐色砂質土となり、両層とも砂利・礫を多く含む。カマド・柱穴は確認できなかった。

遺物 出土量は少なく図示できる土器はなかったが、須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕、灰釉陶器碗片のほかに、細い筥状の鹿角製品片(Ⅲ-229-16)、獣骨が出土している。



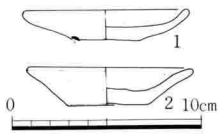
Ⅲ-158 B 4 号住居址実測図



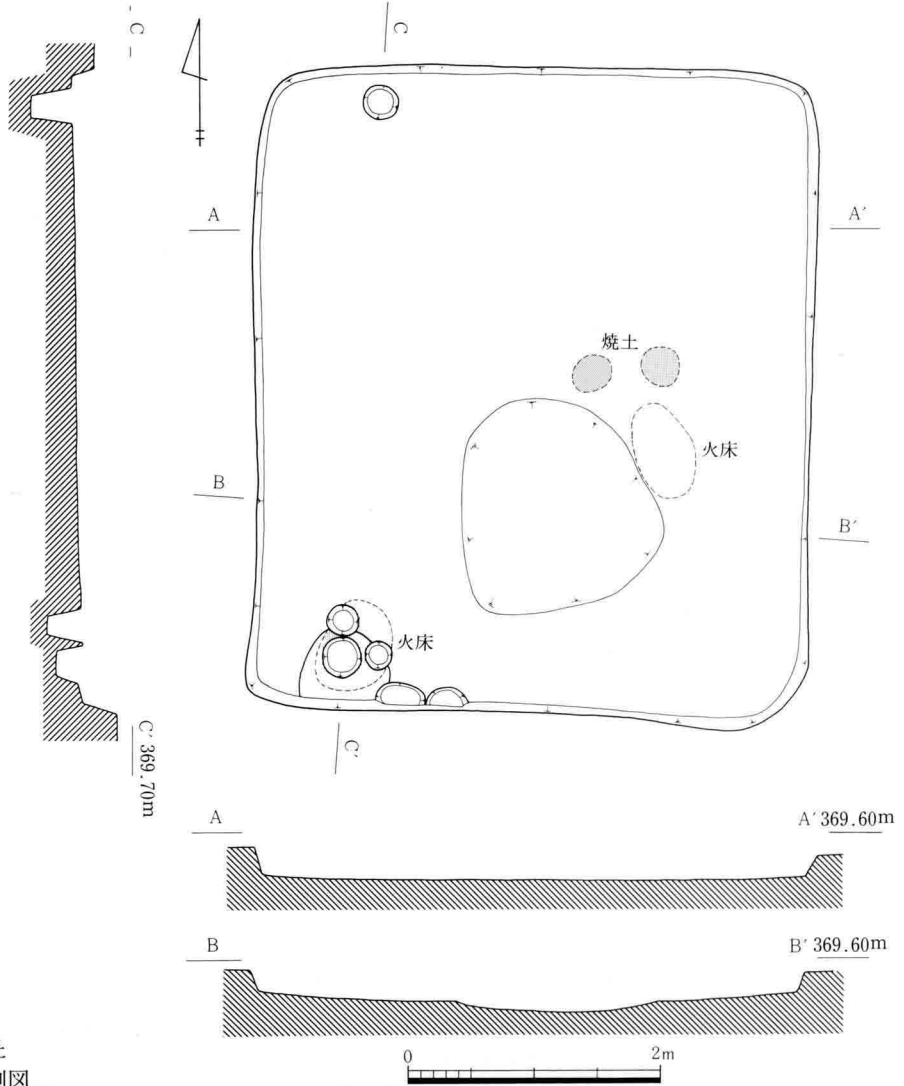
Ⅲ-159 B 5 号住居址

(2) B 5号住居址

遺構 B 4号住居址の西側に隣接し、単独での検出である。形態は隅丸方形を呈し、主軸5.12m・短軸4.44m測る規模になる。主軸線はほぼ南北線上にある。掘り込みは、北壁16cm・南壁18cm・東壁18cm・西壁14cmで、床面は東西で中央が凹み、南北では北側へ傾斜する。覆土は黒褐色砂質土で、人頭大から拳大にいたる礫が住居址全面に散在していた。後世の投棄によるものであろう。カマド南西隅に構築されていたようで、調査時には長軸75cm・幅55cmの火床が認められた。床面中央付



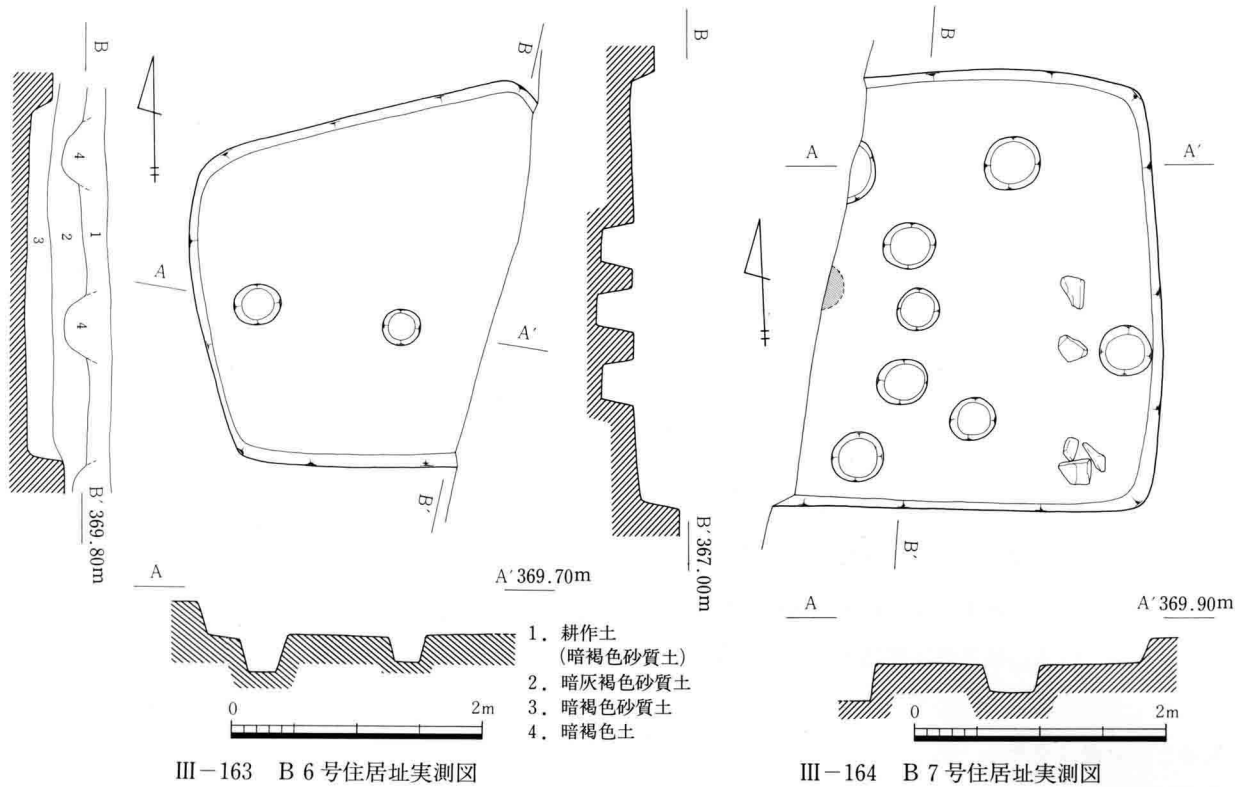
III-160 B 5号住居址
出土土器実測図



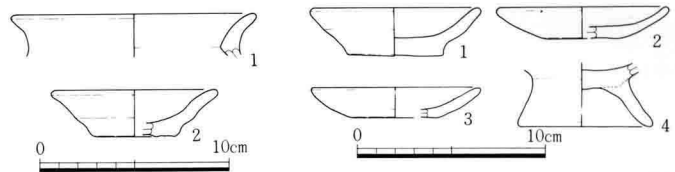
III-161 B 5号住居址実測図



III-162 B 7号住居址



(左) III-165 B 6号住居址出土土器実測図
(右) III-166 B 7号住居址出土土器実測図



近にも火床と焼土が見られ、西側に深さ6cm程の舟底状を呈した掘り込みがあった。住居址内のピットは上面のピット群のものであろう。

遺物 出土量は比較的多く、該期のもでも時間差を認める土器が出土している。器種には、土師器皿(III-160-1・2)・坏・甕・羽釜、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕・四耳壺、灰釉陶器碗・猿投窯系甕、鳴海窯系緑釉陶器碗等がある。このほか土製円板(III-230-16・17)・鉄製紡錘車(III-231-14)・鹿角(III-229-1)及び獣骨片が出土している。

(22) B 6号住居址

遺構 調査区中央東側にあり、東壁側は調査区域外にある。形態は隅丸台形状を呈し、短い西壁の長さは2.85mの小形な住居址である。掘り込みは深く、25~27cmになり、床面は平坦である。柱穴は中央付近に2個確認されたが上面遺構のものであろう。焼土等は確認できなかった。

遺物 出土量は多くない。器種には、須恵器坏・四耳壺、土師器甕(III-165-1)・皿(2)・坏、灰釉陶器碗等がある。このほかに鉄鏃茎(III-232-9)・小刀(16)・鉄釘(III-231-22・23)・棒状鉄製品(29)及び獣骨が出土している。

(23) B 7号住居址

遺構 調査区中央西側にあり、西壁付近は農道下へ延びている。形態は隅丸方形を呈し、南北軸3.47mの小形

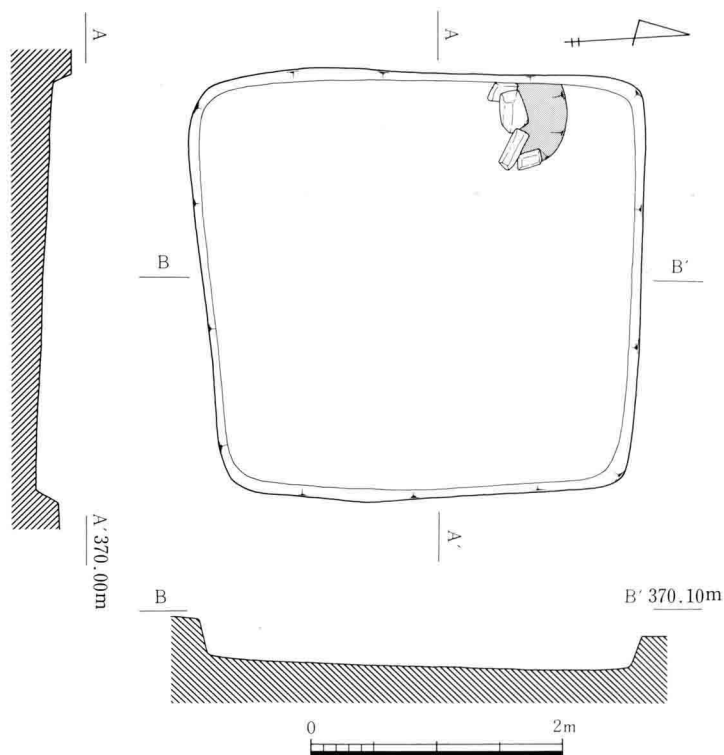
な住居址である。掘り込みは深く、北壁20cm・南壁30cm・東壁22cmを測り、床面中央がやや凹む。カマドは西壁に構築されている模様で、調査壁下に焼土が確認される。住居址の柱穴は不並びで上面遺構のものと推定する。

遺物 出土量は少ない。器種には、土師器皿（Ⅲ-166-1～3）・台付皿（4）・羽釜・甕・坏、灰釉陶器碗等がある。

(24) B 8 号住居址

遺構 調査区中央より単独で検出された。形態は西壁の長い隅丸台形状を呈し、主軸が短い住居址で、主軸3.36m・南北軸3.5mの規模になる。掘り込みは深く、北壁24cm・南壁23cm・東壁17cm・西壁14cmを測り、床面は西・北傾斜し、礫の露出が所々に見られた。カマドは北東隅付近に構築され、焼土・構築用礫を残存している。柱穴等は確認されなかった。

遺物 出土量は少なく、図上復元できる土器類の出土はなかった。器種には、須恵器坏・甕、土師器皿・坏・甕等がある。このほかに獣骨片も出土している。



Ⅲ-167 B 8 号住居址実測図

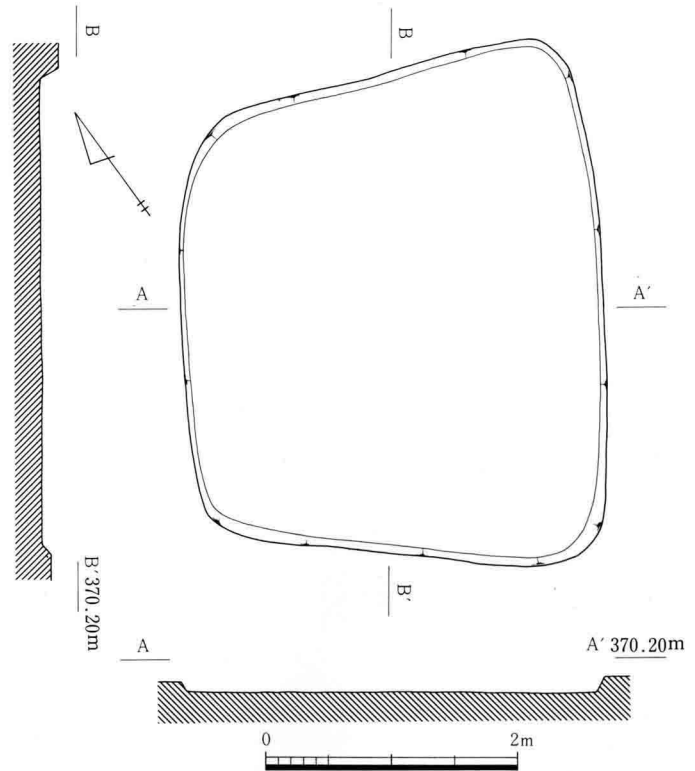


Ⅲ-168 B 8 号住居址

(25) B 9号住居址

遺構 調査区中央付近に位置し、単独で検出された。近隣遺構にB10号・B11号・B 8号住居址がある。形態は東壁が長い隅丸台形状を呈し、西壁3.2m・東壁4.16m・東西軸3.36mの規模になる。掘り込みは浅く、北壁9cm・南壁14cm・東壁13cm・西壁6cmを測る。床面は平坦で北側半分程は黒褐色砂質土の貼り床が認められ堅緻であったのに対し、南側は礫の露出が目立つ。覆土には礫の散在があり、III-170の写真に見られるように礫上に皿2枚が置かれている様子からすれば、住居使用時には礫が持ち込まれていた可能性もある。覆土には多くの炭化物、床面直上付近では漆黑になる程の炭化物が認められたが、焼土等のカマド施設は確認できなかった。柱穴はない。

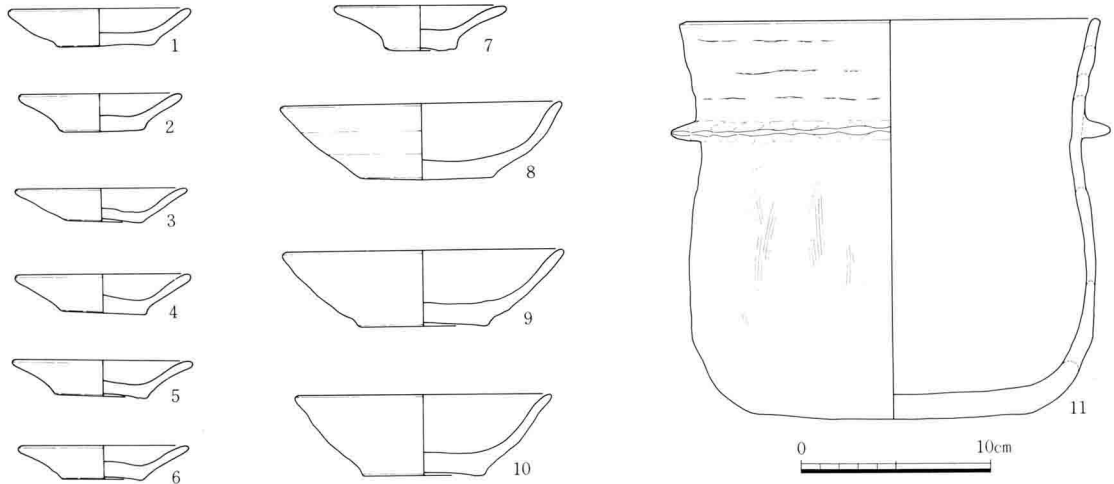
遺物 出土量は多くないが、完形又はそれに近いものが多い。器種には、土師器皿(III-171-1~7)・坏(8~10)・羽釜(11)・甕、灰釉陶器碗等がある。このほかに鉄鏝(III-232-5)及び獣骨が出土している。



III-169 B 9号住居址実測図



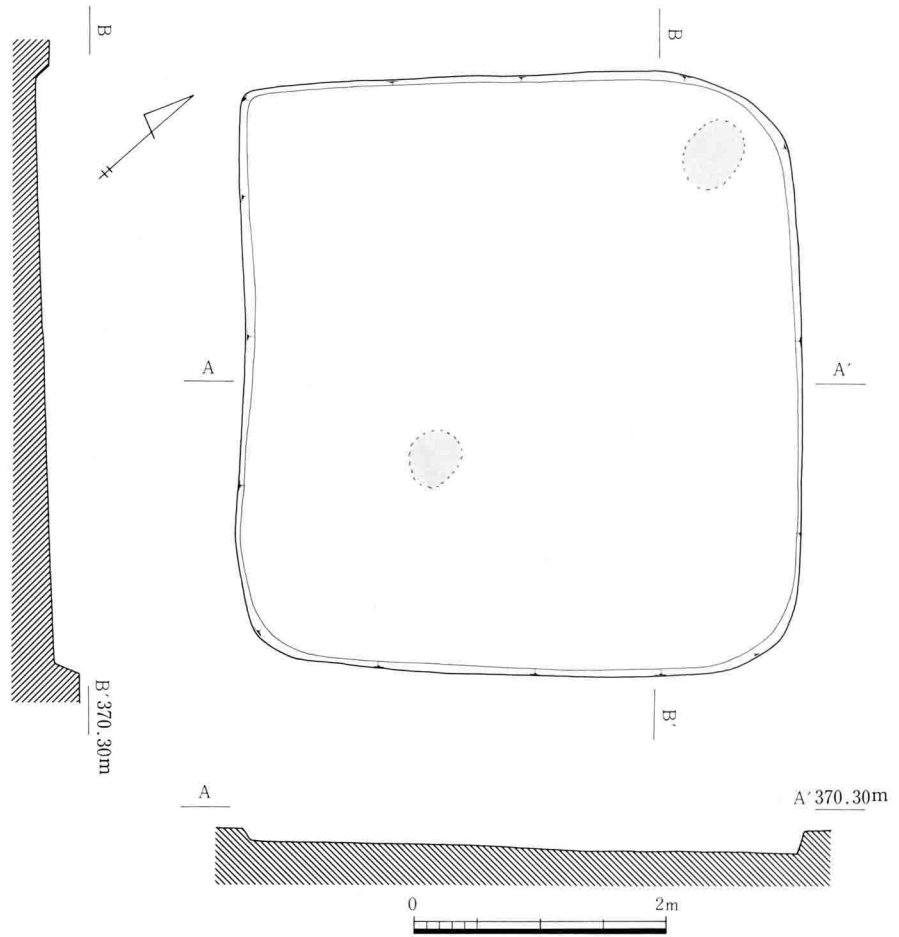
III-170 B 9号住居址



III-171 B9号住居址出土土器実測図

(26) B10号住居址

遺構 調査区中央に位置し、B16号住居址と重複関係にあり、これよりも新しいものである。形態は東壁がやや内側に張り出し、北西隅が直角近くになるほかは隅丸方形になる。規模は南北軸4.81m・東西軸4.45mになり、掘り込みは、北壁10cm・南壁15cm・東壁7cm・西壁9cmをそれぞれ測る。床面は平坦であるが、東・北側に傾斜を有する。カマドは北東隅に構築されており、長軸55cm程の焼土及び多量の炭化物が認められ、周辺に散在する礫は構築用のものであろうか。また住居址南寄りに火床があり、この周辺の床面は堅緻である。柱穴はない。

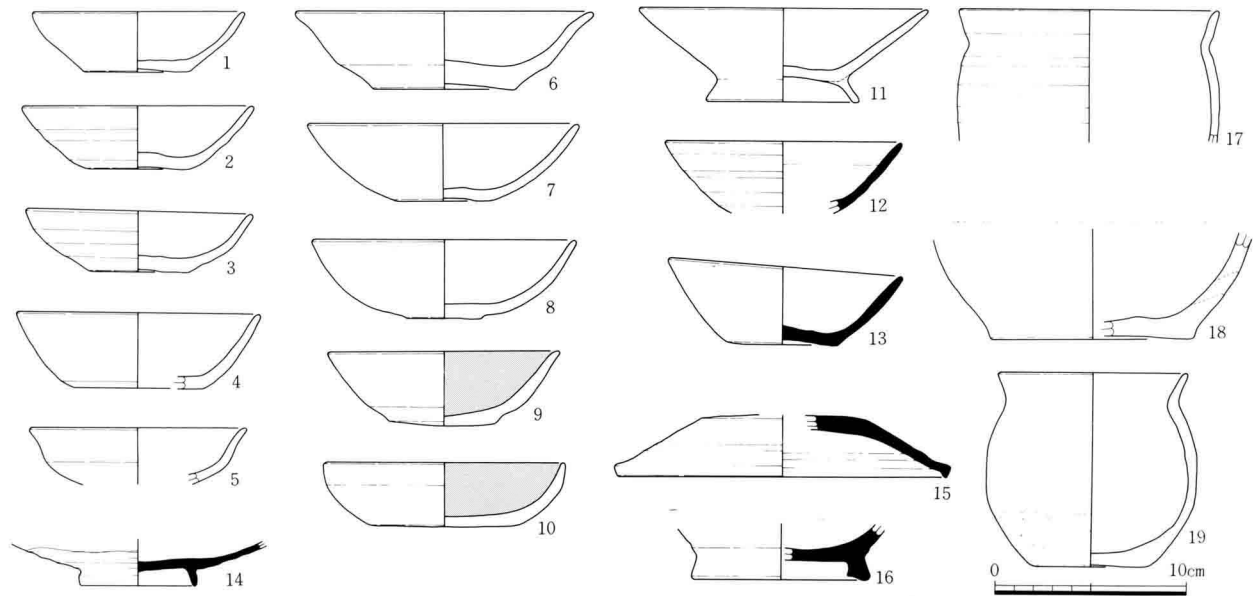


III-172 B10号住居址実測図

遺物 出土量は比較的多く、また完形又はそれに近いものが目立つ。器種には、須恵器坏 (III-173-12・13)・蓋 (15)・壺 (16)・甕、土師器坏 (1~10)・高台付坏 (11)・甕 (17~19)、東濃窯系椀 (14)・猿投窯系椀等がある。このほかに大観通寶 (III-232-39) 獣骨が出土している。

(27) B11号住居址

遺構 調査区中央東側にあり、住居址の東側半分程は調査区域外へ延びる。形態は隅丸方形を呈するものと思

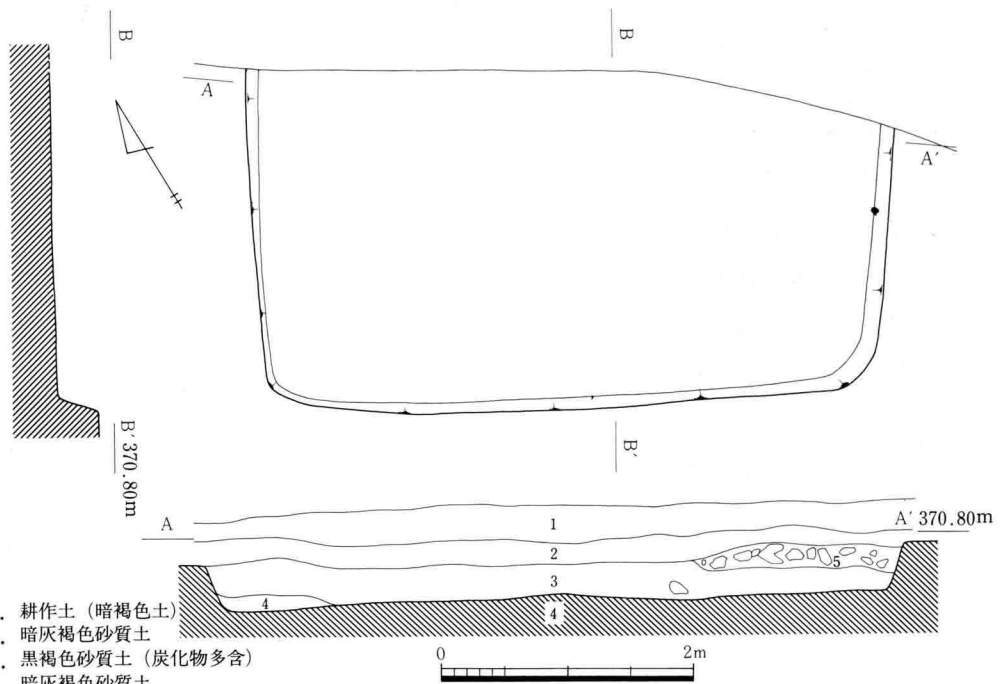


III-173 B10号住居址出土土器実測図



III-174 B11号住居址

われ、東西軸5.08mを測る。掘り込みは深く、南壁29cm・東壁39cm・西壁33cmになり、床面は中央部が若干高くなり凹凸がある。床面の礫の露出はほとんどない。この住居址の特色は、覆土が炭化物を多く含む黒褐色砂質土で、泥炭化と表現した方がよい程のあり様であったことと、この覆土及び床面から皿を中心とする多量の土師器・獣



III-175 B11号住居址実測図

骨が出土したことである。この炭化物混入の割合は東壁側が濃く水分を多く含み、西側では薄くなる。東壁の覆土上層礫混り暗灰褐色砂質土の存在もここだけに認められ、気になるところである。焼土等は確認できなかった。

遺物 出土量は多く、そのほとんどが完形もしくはそれに近い形状である。土師器皿(Ⅲ-176-1~15)・椀と表現した方が良いであろうか台付皿(16~31)・坏(34~36)・高台付坏(33)・甕、灰釉陶器碗片等の土器類の他に小刀(Ⅲ-232-17)・針状骨器(Ⅲ-229-14)及び多量の獣骨片が出土している。

(28) B12号住居址

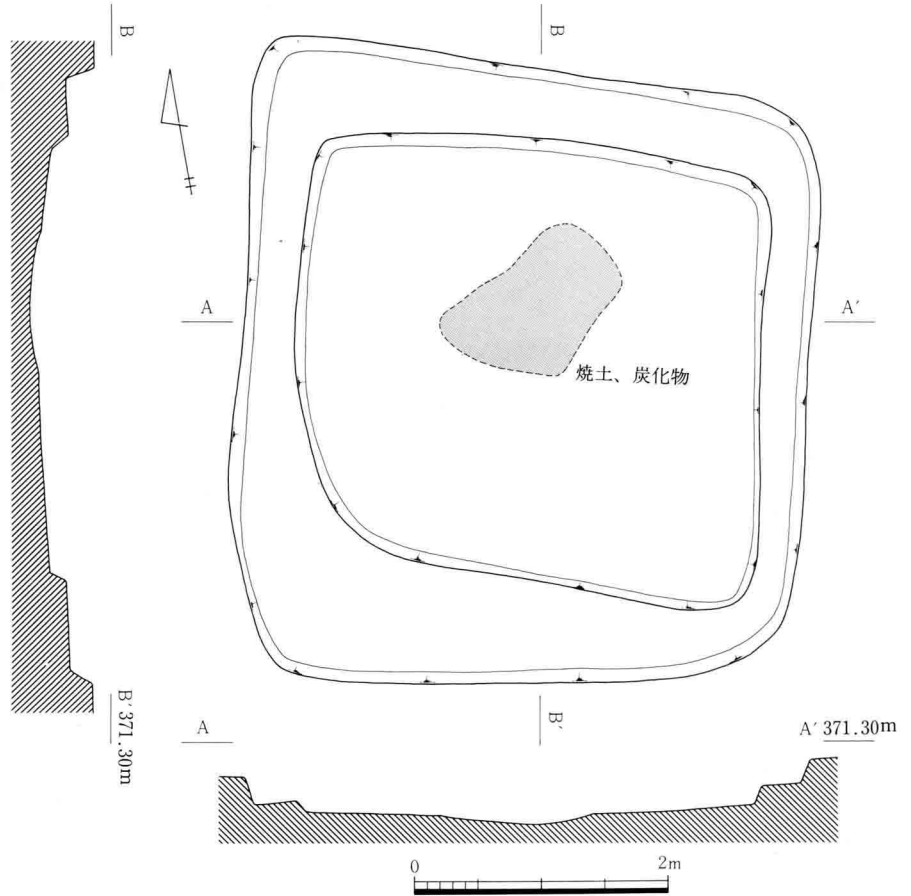
遺構 調査区の南端付近の遺構の1つである。この住居址は2軒重複している可能性もある。形態は隅丸台形状を呈し、西壁5.05m・東壁4.25m・東西軸4.5mの規模になる。外縁の掘り込みは、北壁15cm・南壁21cm・東壁



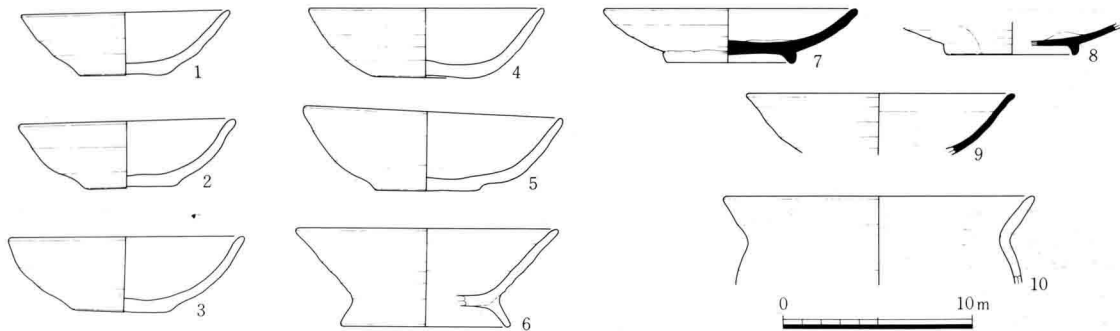
III-177 B12号住居址

20cm・西壁16cmである。内に更に不整隅丸方形の掘り込みがみられ、中央付近に浅い舟底状ピットがあり、焼土・炭化物を伴う集石が認められた。出土遺物のほとんどはここからのもので獣骨片も多い。規模は南北3.5m・東西3.7m程のもので、掘り込みは15cm前後になる。

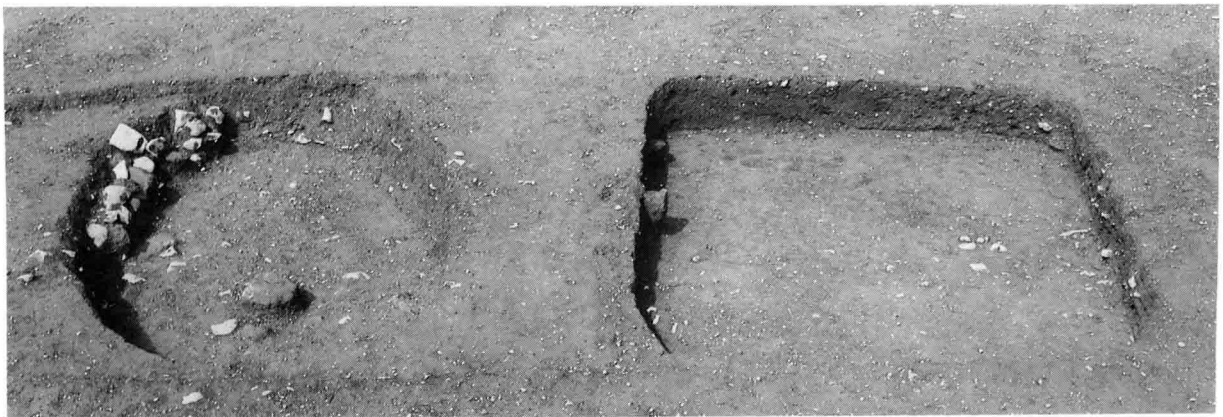
遺物 出土量は多くない。器種には、土師器坏類(III-179-1~6)・甕(10)・灰釉陶器皿(7・8)・碗(9)がある。このほか鉄鏃茎(III-232-10)・刀子(23)・棒状鉄製品(III-231-26)・細い篋状骨角器(III-229-17)が出土している。



III-178 B12号住居址実測図



III-179 B12号住居址出土土器実測図

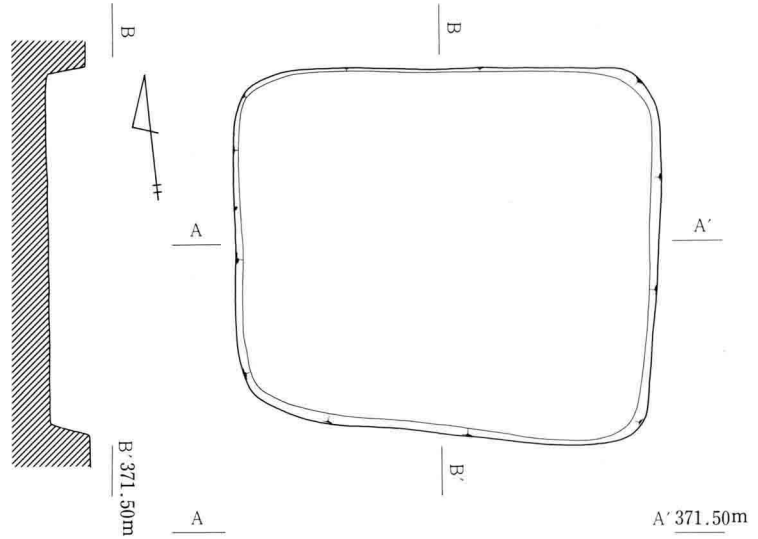


III-180 B13号・B14号住居址

(29) B13号住居址

遺構 調査区南端西側にある。東西軸3.37m・南北軸2.9mの台形状を呈する小形の住居址である。掘り込みは深く、北壁31cm・南壁31cm・東壁17cm・西壁39cmになる。床面は平坦で西北へ傾斜する。焼土等は確認できなかった。

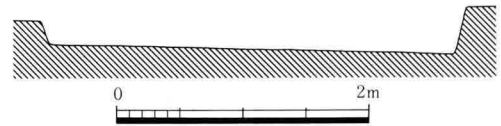
遺物 出土量は少ない。器種には、須恵器杯(Ⅲ-182-1) 灰釉陶器碗(2・3)・皿(4・5)・土師器皿(6・7)がある。このほかに獣骨片がある。



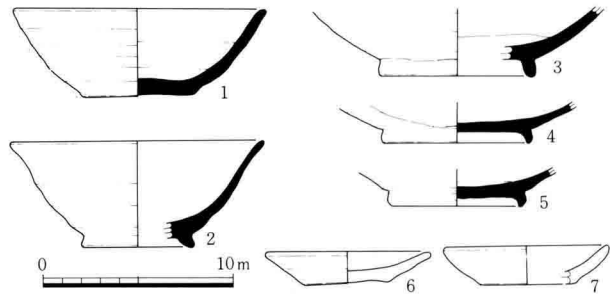
(30) B14号住居址

遺構 形態は楕円形を呈し、主軸3.25m・短軸2.5m程の規模になる。床面は平坦で、東寄りに1個の礫と焼土が認められた。南壁から西壁の一部にはⅢ-184に見られる石積みが残存していた。

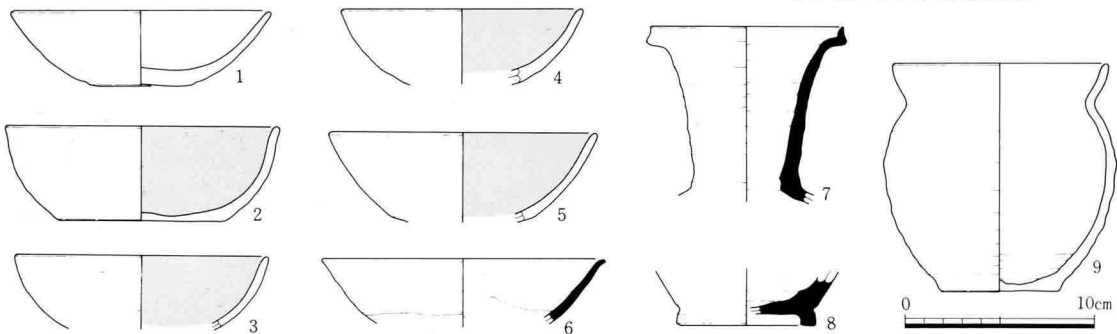
遺物 出土量は少ない。器種には、土師器杯(Ⅲ-183-1~5)・甕(9)、須恵器細口壺(7・8)、灰釉陶器碗(6)がある。



Ⅲ-181 B13号住居址実測図



Ⅲ-182 B13号住居址出土土器実測図



Ⅲ-183 B14号住居址出土土器実測図

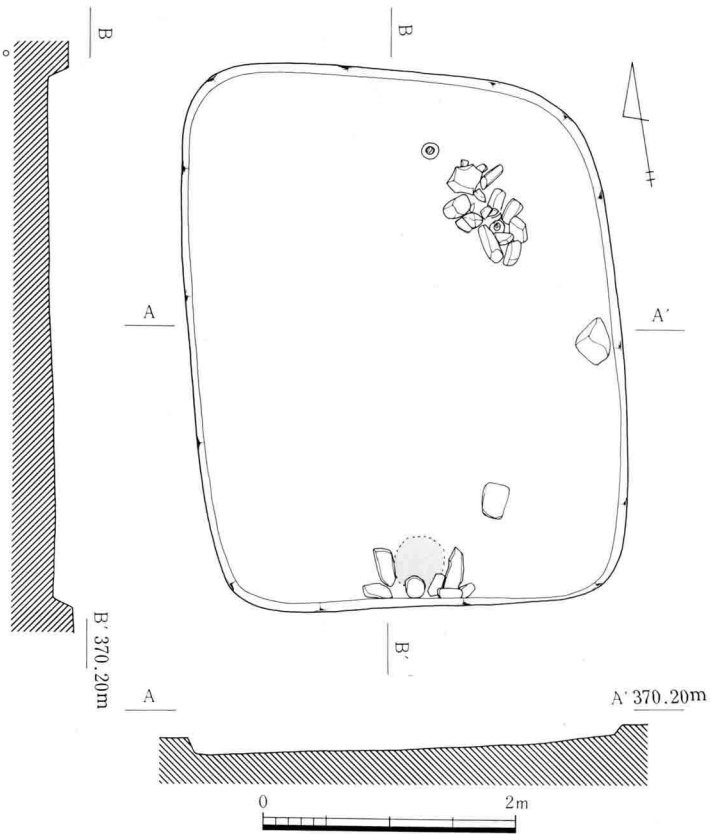


Ⅲ-184 B14号住居址壁石積状態

(31) B15号住居址

遺構 調査区中央に位置し、単独で検出された。形態は北東隅が丸味を有する隅丸長方形を呈する。主軸4.28m・短軸3.45mの規模で、掘り込みは浅く、北壁12cm・南壁11cm・東壁15cm・西壁14cmを測る。主軸方向はN-15°-Eである。床面は幾分凹凸があり、北・西側へ傾斜する。礫の露出はほとんど見られない。カマドは南壁に構築され、両袖の芯は長方形の角礫を横転して用い、約40cm幅の火床が認められた。このほか北東隅付近に角礫が集められた状態で検出され、中から土器の出土を見た。

遺物 出土量はそれ程多くない。器種には、土師器杯(III-188-1~10)・高台付杯(11)・甕(13)・鉢(14)、灰釉陶器碗(12)等がある。このほか先端に折り返しのある鉄製品(III-231-17)及び獣骨が出土している。



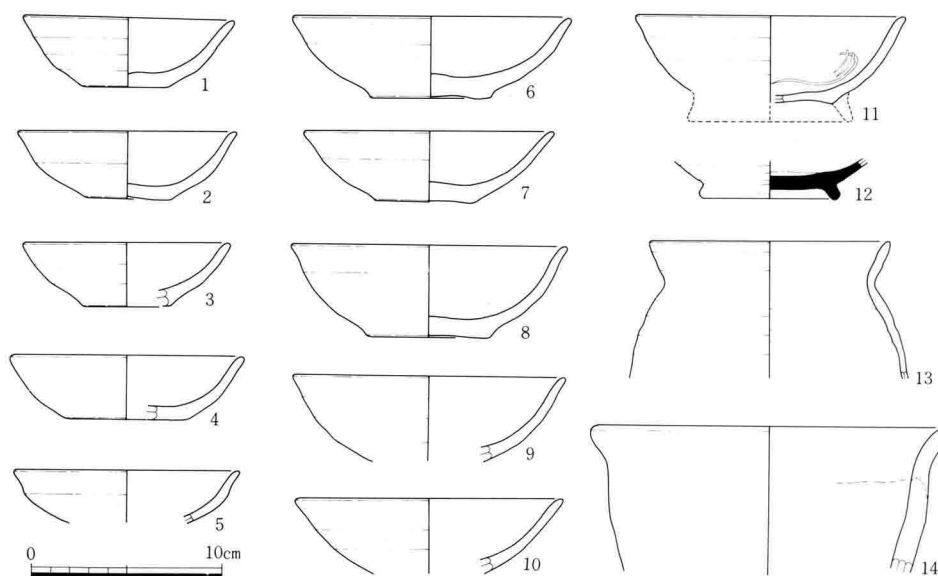
III-185 B15号住居址実測図



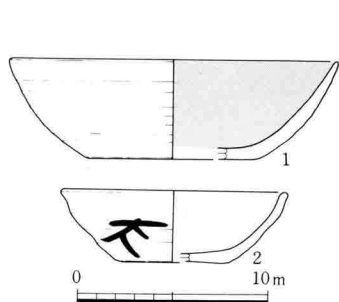
III-186 B15号住居址



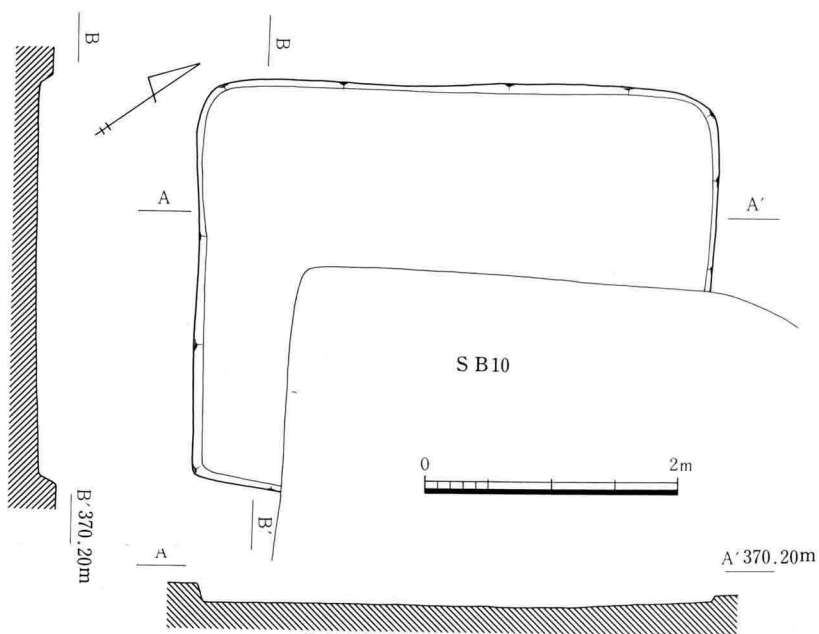
III-187 B15号住居址集石・土器出土状态



III-188 B15号住居址出土土器实测图



III-189 B16号住居址出土土器实测图



III-190 B16号住居址实测图

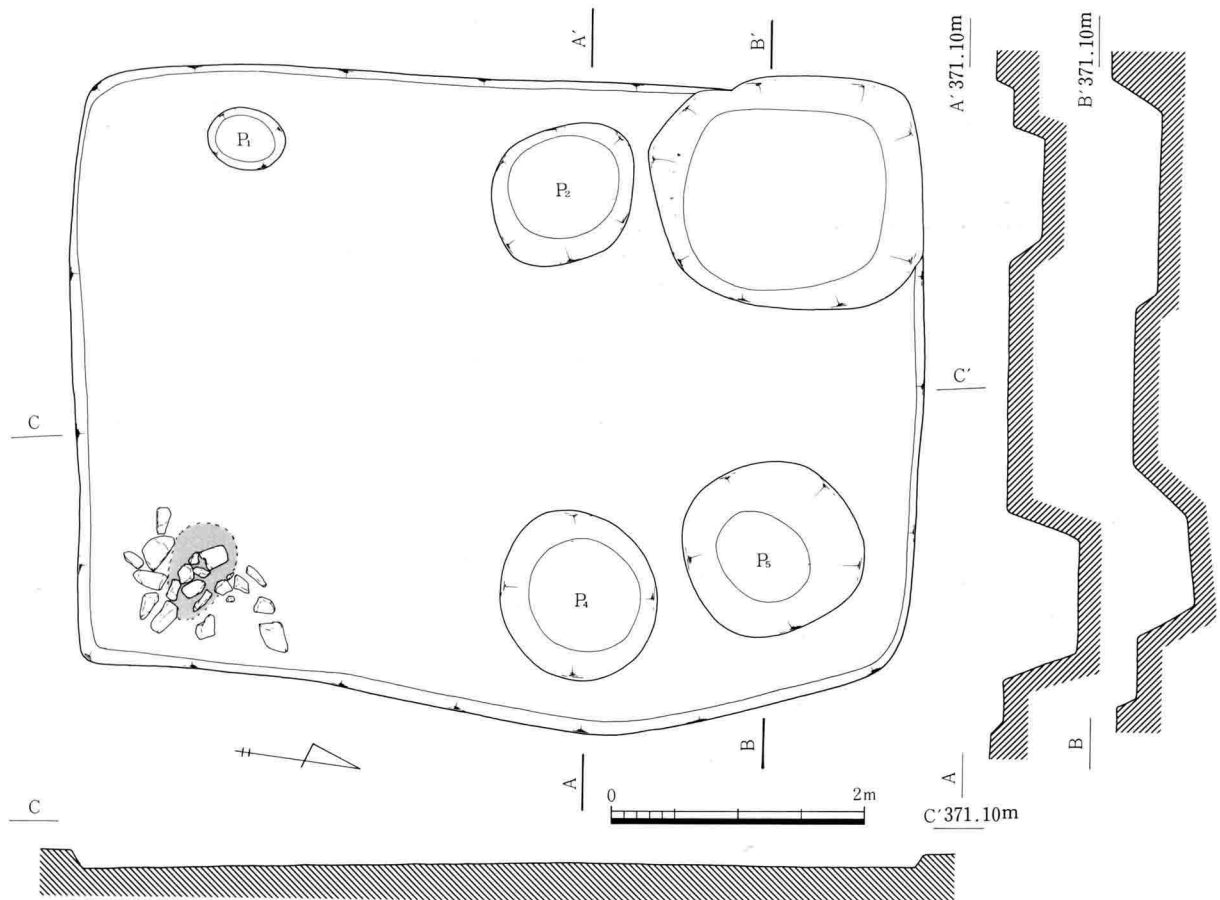
(32) B16号住居址

遺構 B10号住居址と重複関係にあり、これよりも古い住居址である。形態は隅丸方形を呈する。規模は南北軸4.11m・短軸3.25mのもので、掘り込みは浅く、北・南・東各壁とも10cm・西壁12cmを測る。床面はほぼ平坦で、礫の露出も少ない。B10号住居址の床面と同一レベルであるが、色調に差があり、暗黄褐色砂質土の貼り床の存在が考えられる。カマドの所在は確認できなかった。

遺物 出土量は少ない。器種には、須恵器坏・高台付坏・蓋、土師器坏(III-189)・甕等がある。このほかに鹿角切断製品(III-229-4)及び獣骨片が出土している。

(33) B17号住居址

遺構 調査区南端の遺構群の1つで、B18号住居址と重複関係にあり、この住居址よりも古い。形態は東壁中央が張り出す不整隅丸方形を呈する。規模は南北軸6.77m・短軸5.19mを測る大形の住居址である。掘り込みは浅く、北壁8cm・南壁8cm・東壁10cm・西壁14cmになる。床面は幾分凹凸が見られ、南側へ傾斜する。礫の露出はあまり目立たない。カマドは南東隅に構築されるが、検出時ではその用礫が散在し旧来の姿をとどめていなかった。またこの周辺の床面上には炭化物が多く認められた。火床は長軸80cm・幅51cmである。この住居址内より土壙状の大きなピットが検出されている。ピット1は柱穴状である。ピット2は最大幅1.2m・深さ23cmの不整円形を呈する。ピット3は長軸2.15m・短軸1.84m・深さ17cmの隅丸方形である。ピット4は径80cm程の円形を呈し、深さ49cmを測る。ピット5は径1.4m程の不整円形で、深さは45cmになる。これらのピットの覆土は住居址のものと同質同色で、出土遺物からも時間差を感じさせない点から本住居址の付属施設と考えている。遺物の出土



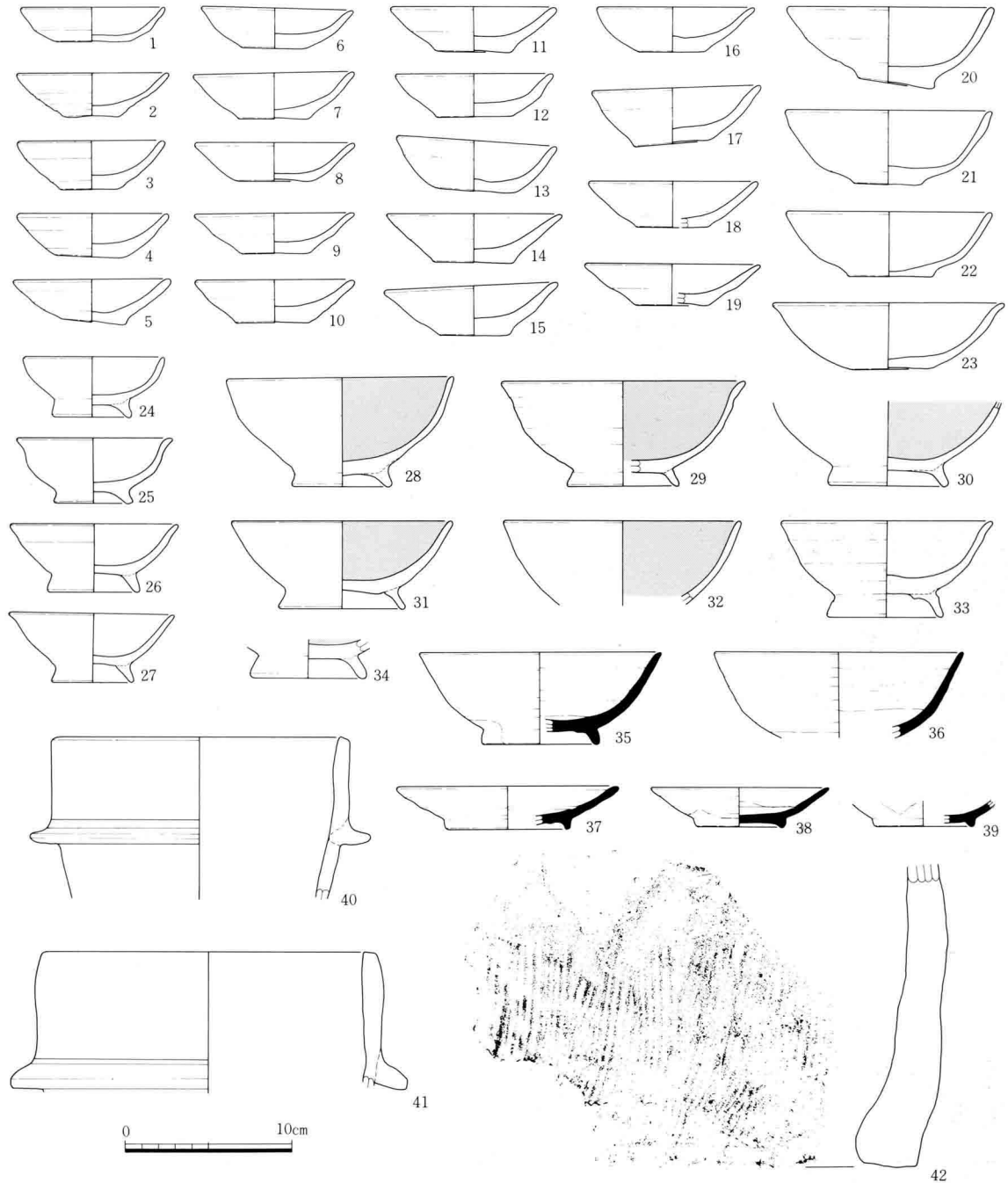
III-191 B17号住居址実測図



III-192 B17号住居址、同カマド



III-193 B18号・B17号住居址



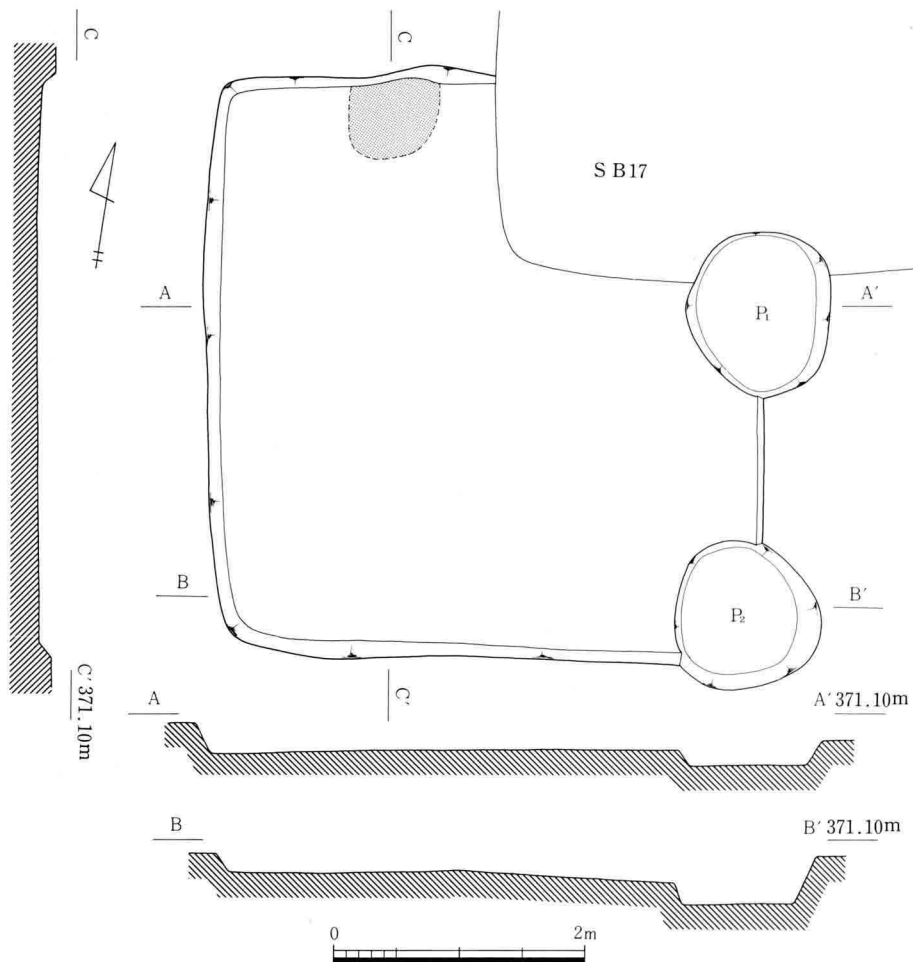
III-194 B17号住居址出土土器実測図

はカマド周辺及びこのピット内からそのほとんどが出土している。

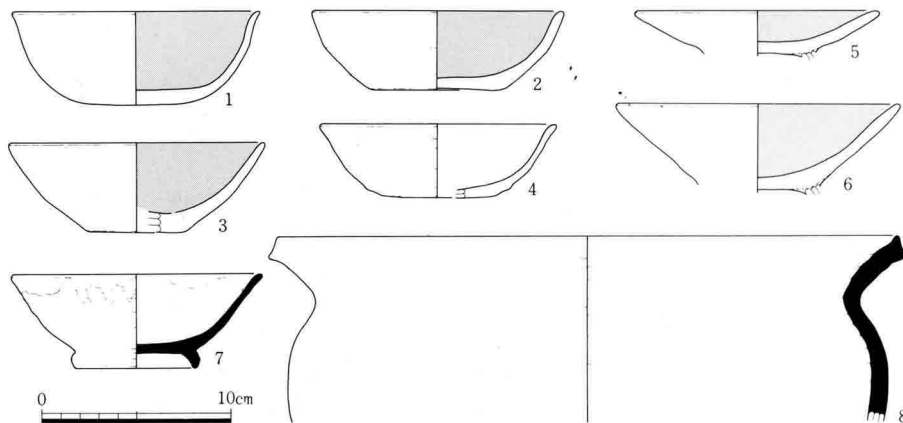
遺物 出土量は多く、完形もしくはそれに近い形態で出土した。器種には、土師器皿 (III-194-1~19)・台付皿 (24~27)・坏 (20~23)・高台付坏 (28~34)・羽釜 (40・41)・甕、灰釉陶器碗 (35・36)・段皿 (37・38)・皿 (39) がある。42は円筒埴輪の基部片でカマドより出土した。このほかに鉄鏃(III-232-1)・刀子(25)・鉄製紡錘車(III-231-12・13)・銅製鏡 (20) 及び獣骨が出土している。ちなみに、4・5・34・41~42はカマド出土であり、ピット3からは、3・28・31が出土している。ピット4では、2・20~22・30・32・35・37・38及び刀子・紡錘車が出土している。ピット5からは、10・11・13・17・19・23・25~27・29・33と鉄鏃・銅製鏡が出土した。これ以外の土器は、覆土及び床面からの出土である。

(34) B18号住居址

遺構 調査区の遺構の中では最も南側に位置し、B17号住居址と重複関係にあり、これよりも古い時期のものである。形態は隅丸方形を呈し、主軸4.64m・短軸4.42mの規模になる。主軸方向はN-9°-Wである。掘り込みは浅く、北壁8cm・南壁8cm・東壁9cm・西壁10cmを測り、床面はほぼ平坦である。礫の露出が目立つが、それ程極端なものではない。カマドは北壁西寄りに構築され、厚さ3cm程の焼土と構築用礫が残存していた。また北西隅部にも集石が見られたが、意味不明である。また東壁に大きな土壙状のピットが見られ、覆土が同質同色であったので、この住居址に付属するものとした。ただピット2の下層は炭化物を多く含む黒褐色砂層になり、その上に大きな礫が落ち込んでいた。形状はピット1・2とも不整円形を呈する。ピット1の規模は、最大幅1.3m・床面からの深さ



III-195 B18号住居址実測図



III-196 B18号住居址出土土器実測図

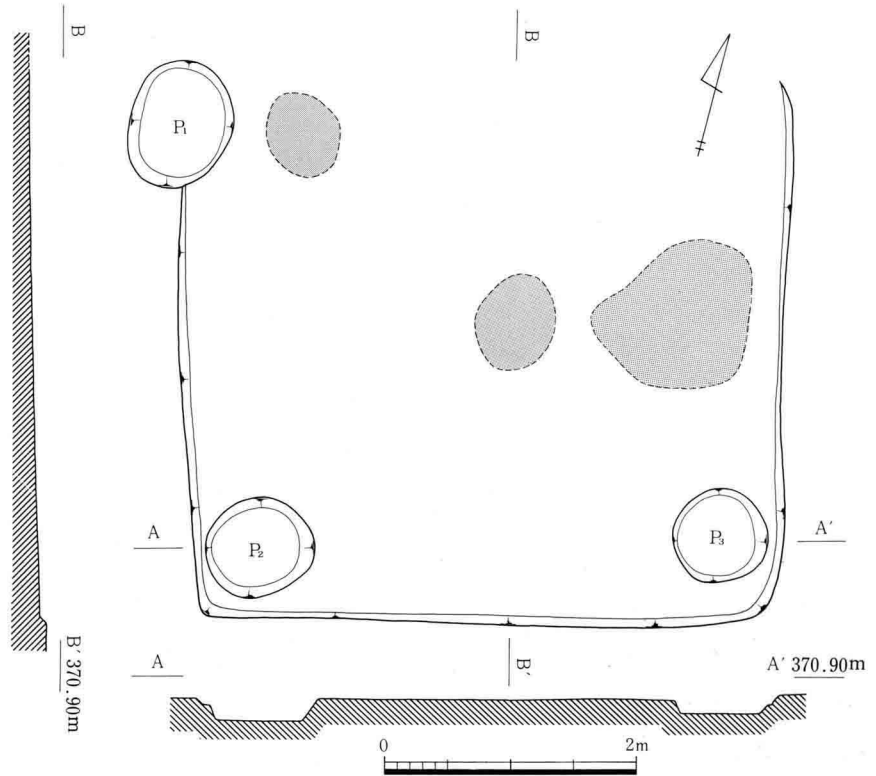
12cmを測り、ピット2では、最大幅1.18m・深さ16cmになる。これらは貯蔵穴と考えられる。

遺物 出土量は少ない。器種には、土師器杯(III-196-1~4)・高台付皿(5)・同杯(6)・甕、須恵器鉢(8)、灰釉陶器碗(7)がある。灰釉陶器片の出土量は比較的多く、東濃窯系のもののほかに猿投窯系の碗・瓶がある。1・2はピット2から出土した。

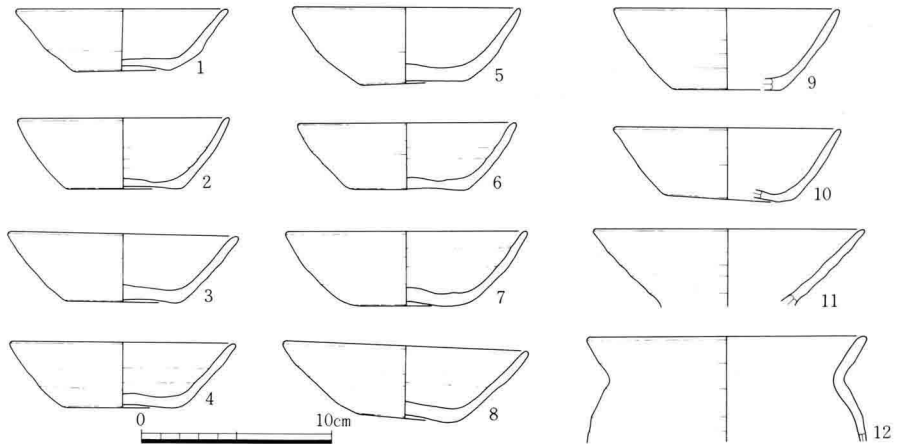
(35) B19号住居址

遺構 調査区南端の遺構群の1つで、単独で検出された。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、東西軸4.7mで南北軸4.5m前後の規模になるものと推定する。掘り込みは浅く、各壁とも5cm内外の検出である。底面には礫の露出がみられ、平坦で北側に傾斜する。カマドの位置は判然しないが、床面に3ヶ所焼土が残存していた。柱穴様のピットは南壁の隅付近に浅いものが見られたが、径80cm前後、深さ11~20cmで、大きさ深さから支柱穴ではあるまい。ピット3は西壁を掘り込んでいるが覆土等からこの住居址に付属するものと推定する。長軸1.04m・深さ14cmである。

遺物 出土量は少ない。器種には、土師器坏(III-198-1~10)・高台付坏(11)等があり、このほかに麻皮はぎ金具(III-231-18)・滑石製管玉



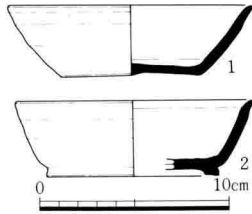
III-197 B19号住居址実測図



III-198 B19号住居址出土土器実測図



III-199 B19号住居址



III-200 B22号住居址出土
土器実測図

(III-232-29) が出土している。2
~ 4・8 はピット1、5 はピット2
からの出土である。

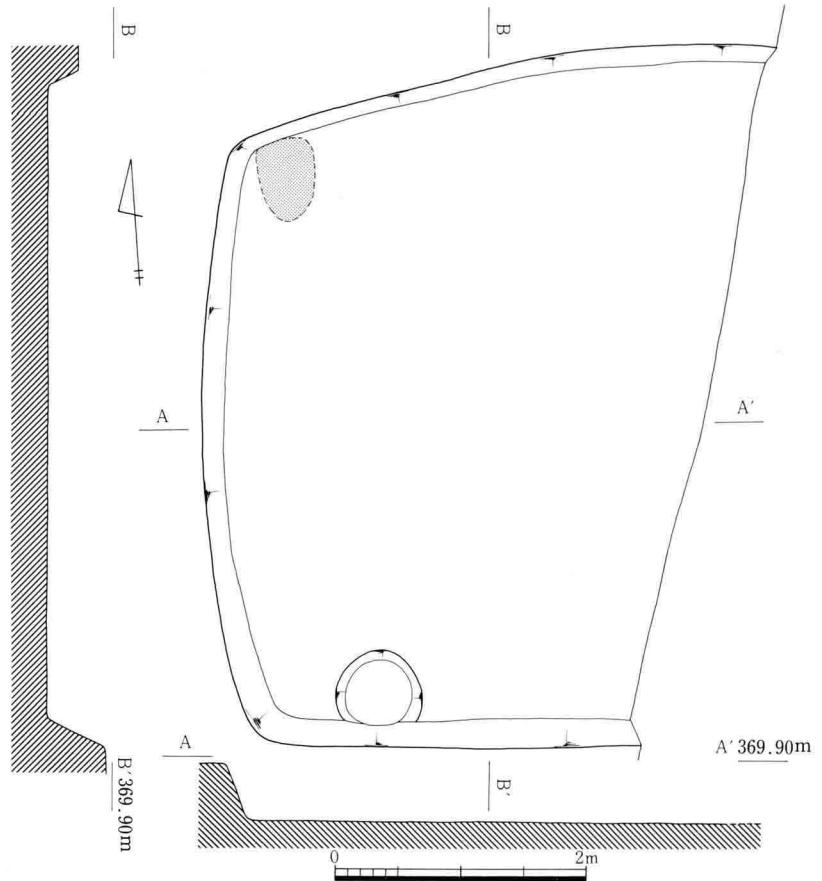
(36) B22号住居址

遺構 調査区下方東に位置し、東
壁側は調査区域外へ延びる。形態は
各壁とも内湾気味の隅丸長方形を呈
するであろう。南北軸5.4mを測る。
掘り込みは深く、北壁24cm・南壁46
cm・西壁44cmになり、床面は平坦で
礫の露出は目立たない。焼土は北西
隅で確認されたが床面より6cm程上
にあり、火床を形成していない点か
らカマドではない。南壁に接してピ
ットが1個確認されるが、支柱穴は
なかった。

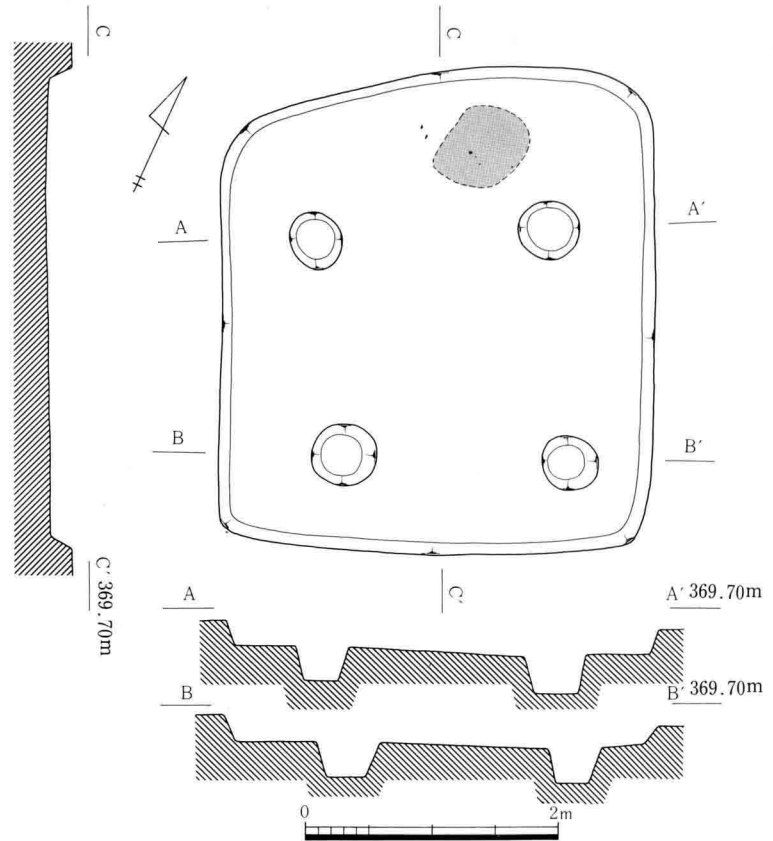
遺物 出土量は少ない。器種には、
須恵器坏類 (III-200)・甕・蓋、土師
器坏・甕等がある。

(37) B25号住居址

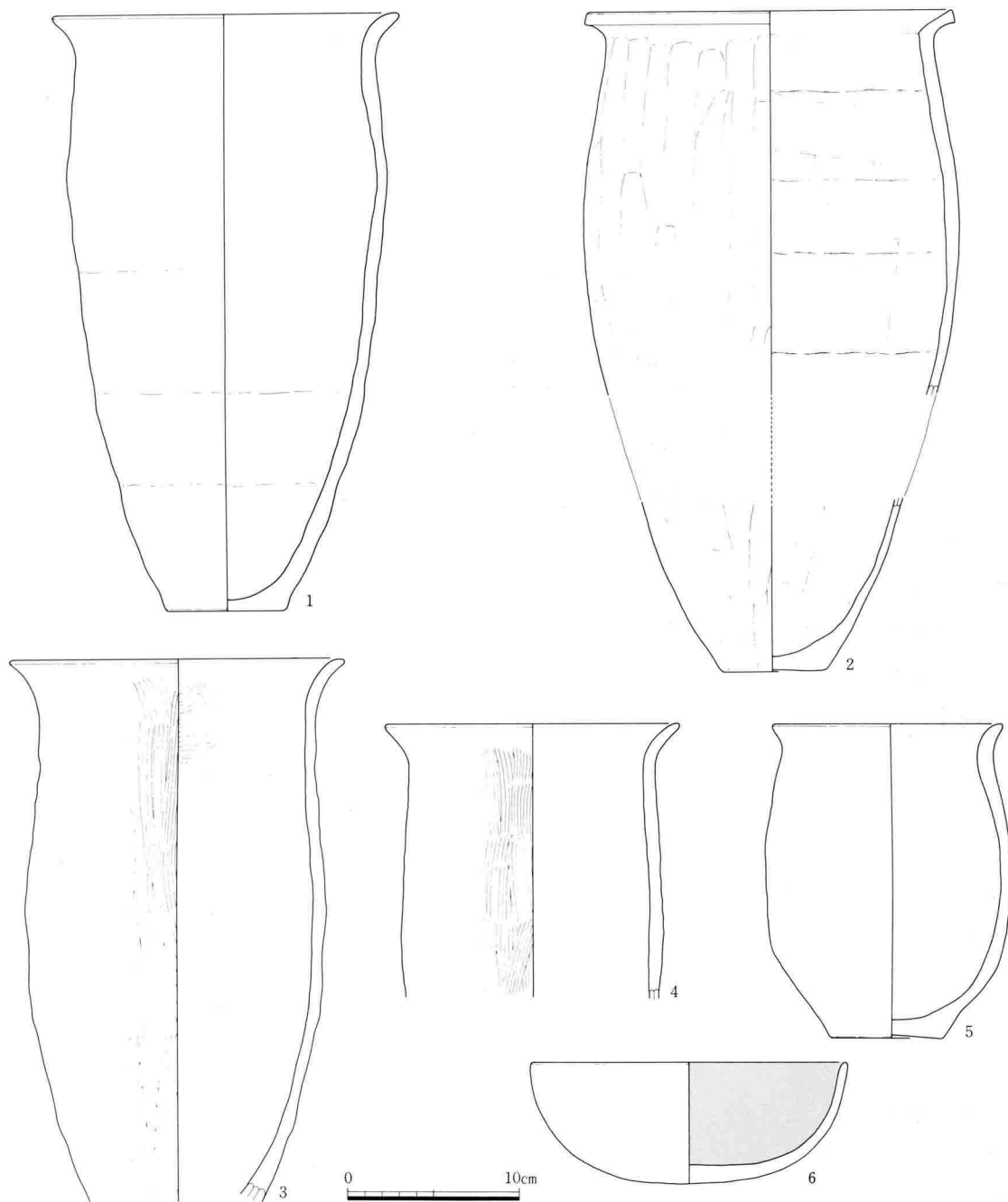
遺構 調査区中央付近にあり、単
独で検出された。形態は隅丸方形を
呈し、主軸3.84m・短軸3.45mの規
模になる。主軸の方向はN-25°-W
である。掘り込みは各壁20cm内外で、
床面は平坦で西側に傾斜する。カマ
ドは北壁に構築されており、調査時
では南北43cm幅の火床・焼土と構築



III-201 B22号住居址実測図



III-202 B25号住居址



III-203 B25号住居址出土土器実測図

用礫が周辺に散在していた。火床上面には甕が横転していた。柱穴は4個方形配列になり、径40~50cm・深さ27~29cmのものである。

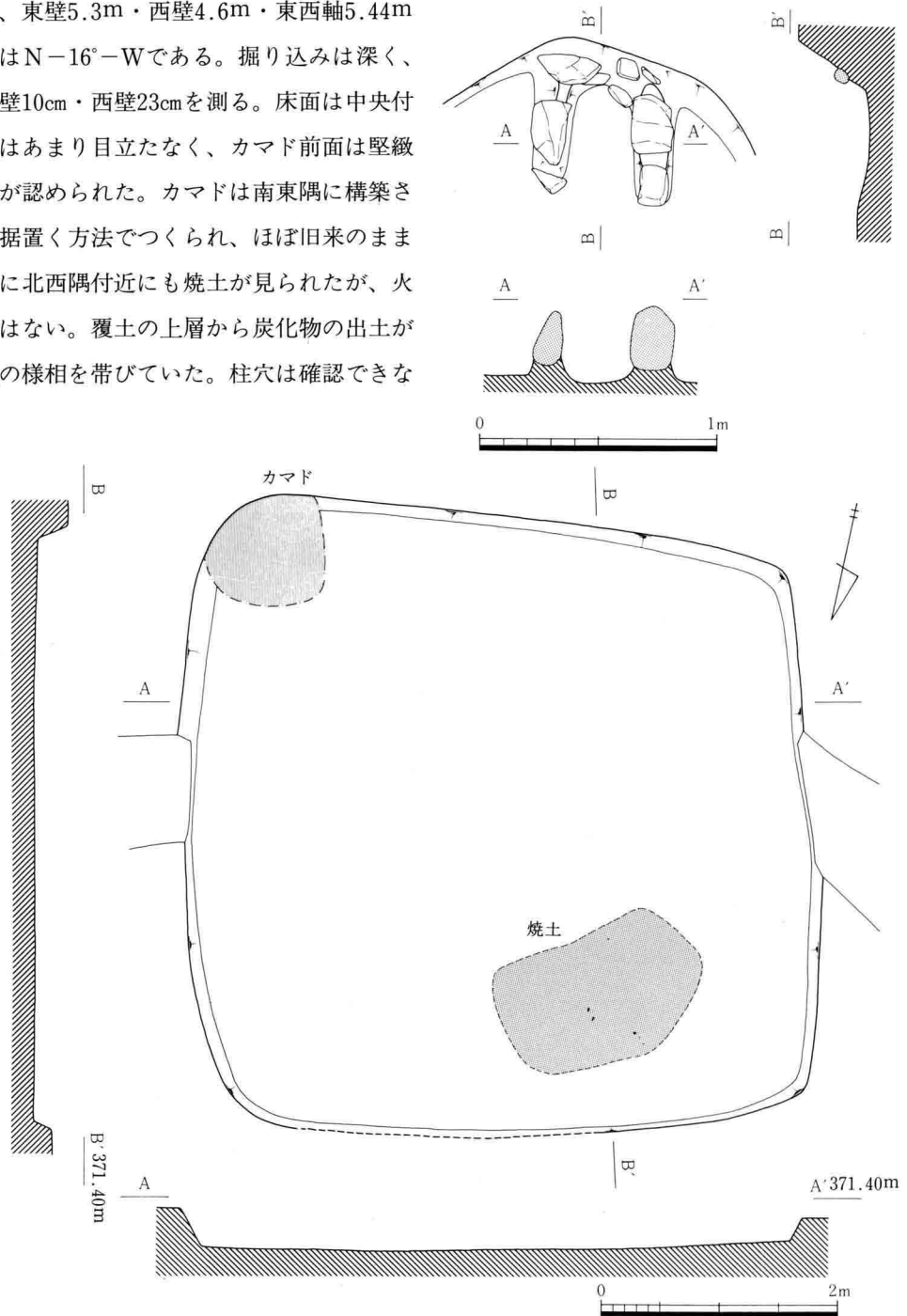
遺物 カマド周辺から多く出土している。器種には土師器甕(III-203-1~5)・坏、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕等がある。甕の体部は長胴化し、また口縁部の外反がなだらかで、ナデ、ヘラケズリ調整と新しい技法がみられる。坏類の底部調整は、ヘラケズリ・ナデによっており、糸による切離によるものはない。6の坏は古墳時代のものである。このほか土製紡錘車(III-230-6)が出土している。

(38) B26号住居址

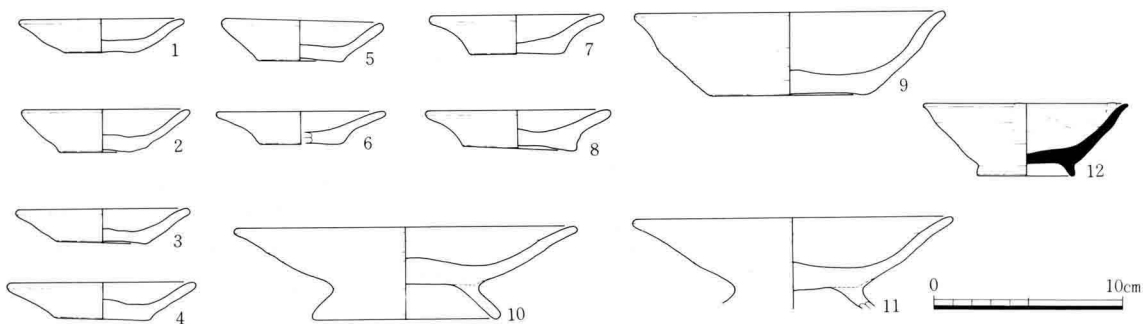
遺構 調査区南端西側に位置する。上面遺構にB13号・B14住居址があり一部の床面を共有する。形態は東壁

の長い隅丸台形状を呈し、東壁5.3m・西壁4.6m・東西軸5.44mの規模になる。主軸方向はN-16°-Wである。掘り込みは深く、北壁20cm・南壁22cm・東壁10cm・西壁23cmを測る。床面は中央付近がやや凹み、礫の露出はあまり目立たなく、カマド前面は堅緻で黄褐色砂質土の貼り床が認められた。カマドは南東隅に構築され、粘土袖の上に立石を据置く方法でつくり、ほぼ旧来のまま残存していた。このほかに北西隅付近にも焼土が見られたが、火床を形成する程のものではない。覆土の上層から炭化物の出土が著しく、下層では泥炭化の様相を帯びていた。柱穴は確認できなかった。

遺物 出土量は比較的多い。器種には、土師器皿(III-205-1~8)・坏(9)・台付皿(10・11)・甕・羽釜、灰釉陶器碗(12)等がある。このほか鳴海窯系の緑・白の二彩片が1点出土し、鉄鏃(III-232-2)・同茎(11)・刀子(19)・蛇紋岩製(磨製石斧)砥石(III-230-2)・鹿角切断品(III-229-3)及び獣骨片が出土している。



III-204 B26号住居址・カマド実測図



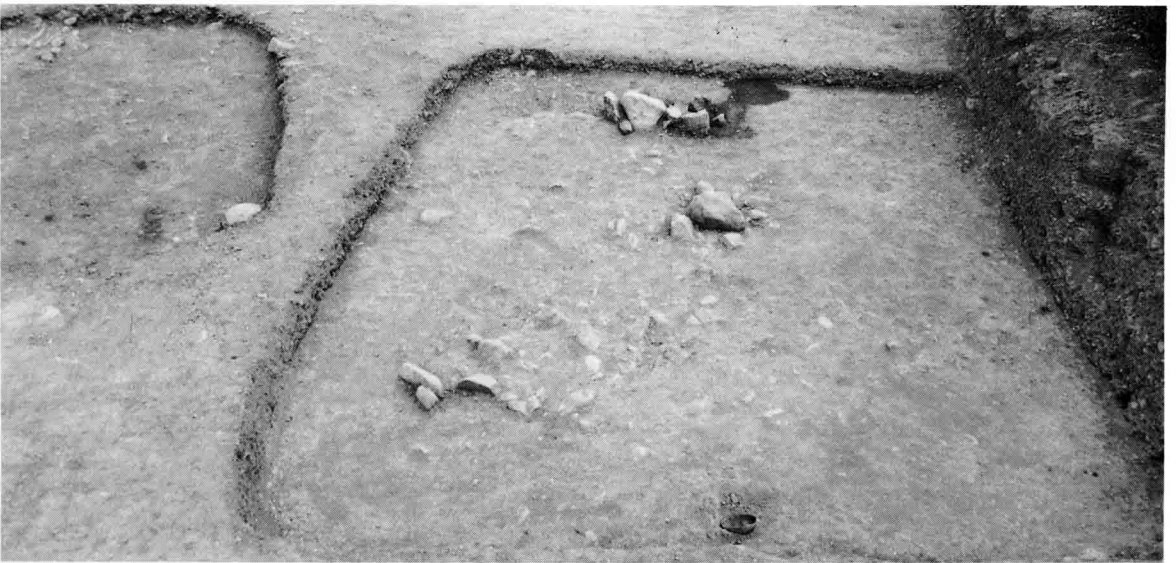
III-205 B26号住居址出土土器実測図



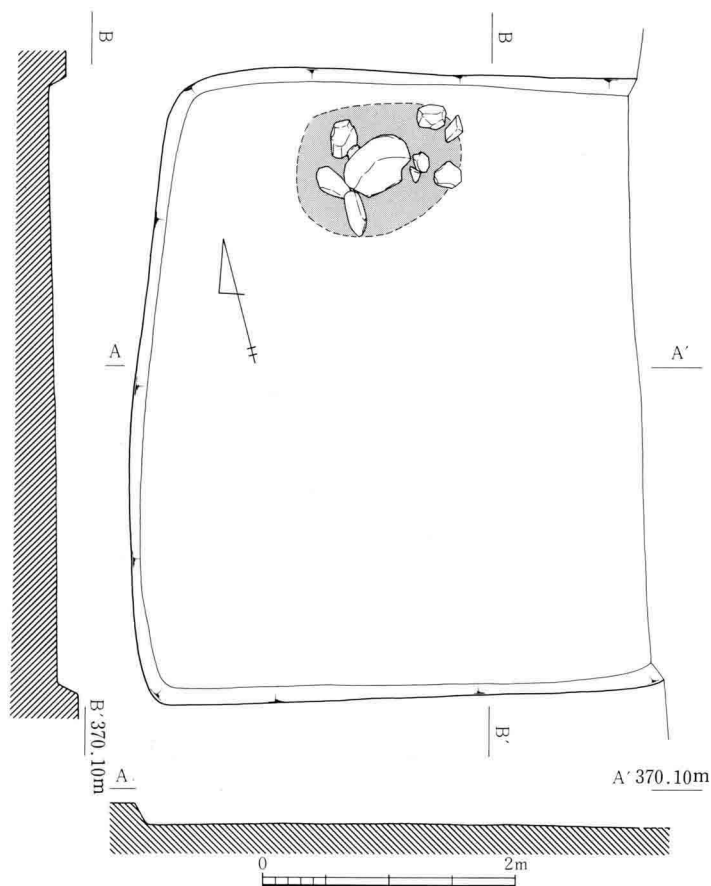
III-206 B25号住居址



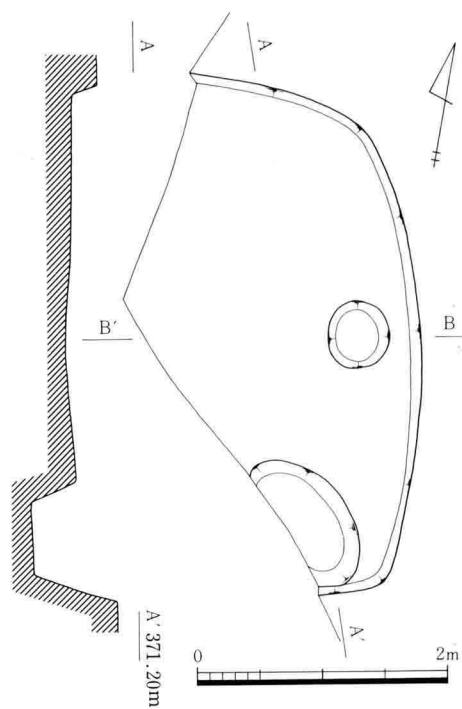
III-207 B26号住居址



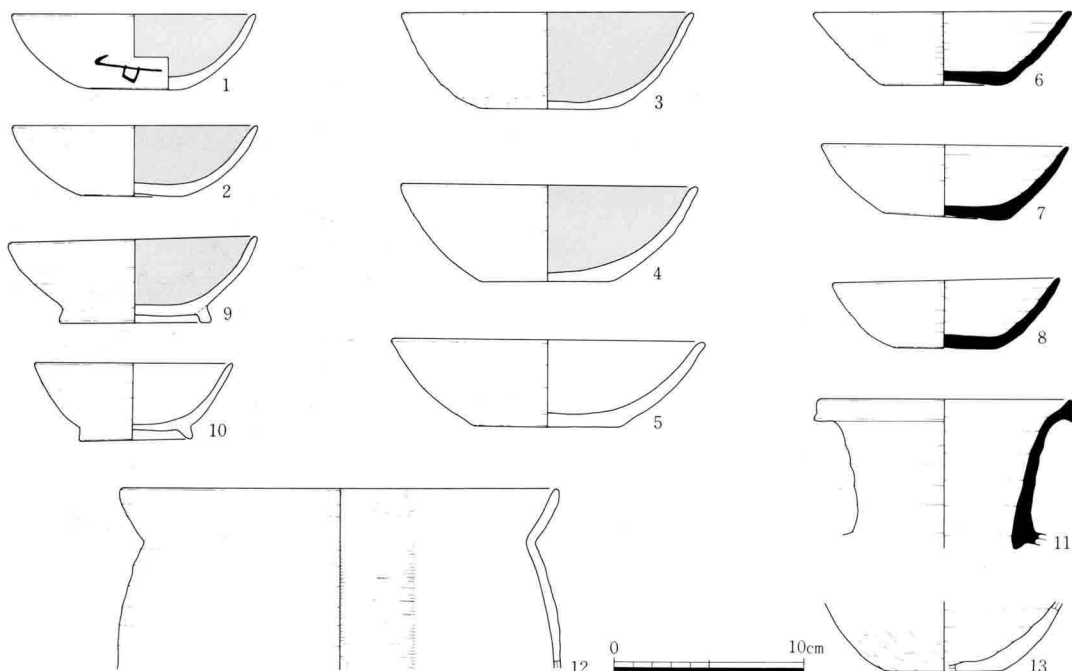
III-208 B27号住居址



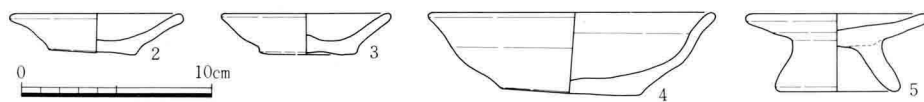
III-209 B27号住居址实测图



III-210 B35号住居址实测图



III-211 B27号住居址出土土器实测图



III-212 B35号住居址出土土器实测图

(39) B27号住居址

遺構 調査区中央の東側にあり、東壁寄りの一部は調査区域外へ延びる。形態は隅丸方形を呈し、南北軸4.97mになる。主軸方向はN-14°-Eである。掘り込みは浅く、北壁13cm・南壁17cm・西壁18cmを測る。カマドは北壁西寄りに構築され、焼土及び構築用礫が残存する。柱穴はなかった。

遺物 出土量は多くない。器種には、土師器坏(Ⅲ-211-1~5)高台付坏(9・10)・甕(12・13)、須恵器坏(6~8)・壺(11)がある。このほかに獣骨が出土している。

(40) B35号住居址

遺構 調査区最南端の住居址で、南側は農道下にある。形態は胴張りの隅丸方形を呈するものと思われる。南北軸4.3mを推測する。掘り込みは、北壁29cm・南壁21cm・東壁19cmを測り、床面は中央部が凹む。南東隅に長軸1.17mの楕円形を呈する深さ35cm程のピットがある。貯蔵穴であろう。カマドは確認できなかった。

遺物 出土量は少ない。器種には、土師器皿(Ⅲ-212-1~3)・台坏皿(5)・坏(4)・甕・羽釜等がある。このほか滑石製小玉(Ⅲ-232-33)が覆土より出土している。

(41) A1号集石址

遺構 形態は不整三ヶ月状を呈するもので、東西軸6.7m・南北軸5.1m・深さ20cmの範囲に人頭大から小石に至る礫が投棄されていた。形状から目的をもって掘られた土壌ではなく、礫の処理施設と考えられる。

遺物 弥生時代から平安時代にかけて各種の土器類が出土している。時代は平安時代以降の所産であろう。

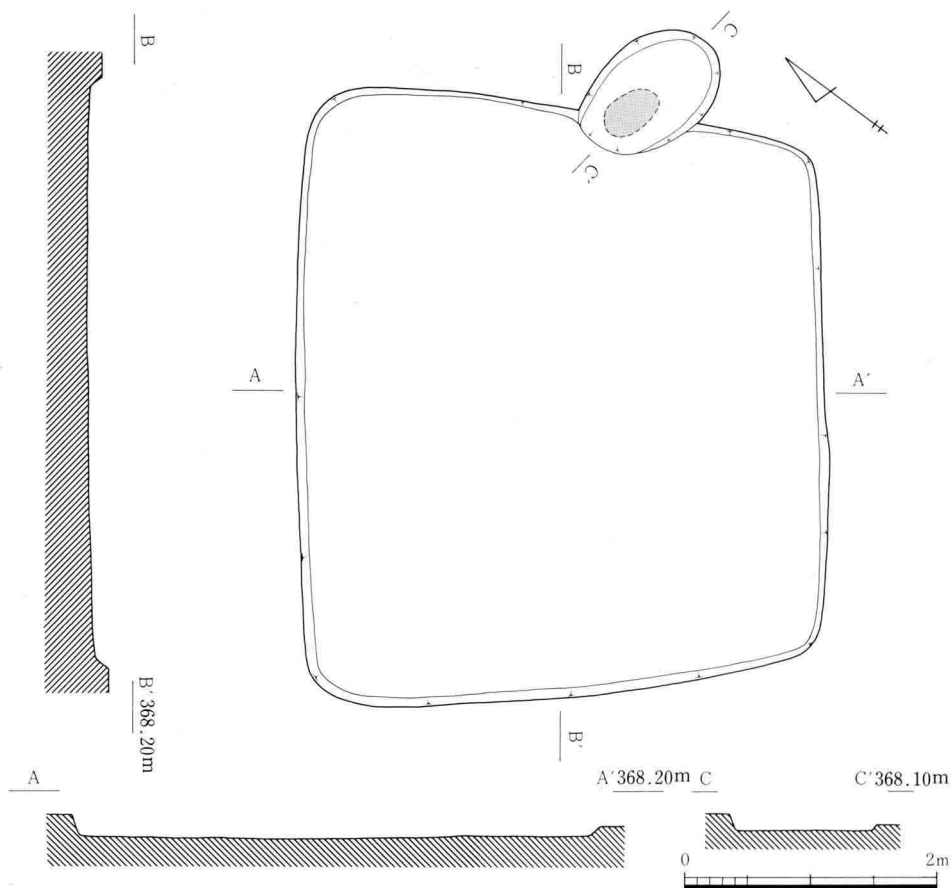
(42) A2号集石址

遺構 調査区南側に位置し、トレンチ調査の際に集石状態であったので、この呼称を付したが、本来は住居址である。この住居が廃絶直後、凹地化した所に礫の投げ入れたものと思われる。形態は隅丸台形状を呈し、西壁4.9m・東壁4.05mの規模で、北壁に張り出すカマドを構築している。掘り込みは9~12cm程を確認した。



Ⅲ-213 A1号集石址

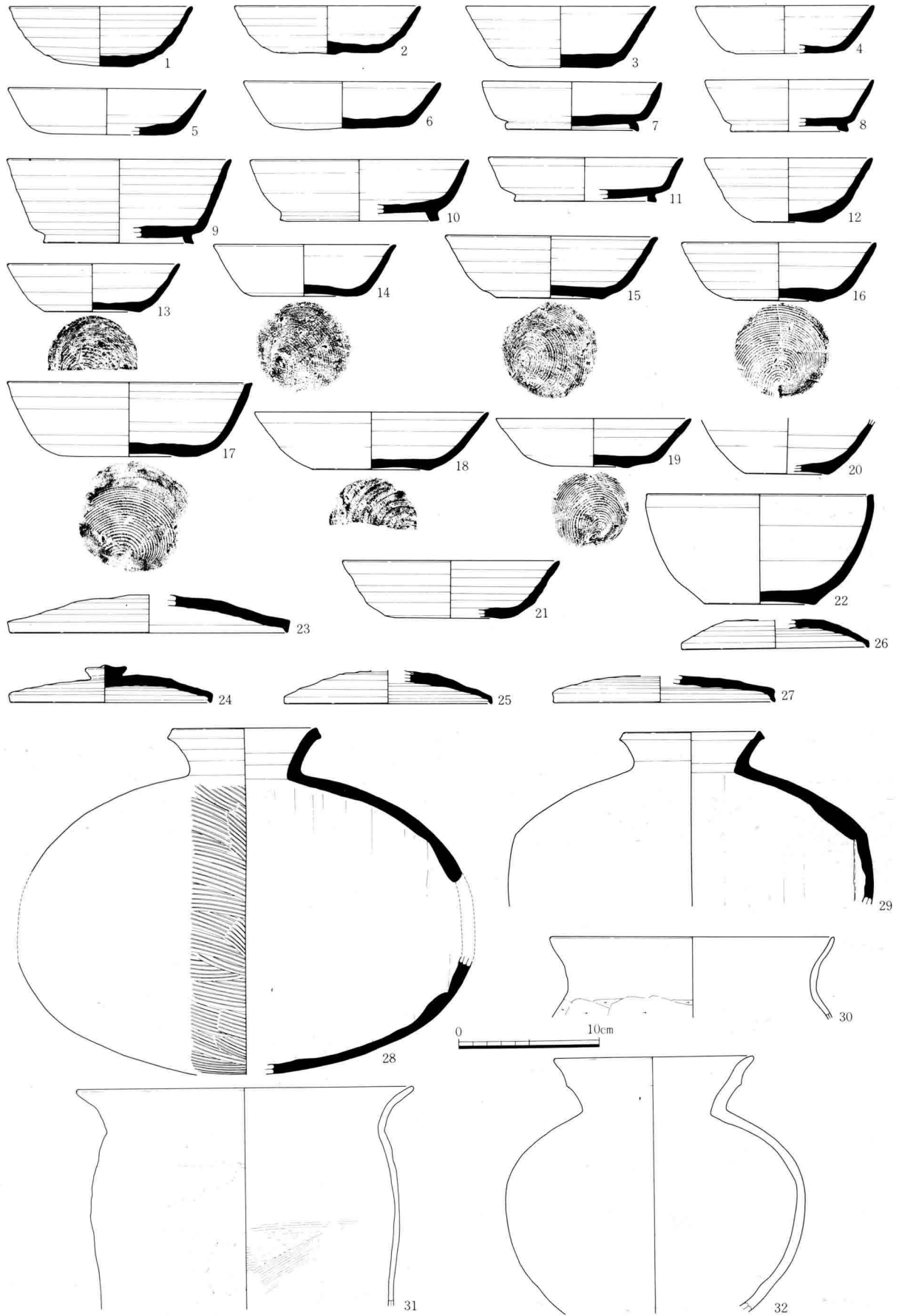
遺物 集石内から須恵器を中心に多量に出土している。Ⅲ-216-1~6の須恵器坏・高台付坏(7~11)は、底部整形をへらによっており、糸切離の痕跡がないことから奈良時代の所産と思われる。12~22の坏は、ロクロからの切離を糸によっているが、13~15は糸の切離痕が右に流れるのに対し、16~19のそれは左に切り離される。回転方向の異なるロクロの存在が考えられる。このほかの器種には、



Ⅲ-214 A 2号集石址実測図



Ⅲ-215 A 2号集石址



III-216 A 2号集石址出土土器実测图



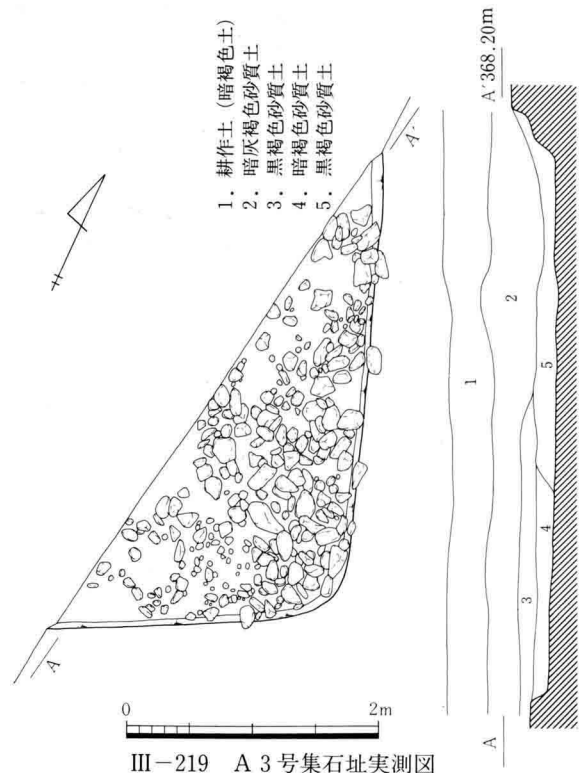
III-218 A 3号集石址

蓋 (23~26)・横瓶 (28・29)、土師器甕 (30・31)・壺 (32) がある。28・29・32は古墳時代に比定される土器である。このほかに獣骨の出土も多い。

(43) A 3号集石址

遺構 A 2号集石址の西に隣接する。調査は南東隅部しかできなかったが、形態は隅丸方形を呈するものと思われる。この集石の性格はA 2号集石址と同様である。検出面からの掘り込みは17cm程を測る。本来は34cm以上あったことが東壁の一部より観察された。カマド・柱穴等はなかった。

遺物 出土量は多くない。古墳時代から平安時代にわたる土器類が出土している。平安時代のものには、須恵器杯・蓋・甕、土師器杯・高台付杯・甕等の器種がある。このほか獣骨も出土している。



III-219 A 3号集石址実測図



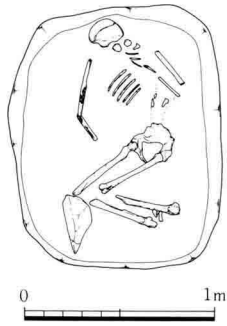
Ⅲ-220 B 1号土壙墓



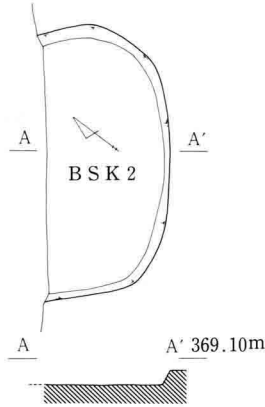
Ⅲ-221 B 8号土壙



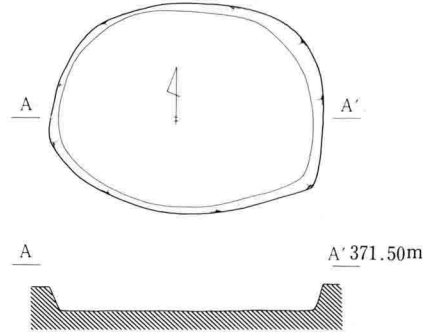
Ⅲ-222 Bピット群



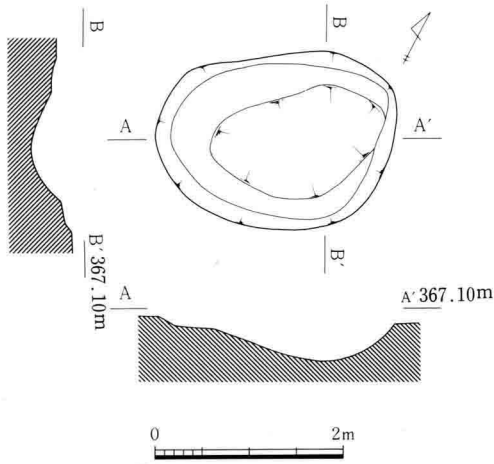
B 1号土壙墓



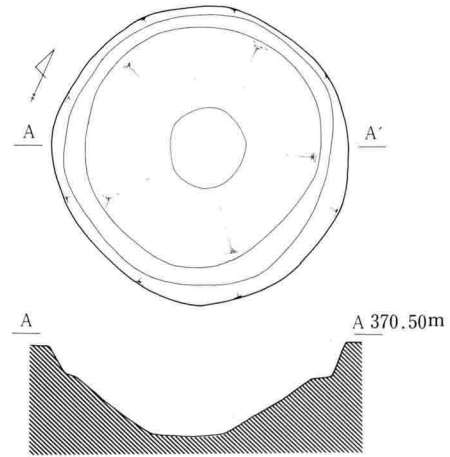
B 2号土壙



B 4号土壙



B 5号土壙



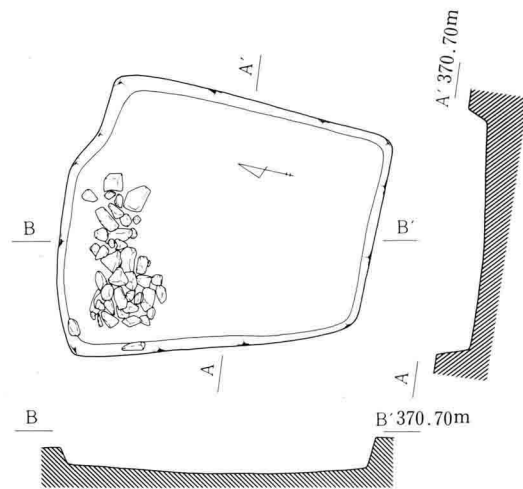
B 6号土壙

(44) B 1号土壙墓

遺構等 B 1号・B 2号住居址を切り込んでいる。墓壙は長軸1.38m・短軸1.05m程の規模で隅丸方形を呈する。掘り込みの深さは36cmで、人骨の下部は31cmを測る。人骨は頭部を北に据えた横臥屈葬形で検出された。膝元に角礫が置かれていたほか副葬品はない。

(45) B 2号土壙

遺構等 B 2号住居址に内在し、北半分は農道下にある。形態は隅丸形状で、長軸2.86m・床面からの深さ14cmを測る。遺物は全て破片で、土師器皿・坏・甕等の器種がある。



B 8号土壙

III-223 B地区土壙実測図

(46) B 3号土壙

遺構等 B 2号住居址の西側に位置し、長軸1.4m・短軸1.0m・深さ32cmの楕円形を呈する。出土土器はすべて破片で図上復元可能なものがないが、土師器皿・坏片が出土している。

(47) B 4号土壙

遺構等 B 2号土壙と隣接し、長軸1.43m・短軸1.2m・深さ28cmの楕円形を呈する。遺物には図上復元可能な個体はなかったが、須恵器甕、土師器坏・甕、灰釉陶器瓶等の器種が見られる。

(48) B 5号土壙

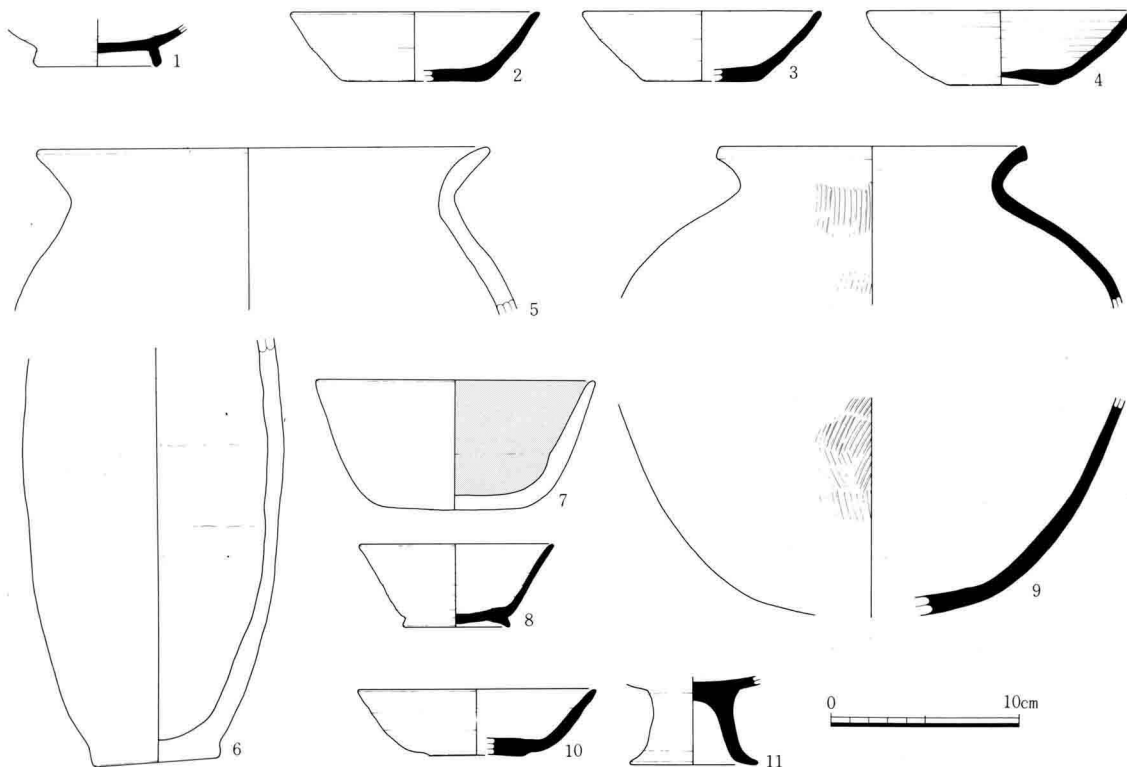
遺構 調査区の南側に位置し、長軸2.9m・短軸2.28m・深さ26cm程の不整楕円形を呈する。

遺物 灰釉陶器碗(Ⅲ-224-1)、刀子(Ⅲ-232-23)、土製円板(Ⅲ-231-6・7)等がある。

(49) B 6号土壙

遺構 B34号住居址と重複関係にあり、これよりも上面からの検出である。径3.1m円形を呈し、深さ94cm程の椀鉢形の掘り込みである。底面は水分が多くなるものの湧水状態は認められなかった。

遺物 出土量は比較的多かったが、そのほとんどが小破片である。器種には、須恵器坏(Ⅲ-224-10)・高坏(11)・蓋・甕、土師器坏・高坏・甕、灰釉陶器碗がみられるが、平安時代の坏・甕類が多い。



Ⅲ-224 B 5号(1)・B 6号(10・11)・B 7号(2~4)・B 8号(5~9) 土壙出土土器実測図

(50) B 7号土壇

遺構 B15号住居址の北に隣接してある。形態は不整楕円形を呈し、長軸2.5m・短軸1.88mの規模になる。掘り込みも一定でなく舟底状になり、最深部の深さは40cm程になる。

遺物 出土量は少ない。器種には、須恵器杯（Ⅲ-225-2～4）・蓋・甕、土師器杯・甕等がある。

(51) B 8号土壇

遺構 調査区南側のB19号住居址北側に位置する。形態は不整台形状を呈し、南壁2.0m・北壁3.05m・南北軸3.3mの規模になる。掘り込みは南壁が最も深く33cmを測り、底面の中央部付近が凹む。北壁添いには角礫による集石が認められた。焼土等は確認できなかった。

遺物 出土量は割合と多く、古墳時代から平安時代にわたる各種のものが出土している。器種には、須恵器杯・高台付杯（Ⅲ-224-8）・甕（9）、土師器杯（7）・甕（5・6）等がある。

(52) Y地区ピット群

遺構等 Y1号住居址からY3号住居址にかけ径30～50cm程の柱穴が認められたが、規格化されたものではない。遺物は少量出土し、土師器杯・甕片が認められる。

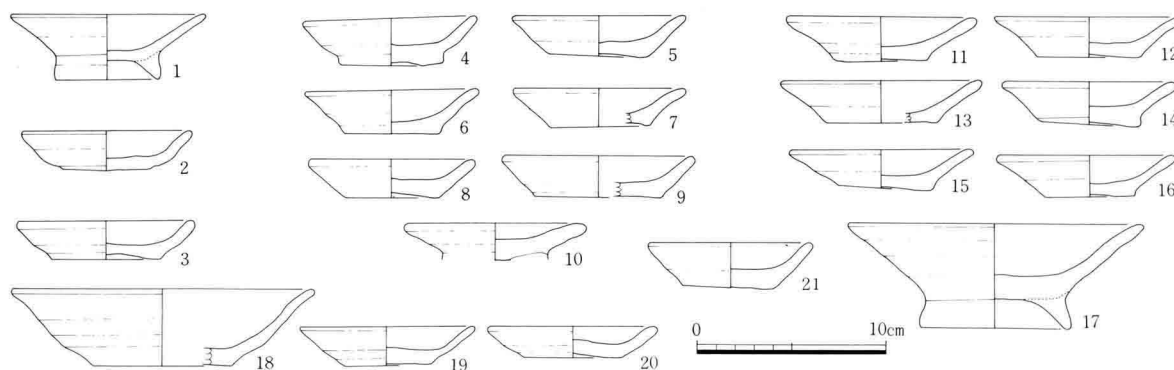
(53) A地区ピット群

遺構等 調査区北側の東より検出され、径30～60cm程のもので柱列をなす。遺物は少なく土師器杯片がある。

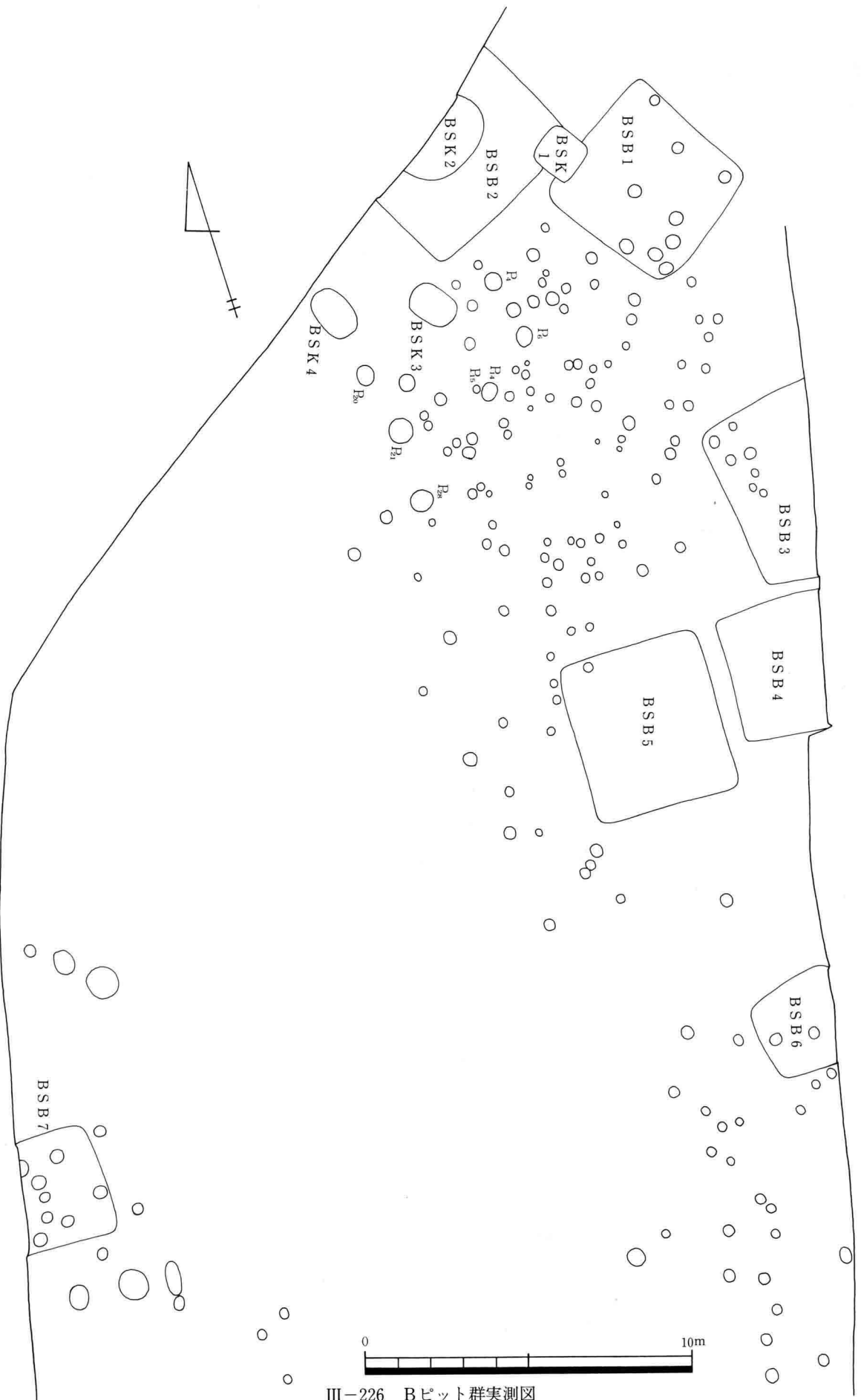
(54) B地区ピット群

遺構 調査区北半分程に広く展開しているが、規格化するものは見あたらなかった。径20cmから1m以上になるもの等各種ある。深さもまちまちで10cm代から40cm代までである。

遺物 完形又は図上復元可能な土器が出土したのは、ピット4・ピット6・ピット14・ピット15・ピット20・ピット21・ピット28にすぎない。器種は皿類が多く、杯（Ⅲ-225-18）・高台付杯（17）があるにすぎない。



Ⅲ-225 B地区ピット4 (1)・6 (2)・15 (3)・14 (4～10)・
20 (11～17)・21 (18～20)・28 (21) 出土土器実測図



III-226 Bピット群実測図

(55) Y 1号溝址

遺構等 調査区中央に位置し、勾配を南から北に流下するものと、東より西へのものが合体し一本の溝址になる。覆土底面には粗い砂粒が認められ、水の流下があったことをうかがわせる。尚この確認面は検出面より20cm程上面である。幅36cm・深さ5～20cmを測る。遺物には土師器杯・甕、須恵器杯・甕片が出土している。

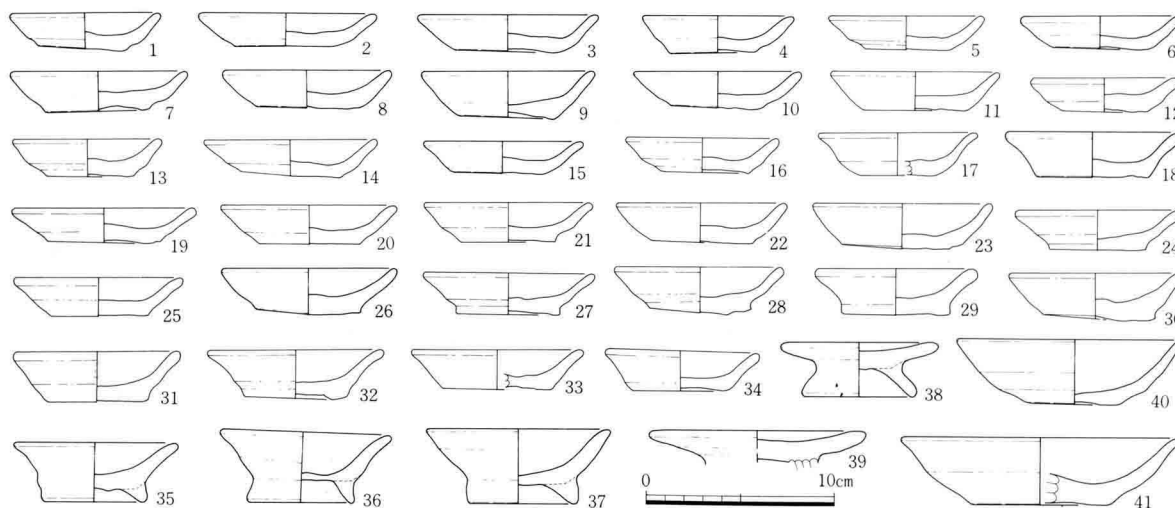
(56) B 1号溝址

遺構等 B 26号住居址と重複関係にあり、これより古い遺構である。形態は南側が東西に折れ、南北10cm程で終結する。水の流下した痕跡がなく、用途不明である。幅1m内外・深さ12～24cm程になる。

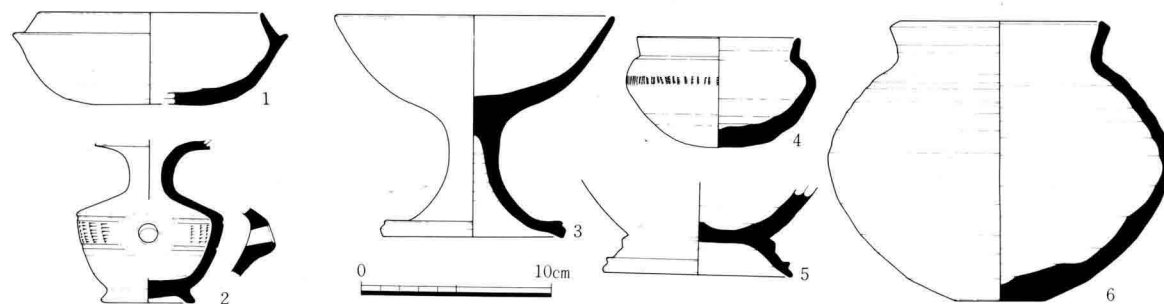
(57) B地区土器集中出土地

遺構 B 2号住居址の西側、B 4号土壇の間から上層土除去の際発見したもので、南北約1.5m・東西1m・深さ20cm程の範囲内から皿類を中心に多量の土器が出土した。土壇状の遺構があったものと思われ、一部は積み重なった状態での出土で、粟と推定される炭化物の付着がみられるものもあった。

遺物 器種を土師器皿(III-227-1～34)・台付皿(35～39)・杯(40・41)に大別することができる。

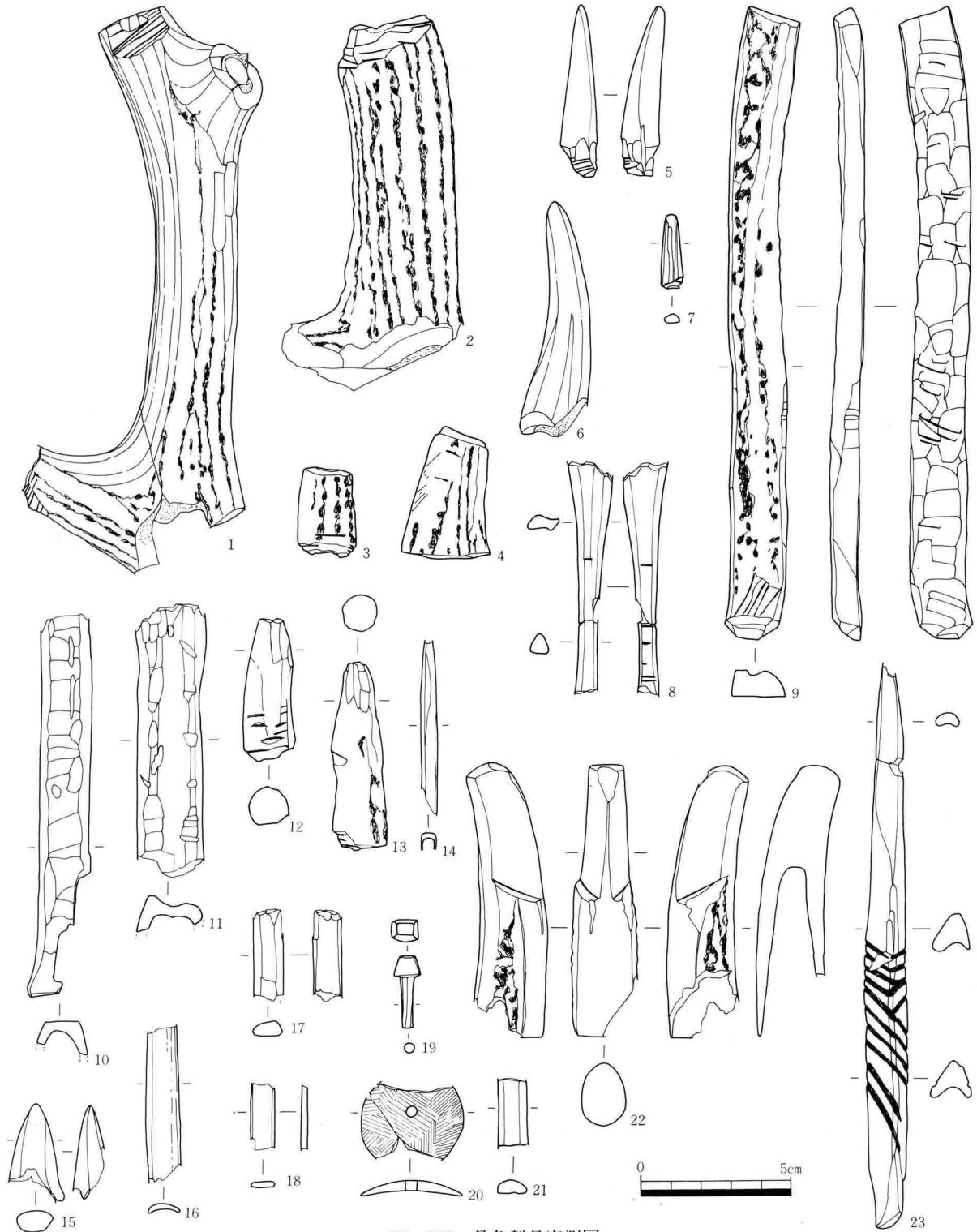


III-227 B地区土器集中出土土器実測図



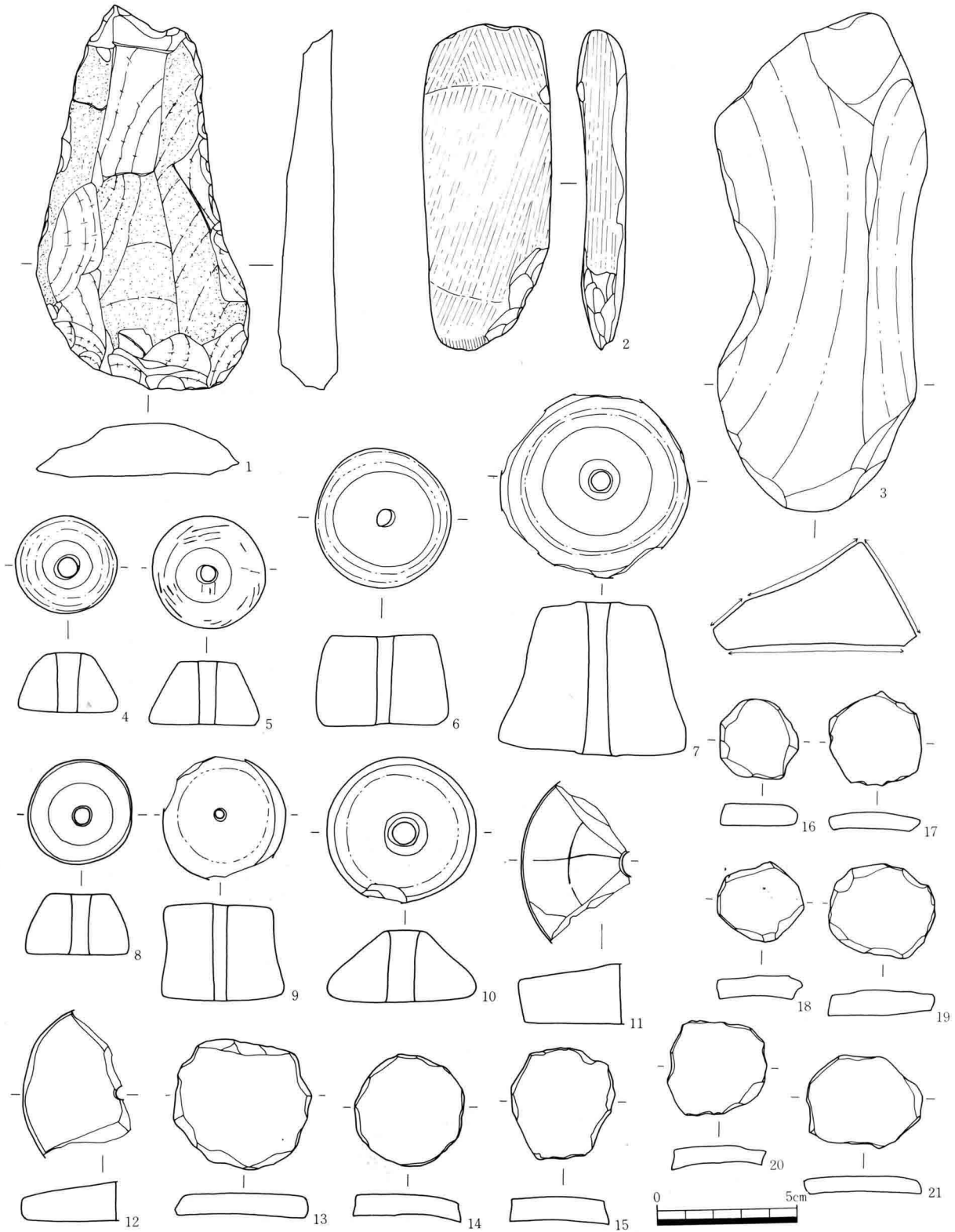
III-228 遺構外出土古墳時代他須恵器実測図

6 骨角製品・石製品・土製品・鉄製品・銅製品



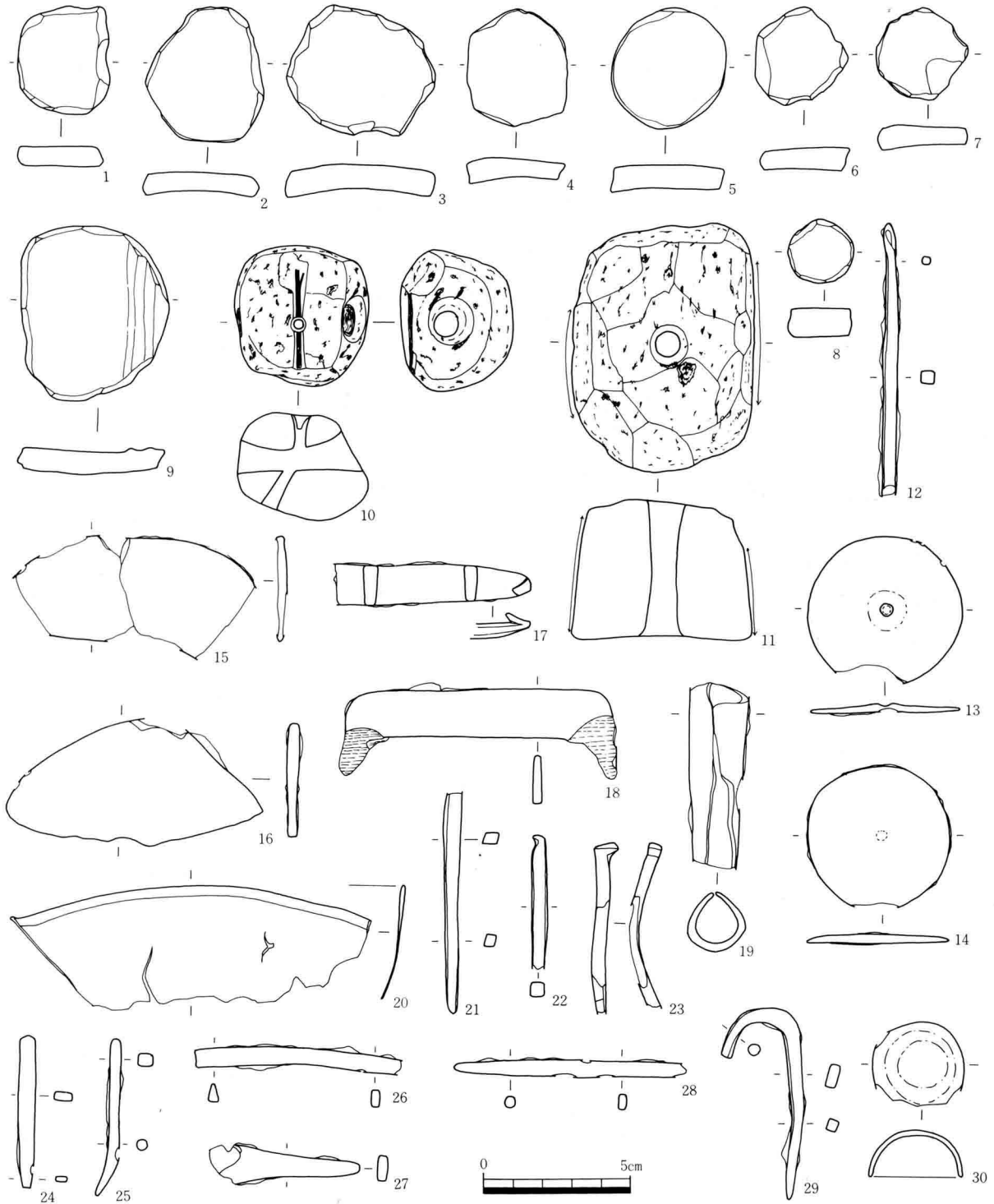
III-229 骨角製品実測図

1 鹿角切断 (BSB 5) 3 同 (BSB26) 4 同 (BSB16) 5 同 (ASB11) 2・6 同 (A検出面)・7 同研磨 8 獣骨切痕 (ASB22) 9 鹿角断截削平 (ASB 6) 10 獣骨削平 (ASB 5) 11 同 (A検出面) 12・13 鹿角切断先端加工 (ASB 5) 14 獣骨研磨 (BSB 9) 15 銚頭 (検出面) 16 篋 (BSB 4) 17 同 (ASB12) 18 同 (ASB 7) 21 同 (ASB 3) 19・20 装飾品 (A検出面) 22 弓筈 (ASB 5) 23 刺突具又は装飾品 (A検出面)



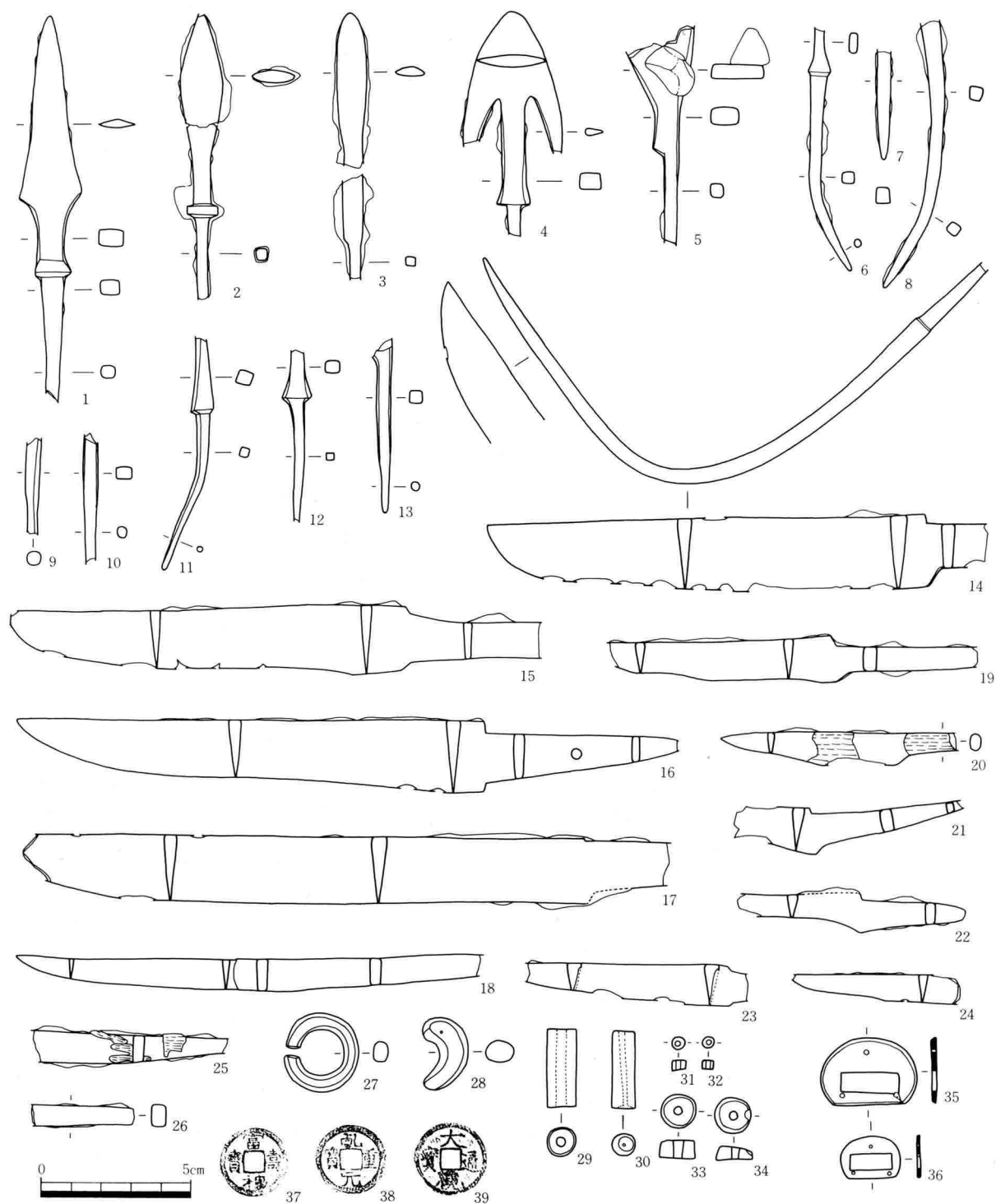
III-230 石製品・土製品実測図

1 安山岩製打製石斧 (B下層検出面) 2 蛇紋岩製砥石 (BSB26) 3 砂岩製砥石 (B下層検出面) 4 滑石製紡
 錘車 (BSB21) 5 同 (ASB15) 6 土製紡錘車 (BSB25) 7 同 (ASB15) 8 同 (ASB24・25) 9・11・12
 同 (A検出面) 10 同 (B下層検出面) 13 土(器)製円板 (ASB14) 14・15・20 同 (BSB33) 16・17 同 (BSB
 5) 18 同 (ASB11) 19 同 (ASB23) 21 同 (ASB11)



III-231 土製品・石製品・鉄製品・銅製品実測図

1~3 土(器)製円板 (ASB20) 4・5 同 (BSB32) 6・7 同 (BSK 6) 8 同 (ASB15) 9 同 (ASB 8)
 10 軽石製浮子 (ASB19) 11 同 (BSK 6) 12・13 鉄製紡錘車 (BSB17) 14 同 (BSB 5) 15 鎌 (ASB15) 16
 火打ち金具 (BSB 1) 17 不明鉄製品 (BSB15) 18 麻皮はぎ金具 (BSB19) 19 筒状鉄製品 (ASB 5) 20 銅製
 鉢 (BSB17) 21 銅製角棒 (BSB30) 22・23 釘 (BSB 6) 24 同 (ASB 1) 25 同 (ASB 2) 26 不明鉄製品 (B
 SB12) 28 同 (B検出面) 27 同 (BSK 6) 29 同 (BSB 6) 30 半球状鉄製品 (ASB 2)



III-232 鉄製品・石製品・銅製品実測図

1 鉄鏃 (BSB17) 2 同 (BSB26) 4・13同茎 (A検出面) 5 同 (BSB9) 6・7 同 (BSB3) 8 同 (ASB16) 9 同 (BSB6) 10 同 (BSB12) 11 同 (BSB26) 12 同 (BSB1) 14・15 小刀 (B検出面) 16 同 (BSB6) 17 同 (BSB11) 18 刀子 (BSB1) 19 同 (BSB26)・20・26 (A検出面) 21 同 (ASB10) 22 同 (BSB30) 23 同 (BSB12) 24 同 (BSK6) 25 同 (BSB17) 27 金環 (BSB21) 28 滑石製勾玉 (A検出面) 29 滑石製管玉 (ASB19) 30 碧玉製管玉 (A検出面) 31・32 滑石製小玉 (A下層検出面) 33 同 (BSB35) 34 同 (ASB15) 35・36 銅製丸鞆 (A検出面) 37 (BSB1) 38 (B検出面) 39 (BSB10)

7 屋地遺跡出土の人骨および獣骨

西沢 寿晃 (信州大学医学部第二解剖学教室)

宮尾 嶽雄 (愛知学院大学歯学部第二解剖学教室)

I 人骨—B 1号土壙墓

土壙墓中にはほぼ全身にわたる部位を残し、埋葬位を保って出土したものである。頭部から上体はわずかに右方を向き、右上肢は体側に、左上肢は肘関節で屈曲して胸郭上に置かれている。骨盤部は上方を向き、大腿部は左右揃えて右側に倒れ、下腿も揃ってやや強く屈曲されている。比較的保存の良い下肢骨以外は、脆弱な骨質となり、ほとんど原形を保たない。以下、各骨の形質的特徴について略記する。

頭蓋骨：脳頭蓋の各部が崩壊しながらもやや原形を残す程度である。骨壁は比較的薄く、右・側頭骨の下顎窩は深い。歯は上顎(右) C～M³まで残存するが、M¹・M²が歯根先端を欠き、他はすべて歯冠のみである。M³を除きそれぞれの咬頭に限って咬耗が生じており、象牙質の露出は認められず、おおむね*Broca*の1°程度である。

寛骨：両側の寛骨臼周縁と腸骨体の一部が残るのみである。大坐骨切痕は円型で深く、男性的な形状を示す。

大腿骨：両側とも近・遠位端の一部を欠失するが、骨体はほぼ原形を保つ。骨体はやや前湾の傾向がみられ、骨壁は厚く頑丈である。殿筋粗面が粗雑に発達するのに比して、粗線は細く稜状に隆起する程度である。最大長は42～45cmの範囲とみられる。骨体中央横断示数106.9でいわゆるピラステルの形成度は弱く、同上部90.6は正型に属する。脛骨：両側とも骨体部分のみが残存する。前稜は鋭く、かなり頑丈な形態である。ヒラメ筋線の発達良好。骨間縁も明瞭である。骨体中央横断示数63.6は中脛。同栄養孔部61.1は平脛に属する。大腿骨・脛骨骨体の主な計測値を表-1に示す。腓骨：両側の骨体中央の小部分のみが残存。距骨(右・左)、踵骨(左)：それぞれがほぼ完形を保つ。ほかに足根骨・指骨の一部が残る。なお、上肢骨はすべて土中で細片状に損壊されている。

本人骨は160cm以上の身長を有する、かなり強壯な骨格を具えた壮年期の男性のものと推定される。

II 獣骨

屋地遺跡の獣骨出土地点はB地区のものが大半であり、A地区のものがわずかに混在している。包含層は覆土中、床面直上のものなどの区分はあるが、すべて破碎または腐朽した骨片で、残存の傾向や種別をみると、かなり攪乱された状態がうかがわれる。本稿では動物の種類・頭数・破碎の程度などを明らかにすることを目的としたので、すべてを一括して取り扱った。同定された獣骨類は次の3目7種で、ほかに若干の鳥骨・魚骨が含まれている。

(1) イヌ 食肉目イヌ科 (*Canis familiaris*) (2) テン 食肉目イタチ科 (*Martes melampus*) (3) イタチ 食肉目イタチ科 (*Mustela sibirica itatsi*) (4) イノシシ 偶蹄目イノシシ科 (*Sus scrofa leucomystax*) (5) シカ 偶蹄目シカ科 (*Cervus nippon*) (6) ウシ 偶蹄目シカ科 (*Bos taurus*) (7) ウマ 奇蹄目ウマ科 (*Eguus caballus*)

(1) イヌ

出土した骨と歯は以下の通りである。

1) 上顎骨切歯部(左) 1点。2) 下顎骨体部、次の4点。i) 左P₃～M₂部、P₄・M₁・M₂植立。ii) 左C～P₂部、犬歯根残存、P₁・P₂植立。iii) 右M₁部。iv) 左P₂～P₃部、P₂・P₃植立、これのみがB区出土。3) 下顎

枝部、次の3点。i) 左角突起部。ii) 左筋突起・関節突起部。iii) 右筋突起部。4) 聴胞(右) 1点。5) 胸椎1点。6) 大腿骨骨頭部(左) 1点。

上記の下顎骨体部に植立している歯のほかに、次の遊離歯が出土している。i) 上顎右M² 1点。ii) 下顎右P₂、P₃、P₄、M₁、M₂各1点。

下顎骨体左P₂・P₃部が2点、下顎左P₂およびP₃が各2点みられるので、推定最少個体数は2頭である。A区に1頭、B区に1頭とみられる。しかし、これらの下顎P₂およびP₃の大きさの間には大きさの差がなく、同一品種であるとみてよい。出土遺構は、A1号住居址及びA19号住居址内集石(III-42)で共に平安時代に比定されている。

下顎M₁(裂肉歯)は、左右各1点がA区より出土しているが、それらの歯冠近遠心径はいずれも23.5mmであった。この値は、現代の信州柴犬(19.2mm)、甲斐犬(19.3mm)、紀州犬(21.3mm)よりはかなり大きく、秋田犬(25.0mm)よりはやや小さい。この時代にかなり大型のイヌが飼育されていたことが明らかである。後述するように、本遺跡から、シカやイノシシの骨がかなり出土しており、狩猟活動もさかんに行われていたことが示されているから、猟犬として飼育されていたのであろう。

(2) テン

下顎骨(左) 1点のみが検出された。P₃・P₄・M₁が植立している。毛皮獣として、利用価値があったものと思われる。

(3) イタチ

次に示す骨や歯が検出された。1) 下顎骨(左) 1点、P₂・P₃・P₄・M₁が植立している。2) 胸椎1点。3) 上腕骨左右各1点。4) 橈骨(右) 1点。5) 尺骨(右) 1点。6) 寛骨、左2点、右1点。7) 大腿骨(左) 1

表-1 大腿骨・脛骨々体の計測値

大 腿 骨 (右)		脛 骨 (右)	
最 大 長〔1〕	42~45	中央矢状径〔8〕	33.0
骨体中央周〔8〕	97.0	中央横径〔9〕	21.0
中央矢状径〔6〕	31.0	中央横断示数〔9:8〕	63.6
中央横径〔7〕	29.0	當養孔部矢状径〔8a〕	36.0
中央横断示数〔6:7〕	106.9	當養孔部横径〔9a〕	22.0
骨体上部最大径〔9'〕	32.0	當養孔部横断示数〔9a:8a〕	61.1
骨体上部最小径〔10'〕	29.0		
上部横断示数〔10':9'〕	90.6		

表-2 シカ主要骨の出土数

骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	大腿骨	脛骨	中手骨	中足骨	距骨	踵骨	中心第4足根骨
左	1							8	3	5
完 存							2			
近 位 端				(1)	2	2	4			
遠 位 端		2	2	3	4		3(2)			
右	5							4	7	4
完 存						(1)				
近 位 端			2	1	2	1	3			
遠 位 端		1	5(2)	2	2	4(3)	3(1)			

(): 遊離骨端数

点。8) 脛骨 (右) 1 点。

左側の寛骨が 2 点みられるので、推定最小個体数は 2 頭である。

上記のテンとともに、武具や馬具の装飾用にその毛皮が利用されていたのであろう。イタチ、テン、タヌキ、キツネ、シカなどの毛は、毛筆の材料ともなる。

(4) イノシシ

次に示す骨や歯が検出された。1) i) 上顎骨 (右) $P^3 \cdot P^4$ 部 1 点、 $P^3 \cdot P^4$ が植立。ii) 上顎骨 (右) $P^1 \sim P^3$ 部 1 点、 $P^1 \sim P^3$ の歯根残存。iii) 上顎切歯骨 (左) 1 点。iv) 上顎左 M^3 1 点。v) 上顎右 I' 1 点。2) 下顎骨 (左) 2 点、i) 下顎枝部と下顎体後部で、後者に $M_2 \cdot M_3$ が植立。ii) 下顎犬歯 (右) 1 点、雄のもの。3) 下顎 (右) M_3 。4) 胸椎と腰椎各 1 点。5) 上腕骨 (右) 遠位端部 1 点。6) 尺骨近位端部左右各 1 点、左の 1 点には骨端線残在。7) 橈骨 (左) 近位端部 2 点、8) 大腿骨 (左) 骨体下部 1 点。9) 基節骨 1 点。

上顎骨 (右) P^3 部、橈骨 (左) 近位端が各 2 点みられるので、推定最少個体数は 2 頭である。なお、これらの他に、長管骨の骨体部が破碎された細片が存在している。また、咬合面が著しく磨耗している大白歯と、肘頭が骨端軟骨のところではずれた幼若齢個体の尺骨がみられており、成体から幼若齢の個体まで、猟獲の対象とされていたことがわかる。

(5) シカ

出土骨片中の大半がシカのものと思なされる。これらは四肢長骨の骨体部分のものが多く、ほとんどが骨の弾力性を失わない生の状態での人為的な加力による骨折線を有する破碎骨片である。

次の骨および歯が検出された。1) i) 後頭顆 2 点。ii) 側頭骨内耳部、左右各 1 点。2) i) 下顎骨体 (右) 1 点、 $M_1 \sim M_3$ 植立。ii) 下顎骨体 (右) $P_3 \cdot P_4$ 部 1 点、 $P_3 \cdot P_4$ 植立。iii) 下顎骨体 (右) 1 点、 $M_1 \cdot M_2$ 植立。iv) 下顎骨体 (右) 1 点、 $P_4 \cdot M_1 \sim M_3$ 植立。v) 下顎骨体前端部 (左) 1 点。3) 上顎 M^1 左右各 1 点。下顎 (右) $M_2 \cdot M_3$ 各 2 点。4) 環椎・軸椎を含む椎骨計 5 点。5) 肋骨片・胸骨片各 1 点。6) 寛骨 (右) 2 点。

以上のほかに四肢骨の多くが検出されたが、その結果を表 2 にまとめて示した。

出土数の最も多いのは、歯では下顎 (右) M_2 の 7 点であるが、四肢骨については距骨 (左) 8 点、次いで踵骨 (右) 7 点である。推定最少個体数は 8 頭となり、イノシシの 2 頭よりずっと多い。

また、橈骨 (右) 遠位端 5 点のうち 2 点、中手骨 (右) 5 点のうち 3 点、中足骨 (右) 遠位端 3 点のうち 1 点が、骨端軟骨部ではずれた遊離骨端であった。幼若齢個体の比率の高いことが注目される。

シカの角 シカの角の多くは、角幹が円筒状に残るものや、角坐や第 1 枝の分岐部などを含む、比較的大形の断片となっている。計 18 片程の断片のうち 11 片に何らかの人為的な加工痕が認められる。角器を作出する素材として製作途次のもの、すでに必要部分を採り出したあと廃棄された残存部分などであろうが、かなり無駄無く利用されていたことがうかがわれ、狩猟対象獣としての経済的価値の高さが指摘できる。加工痕の形状はおおむね次のようである。①角幹を輪切り状に切断したもの一周縁を横位に鋭く切削し、中心部をやや残して横折。②角幹を縦割したもので、平滑な割面が 1 面または 2・3 面残る。③一端を丸く調整したもの。またはその周囲を円錐状に削り取ったものなどがある。

(6) ウシ

1) 肩甲骨 (左) 1 点、肩甲骨棘や下角の一部を欠失するがほぼ定存する。2) 脛骨 (左) 1 点、近位端欠、遠位

骨端線残存。3) 中足骨(左) 1点、下平部が残り、遠位骨端線残存。以上3点のうち欠失部位はいずれも自然崩壊によるものである。これらは集石2地点に一括されるが、若い個体の骨を含んでおり、すべての骨が同一個体であるかは不明である。推定最少個体数は1頭である。

(7) ウマ

1) 後頭顆(右)、後頭骨底部各1点。2) 遊離歯として臼歯のみが約10点。3) 肩甲骨2点(左)。4) 上腕骨2点(右・左)、各遠位端で同一個体。5) 尺骨1点(左)近位端。6) 橈骨2点(左)、近位端、中央部。7) 寛骨(右)1点、寛骨臼。8) 第1指骨1点。その他に骨体部分の細片が若干残るが、これらはすべて自然の崩壊によるものである。肩甲骨や橈骨の重複から推定頭数は2頭となる。なお、すべてA地点の出土である。

III その他

以上にあげた哺乳類の遺存体のほかに、キジバト大とみられる鳥類の橈尺骨ほか2点と、海産魚であるヒラメ(*Paralichthys olivaceus*)の右下顎歯骨と左上顎骨の各1点が検出されている。ヒラメの推定体長は35~40cmで1~2年魚とみられる(愛知県教育センター、大江文雄氏の御教示による)。干物または塩蔵品としてもたらされたものであろうが、当時の食生活や物流経済を考える上で興味深い資料であろう。

IV まとめ

長野市松代町屋地遺跡は、平安時代の文化遺物を多く包含する古墳~平安時代の遺跡とみられている。

1) 人骨は土壙墓中に埋葬位を保って、ほぼ全身にわたる骨を残していた。屈葬による被葬者は、160cm以上の身長を有する、強壯な骨格の壮年期男性と推定された。

2) 家畜としては、イヌ、ウシ、ウマが検出された。イヌの体格は、信州柴犬や甲斐犬よりかなり大きく、秋田犬よりはやや小さい。ウシ、ウマの体の大きさについては、今後の検討を要する。出土最少個体数はイヌ2頭、ウシ1頭、ウマ2頭である。

3) 狩猟獣としてはテン、イタチ各1頭、イノシシ2頭、シカ8頭が検出された。シカが主要対象獣で、皮革や食肉を得るほかに、特にその角は骨角器の素材として重視されていたことがうかがわれた。

4) そのほかに、キジバト大の鳥の骨片と海産魚であるヒラメの頭骨片が検出されている。ヒラメの出土は、当時の食生活や物流経済を考える上で興味深い資料であろう。

8 出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
A 8号住居址 (III-8)						A 15号住居址 (III-36)					
1	壺	24.8			ヘラミガキ・ハケナデ	1	壺	15.6			ヘラミガキ
2	壺				ヘラミガキ・ハケナデ	2	坏	11.4	4.4	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ
3	壺				ヘラミガキ・ナデ	3	坏	13.4	4.4	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ・内黒
4	壺			10.2	ヘラミガキ・ハケナデ	4	鉢	13.6	8.7	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ・内黒
5	蓋				ヘラミガキ・ナデ	5	鉢	11.2	7.5	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ・内黒
6	甕	22.6		(34.0)	ヘラミガキ	6	鉢	10.6	8.9	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ・内黒
7	甕			7.0	ヘラミガキ	7	鉢	12.4	10.8	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ
8	甕			5.4	ヘラミガキ	8	鉢	11.7	10.0	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ
9	鉢			6.0	ヘラミガキ	9	鉢	13.4			ヘラケズリ・ナデ
10	高坏	21.4			ヘラミガキ	10	鉢	16.0	10.8	丸底	ヘラミガキ・ナデ
11	高坏				ヘラミガキ・ハケナデ	11	鉢	15.5	9.4	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ・ナデ
A 14号住居址 (III-11)						12	鉢	20.8	11.2	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ
1	壺	25.0			ハケナデ・ヘラミガキ	13	甗			4.7	ヘラミガキ
2	壺				ハケナデ・ヘラミガキ	14	甕			7.6	ハケナデ・ナデ
3	高坏	22.1	19.5	12.6	ヘラミガキ・ハケナデ	15	甕			7.5	ハケナデ・ナデ
Y 4号住居址 (III-18)						16	甕			6.4	ハケナデ・ナデ
1	坏	12.4	4.0	丸底	ヘラミガキ・内黒	17	高坏				ヘラミガキ・ナデ
2	坏	13.5	5.6	丸底	ヘラミガキ・内黒	A 16号住居址 (III-39)					
3	鉢			6.5	ハケナデ・ナデ	1	甕	21.7			ヘラミガキ・ハケナデ
4	鉢	12.4	11.1	6.0	ナデ	2	甗			丸底	ロクロナデ・ナデ
5	鉢	12.5	10.0	6.1	ハケナデ・ナデ	A 19号住居址 (III-43)					
6	甕	20.0	35.0	8.4	ハケナデ・ヘラケズリ	1	坏	13.9	4.4	丸底	ヘラナデ
A 6号住居址 (III-20)						2	坏	13.3	5.9	丸底	ヘラケズリ・ナデ
1	壺	15.0			ヘラミガキ・ハケナデ	3	坏	13.9	6.2	9.2	ヘラケズリ・ナデ
A 9号住居址 (III-24・25)						4	坏	12.2	4.9	7.0	ヘラケズリ・ナデ
1	坏	17.6	4.9	9.9	ヘラミガキ・内黒	5	坏	15.6	5.1	丸底	ヘラミガキ・内黒
2	坏	15.8	2.5	9.8	カキメ・ヘラミガキ	6	坏	14.6			ヘラミガキ
3	坏	15.7	2.7	9.1	カキメ・ヘラミガキ	7	甕	17.2			ハケナデ・ナデ
4	高坏			9.6	赤褐色・透し孔	8	高坏	15.4	13.9	11.6	ヘラミガキ・ナデ・内黒
5	鉢	12.2	9.1	5.8	ナデ・木葉痕	9	高坏	15.6	13.0	11.0	ヘラミガキ・ナデ・内黒
6	鉢	17.4	17.3	5.4	ハケナデ・ナデ・木葉痕	10	高坏				ヘラミガキ・ナデ
7	甕	17.3	35.4	6.4	ハケナデ・ナデ・木葉痕	A 23号住居址 (III-45)					
1	坏	13.2	5.6	丸底	ヘラミガキ・暗文	1	甕	30.2			ヘラミガキ・ナデ
2	坏	7.6	7.0	4.4	ヘラミガキ・ヘラナデ	2	甕	14.0			ハケナデ・ナデ
3	甕	15.7	22.0	7.5	ヘラナデ	A 24号住居址 (III-49)					
4	甕	10.0	(45)	(8)	ヘラナデ・ナデ	1	鉢	11.7			ヘラナデ・ナデ
A 10号住居址 (III-28)						A 25号住居址 (III-50)					
1	坏	14.3	3.6	6.2	ロクロナデ・糸切	1	甕	22.8			ハケナデ・ヘラナデ・ナデ
2	甕	17.5			ヘラケズリ・ナデ	B 20号住居址 (III-51)					
A 12号住居址 (III-30)						1	甕	18.3			ハケナデ・ナデ
1	高坏	16.6			ヘラミガキ・内黒	B 21号住居址 (III-56)					
						1	坏	12.1	6.9	丸底	ヘラミガキ・内黒

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
2	坏			丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ	16	鉢	14.2	13.7	5.4	ハケナデ・ヘラナデ
3	甌	15.6	9.4	5.6	ナデ・ヘラナデ	17	鉢	10.4			ヘラミガキ・ハケナデ
4	甕			7.0	ヘラミガキ・ハケナデ	B30号住居址 (III-73)					
5	甕	15.2	19.6	8.0	ヘラナデ・ナデ	1	蓋	11.4	3.3	丸天	ロクロナデ・ヘラケズリ
6	壺	21.6	31.6	7.4	ヘラミガキ・ヘラナデ	2	坏	7.6	4.5	丸底	ヘラミガキ・内黒
7	壺	16.2	23.0	7.0	ヘラミガキ	3	坏	9.3	6.5	丸底	ヘラミガキ・内黒
8	壺	19.0			ヘラミガキ・ヘラナデ	4	鉢	9.7	9.4	5.3	ナデ
9	甕	20.6			ヘラミガキ	5	坏	16.8	(7)		ヘラミガキ・ヘラケズリ
10	鉢	12.7			ヘラミガキ	6	鉢	15.8	11.2	丸底	ヘラミガキ・ヘラナデ
11	甕	22.0			ヘラミガキ	7	甌	15.5	12.6	丸底	ヘラミガキ
12	甌			8.6	ヘラミガキ	8	甕			5.4	ヘラナデ・ナデ
B23号住居址 (III-57)						9	甕			7.5	ヘラナデ・木葉痕
1	坏	14.0	8.1	丸底	ヘラミガキ・内黒	B31号住居址 (III-76)					
B24号住居址 (III-63)						1	高坏	17.4	17.4	9.0	ヘラミガキ・内黒
1	坏	15.9	4.8	8.4	ヘラミガキ・内黒	2	坏	16.1	3.9	丸底	ヘラミガキ・内黒
2	坏	15.9	5.4	丸底	ヘラミガキ・内黒	3	甕	16.6			ハケナデ・ナデ
3	坏	15.6	5.1	丸底	ヘラミガキ	4	甕				ハケナデ・ナデ
4	甕	17.1	24.5	7.8	ハケナデ・ナデ	B33号住居址 (III-79)					
5	甕	14.9	25.7	7.0	ハケナデ・ヘラナデ	1	高坏	16.0			ヘラミガキ・内黒
6	甕	19.6			ヘラナデ	2	高坏	16.2			ヘラミガキ・内黒
7	甕	16.4			ハケナデ・ナデ	3	高坏			13.0	ヘラミガキ・内黒
8	甌	(16.9)	9.1	6.3	ヘラナデ・口孔	4	甌			丸底	ヘラミガキ・擬口縁
9	甌	21.6	19.1	10.7	ハケナデ・ヘラミガキ	5	坏	12.9			ハケナデ・ヘラナデ
B28号住居址 (III-66)						6	甕	14.8			ハケナデ・ナデ
1	坏	14.1			ヘラミガキ	7	甕	18.1			ハケナデ・ナデ
2	鉢	15.8	15.5	5.7	ヘラミガキ・内黒	B34号住居址 (III-80)					
3	甕	12.4			ナデ・成形痕	1	鉢	13.3	14.5	丸底	ヘラケズリ・ナデ
4	鉢	16.4	15.7	5.1	ハケナデ・ナデ	2	埴	10.0			ヘラミガキ
5	甕	13.8			ハケナデ・ナデ	B36号住居址 (III-83)					
6	甕	13.3			ハケナデ・ナデ	1	高坏	16.4			ヘラミガキ
B29号住居址 (III-69)						2	甕	15.5			ヘラミガキ・10本歯
1	坏	10.6	4.0	丸底	ロクロナデ	B32号住居址 (III-87)					
2	坏	11.2	4.2	丸底	ロクロナデ	1	甌			丸底	ロクロナデ・底部タキメ
3	坏	14.8	5.2	丸底	ヘラミガキ・内黒	2	甕	17.9			ハケナデ・ナデ
4	坏	14.5	3.4	丸底	ヘラミガキ・内黒	B9号土壙 (III-91)					
5	坏	14.6	4.3	丸底	ヘラミガキ・内黒	1	壺	30.2			ヘラミガキ・ナデ
6	坏	14.2	3.7	5.7	ヘラミガキ・内黒	2	高坏			14.5	ヘラミガキ・ナデ
7	坏	13.3	4.1	丸底	ヘラミガキ・内黒	B10号土壙 (III-96~98)					
8	鉢	9.6	8.5	丸底	ヘラミガキ・内黒	1	高坏	18.8	13.9	13.5	ヘラミガキ・ナデ
9	甌	16.2	8.7	丸底	ヘラミガキ・内黒	2	高坏	17.9	13.0	14.4	ヘラミガキ・ナデ
10	壺	19.3	30.7	8.6	ヘラミガキ・ハケナデ	3	高坏	17.4	13.0	13.0	ヘラミガキ・ナデ
11	壺	19.0	27.8	丸底	ヘラミガキ・ハケナデ	4	高坏	18.6	14.7	14.1	ヘラミガキ・ナデ
12	壺	20.4	29.4	3.0	ヘラミガキ・ハケナデ						
13	甕	16.4									
14	甕			6.3	ヘラナデ・ナデ						
15	壺			丸底	ロクロナデ・ヘラケズリ						

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
5	高坏	18.1	14.0	12.6	ヘラミガキ・ナデ	3	手握			丸底	ナデ
6	高坏	18.4	15.7	13.4	ヘラミガキ・ナデ・ハケナデ	A 2号住居址 (III-120)					
7	高坏	17.0			ヘラミガキ	1	坏	13.8	4.0	7.0	ロクロ・糸切・内黒
8	高坏			13.0	ヘラミガキ・ナデ	2	坏	14.2	4.5	7.1	ロクロ・糸切・内黒
9	高坏			11.7	ヘラミガキ・ナデ	3	坏	15.5	4.4	6.6	ロクロ
10	高坏			11.5	ヘラミガキ・ナデ	4	坏	13.7	4.2	7.0	ロクロ・糸切
11	高坏				ヘラミガキ・ナデ	5	坏	13.4	4.5	6.0	ロクロ・糸切
12	壺				ヘラミガキ・ナデ・擬口縁	6	坏	13.8	4.0	7.0	ロクロ・糸切
13	甕	17.9			ヘラミガキ・ナデ	7	坏	12.8	3.9	6.0	ロクロ・糸切
14	坏	11.4	5.1	丸底	ヘラミガキ	8	坏	13.0	3.6	6.4	ロクロ・糸切
15	坏	9.7	5.7	4.6	ヘラミガキ	9	坏	12.4	3.8	7.0	ロクロ・糸切
16	壺		45.2	7.1	ヘラミガキ・ナデ	10	坏	12.4	3.4	6.4	ロクロ・糸切
17	壺	16.8			ヘラミガキ・ハケナデ	11	坏			7.2	ロクロ・糸切
18	甕	10.4			ヘラミガキ	12	坏			6.6	ロクロ・糸切
19	埴	10.4	14.5	丸底	ヘラミガキ・ハケナデ	13	壺			8.5	ロクロ・糸切・ヘラケズリ
20	甕	15.0			ヘラミガキ・ハケナデ	14	皿	8.7	2.0	5.1	ロクロ・糸切
21	壺	14.7	24.1	(4.7)	ヘラミガキ・ハケナデ	15	壺			10.7	ロクロ・ナデ
B13号土壙 (III-99)						16	坏			8.7	ロクロ・糸切
1	壺	17.5			ヘラミガキ・ナデ	17	甕	16.0			ロクロ
2	甕	19.0			ヘラナデ・ナデ	A 3号住居址 (III-123)					
A 1号溝址 (III-100)						1	坏	16.8			ロクロ
1	甕	7.2			ナデ	2	坏	13.0			ロクロ
2	坏	13.5			ヘラミガキ・内黒	3	坏	12.7			ロクロ
3	高坏			12.0	ヘラミガキ・ナデ	4	甕			7.6	ロクロ
Y 2号住居址 (III-104)						5	甕	19.8			ヘラミガキ
1	坏	12.9	4.4	6.6	ロクロ・糸切	4号住居址 (III-124)					
2	坏	13.3	4.3	7.0	ロクロ・糸切	1	坏	13.4			ヘラミガキ・内黒
3	坏	13.3	4.0	7.0	ロクロ・糸切	2	坏			6.2	ヘラミガキ・篋ケズリ・内黒
4	坏	13.7	4.7	7.4	ロクロ・糸切	3	坏	5.9			ロクロ
5	坏	13.7	4.0	9.8	ロクロ・糸切	4	坏			6.0	ロクロ・糸切
6	坏	15.0	7.6	9.2	ロクロ・糸切	5	甕	6.9			ロクロ
Y 3号住居址 (III-105)						6	甕	17.7			ロクロ
1	坏	13.0	3.6	6.0	ロクロ・糸切	7	甕	27.4			ロクロ
Y 4号住居址 (III-112)						A 5号住居址 (III-128)					
1	坏	13.8	3.7	7.8	ロクロ・篋切	1	坏	9.7	4.7	7.9	ロクロ・回篋ケズリ
2	甕	13.0	13.0	6.8	ロクロ・カキメ	2	坏	13.6	5.9	6.6	ロクロ・ヘラミガキ
Y 5号住居址 (III-113)						3	鉢	12.4	10.9	7.0	ロクロ・篋ケズリ
1	坏	12.8	3.6	5.6	ロクロ・糸切	4	甕			6.8	ヘラケズリ・ナデ
2	坏	13.8			ロクロ	A 7号住居址 (III-132)					
3	甕	24.0			ロクロ	1	坏	16.3	4.4	7.6	ロクロ・篋ケズリ・内黒
A 1号住居址 (III-114)						2	坏	13.5	4.7	7.2	ロクロ・糸切・内黒
1	坏	16.2			ロクロ	3	坏	13.0	3.4	6.8	ロクロ・内黒
2	皿	9.5	2.0	4.8	ロクロ・糸切	4	坏			7.0	ロクロ・内黒・糸切
						5	坏			6.5	ロクロ・内黒・回篋ケズリ
						6	坏	15.5	5.2	9.6	ロクロ・糸切

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
7	坏	12.4			ロクロ	7	坏	14.0	3.3	10.5	ロクロ・回籠ケズリ
8	坏	13.5	4.5	5.4	ロクロ・糸切	8	鉢	23.2			ロクロ
9	坏	15.2			ロクロ	9	甕	24.6			ヘラケズリ・ナデ
10	鉢	20.6			ロクロ	10	甕	25.4			ロクロ・カキメ・ハケナデ
11	甕	20.2			ロクロ・ヘラケズリ・ハケナデ	11	甕	24.4			ロクロ・ヘラケズリ・ナデ
12	甕	21.4			ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	A22号住居址 (III-148)					
13	甕	21.8			ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	1	坏	15.1			ナデ・ヘラケズリ
A11号住居址 (III-134)						2	坏	13.4	5.0	6.0	ロクロ・回籠ケズリ・内黒
1	坏	12.9	4.1	4.7	ロクロ・糸切・内黒	3	坏	13.7	4.5	8.6	ロクロ・籠切
A13号住居址 (III-136)						4	坏	12.4	4.3	6.9	ロクロ・籠切
1	坏	13.4	3.5	5.6	ロクロ・糸切・墨書	5	坏	13.6	4.0	6.9	ロクロ・回籠ケズリ
2	坏	13.5	4.0	6.2	ロクロ・糸切	6	坏	18.5			ロクロ・回籠ケズリ
3	坏	12.5	3.9	6.8	ロクロ・糸切	7	蓋	17.4	4.3		ロクロ・回籠ケズリ
4	坏	12.3	3.7	5.0	ロクロ・糸切	8	甕	14.6			ナデ
5	坏	13.3	3.6	5.8	ロクロ・糸切	B1号住居址 (III-151)					
6	坏	12.6	3.7	5.2	ロクロ・糸切	1	坏	15.8			ロクロ
7	坏	13.5	4.2	6.8	ロクロ・糸切	2	皿	8.8	2.3	5.1	ロクロ・糸切
8	坏	10.8	4.0	7.5	ロクロ・籠切	3	皿	8.1	2.2	5.0	ロクロ・糸切
9	坏	11.8			ロクロ	B2号住居址 (III-154)					
10	坏	12.7	3.5	6.0	ロクロ・ヘラケズリ・内黒	1	皿	9.4	1.9	4.7	ロクロ・糸切
11	坏	13.0	3.5	5.2	ロクロ・ヘラケズリ・内黒・籠ケズリ	2	皿	10.0	2.0	5.0	ロクロ・糸切
12	坏	13.6	3.9	5.8	ロクロ・ヘラケズリ・内黒・籠ケズリ	3	皿	9.8	1.8	5.4	ロクロ・糸切
13	坏	16.9	5.7	8.0	ロクロ・ヘラケズリ・内黒・籠ケズリ	4	皿	9.9	1.9	4.9	ロクロ・糸切
14	坏	16.0	6.0	8.4	ロクロ・ヘラケズリ・内黒・籠ケズリ	5	皿				ロクロ・糸切
15	坏	15.4	5.1	6.4	ロクロ・内黒・籠ケズリ	6	皿	8.3	2.3	4.7	ロクロ・糸切
16	蓋	14.4			ロクロ・ヘラケズリ	7	皿	8.8	2.2	5.3	ロクロ・糸切
17	甕	21.7	(24.2)	丸底	ロクロ・ヘラケズリ・ハケナデ	8	皿	9.5	2.2	5.6	ロクロ・糸切
18	甕	23.2			ロクロ・ヘラケズリ・ハケナデ・カキメ	9	皿	9.2	1.6	4.3	ロクロ・糸切
19	甕	22.0			ロクロ・ヘラケズリ・ナデ	10	皿	9.6	2.2	4.7	ロクロ・糸切
A20号住居址 (III-141)						11	坏	14.5	4.2	7.2	ロクロ・糸切
1	坏	13.9	4.2	7.2	ロクロ・ヘラケズリ・内黒	12	坏	15.8	4.3	7.0	ロクロ・糸切
2	坏	13.1	3.5	6.2	ロクロ・ヘラケズリ・内黒	13	皿	9.0	3.3	4.5	ロクロ・ナデ
3	坏	13.9	4.4	6.7	ロクロ・糸切	14	皿	8.9	3.5	5.1	ロクロ・ナデ
4	坏	12.9	4.0	6.0	ロクロ・糸切	15	皿	11.1	3.8	7.6	ロクロ・ナデ
5	坏	12.3	4.0	9.5	ロクロ・糸切	16	皿	11.9	3.9	7.5	ロクロ・ナデ
6				6.5	ロクロ・糸切	17	坏	15.8	5.1	7.4	ロクロ・ナデ
7		5.8			ロクロ	B3号住居址 (III-155)					
8		11.6			ロクロ	1	坏	14.8	3.9	7.0	ロクロ・糸切
9		8.8	8.5	6.2	ロクロ・糸切	B5号住居址 (III-160)					
A21号住居址 (III-144)						1	皿	8.4	1.6	3.8	ロクロ・糸切
1	坏	15.4			ロクロ・ヘラケズリ・内黒	2	皿	8.6	2.0	4.5	ロクロ・糸切
2	坏	15.0			ロクロ・内黒	B6号住居址 (III-165)					
3	坏	15.2	4.0	7.6	ロクロ・糸切	1	甕	12.6			ナデ
4	坏	12.6	3.8	6.0	ロクロ・糸切	2	皿	8.5	2.5	4.8	ロクロ・糸切
5	坏	12.1	3.9	5.8	ロクロ・糸切						
6	坏	12.6	2.8	10.4	ロクロ・糸切						

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
B7号住居址 (III-166)						10	皿	8.0	1.9	4.0	ロクロ・糸切
1	皿	8.8	2.6	5.1	ロクロ・糸切	11	皿	8.8	1.9	4.7	ロクロ・糸切
2	皿	8.7	1.7	4.2	ロクロ・糸切	12	皿	8.8	2.0	4.4	ロクロ・糸切
3	皿	8.9	1.6	5.0	ロクロ・糸切	13	皿	7.6	1.9	4.2	ロクロ・糸切
4	皿			7.1	ロクロ	14	皿	8.0	2.6	4.4	ロクロ・糸切
B9号住居址 (III-171)						15	皿	10.0	2.2	5.2	ロクロ・糸切
1	皿	9.6	2.0	5.2	ロクロ・糸切	16	皿	8.3	3.4	4.7	ロクロ・ナデ
2	皿	8.6	2.0	4.5	ロクロ・糸切	17	皿	7.9	3.7	4.8	ロクロ・ナデ
3	皿	9.1	1.8	4.0	ロクロ・糸切	18	皿	9.1	3.5	4.8	ロクロ・ナデ
4	皿	9.0	2.0	4.6	ロクロ・糸切	19	皿	9.2	3.1	4.8	ロクロ・ナデ
5	皿	9.6	2.0	5.2	ロクロ・糸切	20	皿	7.5	3.3	4.6	ロクロ・ナデ
6	皿	9.1	1.9	4.3	ロクロ・糸切	21	皿	7.8	3.3	4.0	ロクロ・ナデ
7	皿	9.2	2.4	3.9	ロクロ・糸切	22	皿	8.0	3.4	4.6	ロクロ・ナデ
8	坏	14.9	4.0	7.0	ロクロ・糸切	23	皿	8.3	3.2	5.0	ロクロ・ナデ
9	坏	15.0	4.0	7.0	ロクロ・糸切	24	皿	7.7	3.4	4.8	ロクロ・ナデ
10	坏	13.6	4.3	6.4	ロクロ・糸切	25	皿	7.6	3.3	4.4	ロクロ・ナデ
11	羽釜	22.3	21.1	丸底	ハケナデ・ナデ	26	皿	6.9	3.4	4.0	ロクロ・ナデ
B10号住居址 (III-173)						27	皿	7.2	3.2	4.5	ロクロ・ナデ
1	坏	11.4	3.2	5.6	ロクロ・糸切	28	皿	7.3	3.3	4.4	ロクロ・ナデ
2	坏	12.4	3.3	5.6	ロクロ・糸切	29	皿	7.7	3.2	4.7	ロクロ・ナデ
3	坏	12.2	3.2	5.3	ロクロ・糸切	30	皿	7.6	3.1	4.2	ロクロ・ナデ
4	坏	13.0	4.0	6.8	ロクロ・糸切	31	皿			5.3	ロクロ・ナデ
5	坏	11.6			ロクロ・	32	坏			6.4	ロクロ・ナデ
6	坏	15.8	4.1	7.6	ロクロ・糸切	33	坏			7.3	ロクロ・ナデ
7	坏	14.4	4.1	4.9	ロクロ・糸切	34	坏	15.2	4.3	6.8	ロクロ・糸切
8	坏	14.0	4.2	4.0	ロクロ・糸切	35	坏	16.0	3.3	7.8	ロクロ・糸切
9	坏	12.2	3.9	5.7	ロクロ・糸切・回籠ケズリ・内黒	36	坏	15.0			ロクロ
10	坏	12.8	3.4	7.6	ロクロ・籠切・内黒	B12号住居址 (III-179)					
11	坏	15.3	5.0	8.1	ロクロ・糸切	1	坏	11.0	3.3	4.8	ロクロ・糸切
12	坏	12.6			ロクロ・赤褐色	2	坏	11.4	3.5	4.8	ロクロ・糸切
13	坏	12.5	4.1	6.0	ロクロ・糸切・赤褐色	3	坏	12.3	3.9	5.4	ロクロ・糸切
14	椀			6.1	ロクロ	4	坏	12.3	3.6	5.8	ロクロ・糸切
15	蓋	17.6			ロクロ・回籠ケズリ	5	坏	13.5	4.2	5.6	ロクロ・糸切
16	壺			9.6	ロクロ・糸切	6	坏	13.7	5.2	8.6	ロクロ
17	甕	13.8			ロクロ	7	椀	13.4	3.0	6.7	ロクロ
18	甕			10.6	ロクロ	8	皿			6.9	ロクロ
19	甕	10.0	10.3	6.0	ロクロ・ヘラケズリ	9	椀	14.2			ロクロ
B11号住居址 (III-176)						10	甕	16.2			ロクロ・ナデ
1	皿	9.8	2.3	4.9	ロクロ・糸切	B13号住居址 (III-182)					
2	皿	9.3	1.9	5.0	ロクロ・糸切	1	坏	13.1	4.7	6.0	ロクロ・糸切
3	皿	8.6	1.8	4.6	ロクロ・糸切	2	椀	8.5	5.5	6.0	ロクロ
4	皿	8.8	1.8	4.8	ロクロ・糸切	3	椀			8.3	ロクロ
5	皿	8.8	1.7	4.7	ロクロ・糸切	4	皿			7.8	ロクロ
6	皿	8.4	1.9	3.9	ロクロ・糸切	5	皿			7.0	ロクロ
7	皿	8.3	1.9	4.7	ロクロ・糸切	6	皿	8.5	1.7	4.5	ロクロ・糸切
8	皿	9.0	2.0	4.8	ロクロ・糸切	7	皿	8.6	2.0	5.2	ロクロ・糸切
9	皿	9.0	2.1	4.5	ロクロ・糸切						

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
B14号住居址 (III-183)						19	皿	10.6	2.5	5.3	ロクロ・糸切
1	坏	14.7	4.0	5.5	ロクロ・糸切	20	皿	12.1	4.5	4.6	ロクロ・糸切
2	坏	14.4	5.0	8.6	ロクロ・内黒	21	坏	12.2	4.4	4.2	ロクロ・糸切
3	坏	13.4			ロクロ・内黒	22	坏	12.0	3.9	5.1	ロクロ・糸切
4	坏	12.8			ロクロ・内黒	23	坏	13.6	4.0	5.9	ロクロ・糸切
5	坏	14.2			ロクロ・内黒	24	皿	8.3	4.5	3.7	ロクロ
6	椀	14.8			ロクロ	25	皿	9.4	4.0	4.8	ロクロ
7	壺	10.2			ロクロ	26	皿	10.2	4.1	5.6	ロクロ
8	壺			7.4	ロクロ・糸切	27	皿	10.0	4.2	5.0	ロクロ
9	甕	11.4	12.1	6.2	ロクロ・糸切	28	坏	13.5	6.6	4.6	ロクロ・ナデ・内黒
B15号住居址 (III-188)						29	坏	14.8	6.4	6.8	ロクロ・ナデ・内黒
1	坏	11.2	3.7	4.5	ロクロ・糸切	30	坏			6.9	ロクロ・ナデ・内黒
2	坏	11.5	3.6	4.5	ロクロ・糸切	31	坏	13.4	5.3	7.7	ロクロ・糸切・内黒
3	坏	11.0	3.4	4.7	ロクロ・糸切	32	坏	14.4			ロクロ・内黒
4	坏	12.4	3.4	6.5	ロクロ・糸切	33	坏	12.5	5.8	6.7	ロクロ
5	坏	12.0			ロクロ	34	坏			6.6	ロクロ・内黒
6	坏	14.6	4.9	6.6	ロクロ・糸切	35	椀	14.5	5.5	7.0	ロクロ
7	坏	13.2	4.0	5.3	ロクロ・糸切	36	椀	15.1			ロクロ
8	坏	14.8	4.3	6.4	ロクロ・糸切	37	段皿	13.4	2.7	7.4	ロクロ
9	坏	14.4			ロクロ	38	段皿	10.6	2.5	5.2	ロクロ
10	坏	14.2			ロクロ	39	椀			5.7	ロクロ
11	坏	14.4			ロクロ・糸切・暗文	40	羽釜	16.9			ナデ
12	椀			7.2	ロクロ	41	羽釜	18.6			ナデ
13	甕	12.8			ロクロ	42	埴輪			20.0	ハケナデ
14	鉢	19.0			ナデ	B18号住居址 (III-196)					
B16号住居址 (III-189)						1	坏	13.0	5.0	6.2	ロクロ・糸切・内黒
1	坏	17.2	5.2	9.0	ロクロ・篋切・内黒	2	坏	13.1	4.2	7.4	ロクロ・糸切・内黒
2	坏	11.6	3.8	6.0	ロクロ・糸切・墨書	3	坏	13.4	4.7	5.5	ロクロ・内黒
B17号住居址 (III-194)						4	坏	12.4	3.9	6.2	ロクロ・糸切
1	皿	8.5	2.1	4.5	ロクロ・糸切	5	皿	12.6			ロクロ・内黒
2	皿	9.3	2.7	4.4	ロクロ・糸切	6	坏	14.8			ロクロ・内黒
3	皿	9.0	2.9	3.3	ロクロ・糸切	7	椀	13.4	5.0	6.4	ロクロ
4	皿	8.9	2.6	4.3	ロクロ・糸切	8	鉢	32.8			ロクロ
5	皿	9.2	2.6	4.0	ロクロ・糸切	B19号住居址 (III-198)					
6	皿	8.9	2.4	4.1	ロクロ・糸切	1	坏	11.1	3.3	5.2	ロクロ・糸切
7	皿	9.5	2.8	4.4	ロクロ・糸切	2	坏	11.0	3.7	6.2	ロクロ・糸切
8	皿	9.4	2.3	4.6	ロクロ・糸切	3	坏	11.9	3.6	6.3	ロクロ・糸切
9	皿	9.4	2.4	4.2	ロクロ・糸切	4	坏	11.7	3.4	6.0	ロクロ・糸切
10	皿	9.6	2.6	4.4	ロクロ・糸切	5	坏	11.8	4.0	5.6	ロクロ・糸切
11	皿	9.6	2.7	4.7	ロクロ・糸切	6	坏	11.4	3.5	6.2	ロクロ・糸切
12	皿	9.2	2.6	4.8	ロクロ・糸切	7	坏	12.4	3.9	6.0	ロクロ・糸切
13	皿	9.4	3.0	5.2	ロクロ・糸切	8		12.6	3.8	5.7	ロクロ・糸切
14	皿	10.4	2.9	4.8	スコロ・糸切	9		11.8	4.3	5.6	ロクロ
15	皿	10.3	3.0	4.3	ロクロ・糸切	10	坏	11.8	3.7	6.8	ロクロ・糸切
16	皿	9.2	2.7	4.0	ロクロ・糸切	11	坏	14.2			ロクロ
17	皿	9.8	3.4	4.9	ロクロ・糸切	12	甕	14.5			ロクロ
18	皿	9.8	2.8	4.4	ロクロ・糸切						

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
B22号住居址 (III-200)						2	坏	13.3	3.5	7.8	ロクロ・篋ケズリ
1	坏	12.9	3.7	7.4	ロクロ・篋切	3	坏	13.6	4.4	7.4	ロクロ・篋ケズリ
2	坏	12.5	4.0	9.0	ロクロ・篋ケズリ	4	坏	12.7	3.7	7.0	ロクロ・篋ケズリ
B25号住居址 (III-203)						5	坏	14.3	3.3	9.5	ロクロ・篋ケズリ
1	甕	20.3	35.0	6.8	ハケナデ・ナデ	6	坏	14.0	3.5	9.8	ロクロ・篋ケズリ
2		21.2		6.2	ヘラケズリ・ナデ	7	坏	12.7	3.5	9.4	ロクロ・回篋ケズリ
3	甕	19.8			ハケナデ・ナデ	8	坏	12.0	3.7	8.4	ロクロ・回篋ケズリ
4	甕	17.3			ハケナデ・ヘラナデ	9	坏	16.1	6.0	10.8	ロクロ・回篋ケズリ
5	甕	13.6	18.5	6.5	ヘラナデ・ナデ	10	坏	15.8	4.4	11.4	ロクロ・回篋ケズリ
6	坏	18.5	7.1	丸底	ヘラミガキ・ヘラケズリ・内黒	11	坏	14.0	3.2	10.1	ロクロ・回篋ケズリ
B26号住居址 (III-205)						12	坏	12.0	4.5	5.2	ロクロ・糸切
1	皿	8.4	1.8	4.2	ロクロ・糸切	13	坏	12.5	3.4	6.8	ロクロ・糸切
2	皿	8.7	2.3	4.7	ロクロ・糸切	14	坏	13.0	4.7	7.9	ロクロ・糸切
3	皿	9.0	1.8	4.8	ロクロ・糸切	15	坏	15.2	4.5	7.7	ロクロ・糸切
4	皿	9.7	2.0	5.0	ロクロ・糸切	16	坏	13.8	4.2	6.4	ロクロ・糸切
5	皿	8.2	2.1	4.6	ロクロ・糸切	17	坏	17.6	5.4	10.1	ロクロ・糸切
6	皿	8.7	1.7	4.5	ロクロ・糸切	18	坏	16.9	4.1	8.4	ロクロ・糸切
7	皿	8.9	2.0	5.0	ロクロ・糸切	19	坏	14.0	3.4	5.6	ロクロ・糸切
8	皿	9.6	2.0	6.1	ロクロ・糸切	20	坏			6.0	ロクロ・糸切
9	坏	16.2	4.4	8.6	ロクロ・糸切	21	坏	15.5	4.1	8.5	ロクロ・糸切
10	皿	17.8	4.9	9.5	ロクロ・糸切	22	坏	16.1	7.9	8.0	ロクロ・糸切・ナデ
11	皿	16.6			ロクロ	23	蓋	20.0			ロクロ・ヘラケズリ
12	椀	10.9	3.8	5.3	ロクロ	24	蓋	14.4	2.6		ロクロ・ヘラケズリ・赤褐色
B27号住居址 (III-211)						25	蓋	14.7			ロクロ・ヘラケズリ
1	坏	12.8	4.0	5.6	ロクロ・糸切・内黒・ヘラケズリ・墨書	26	蓋	13.5			ロクロ・ヘラケズリ
2	坏	12.8	3.7	5.6	ロクロ・糸切・内黒・ヘラケズリ	27	蓋	15.8			ロクロ・ヘラケズリ
3	坏	15.3	5.1	7.5	ロクロ・糸切・内黒・ヘラケズリ	28	横瓶	10.4	(25)	丸底	ロクロ・タタキメ・ナデ
4	坏	15.5	5.1	7.0	ロクロ・糸切・内黒・ヘラケズリ	29	横瓶	9.6			ロクロ・タタキメ・ナデ
5	坏	16.3	4.6	7.7	ロクロ・糸切	30	甕	20.2			ロクロ・ヘラケズリ・ナデ
6	坏	13.4	3.9	6.8	ロクロ・糸切	31	甕	24.1			ロクロ・ヘラケズリ・ハケナデ
7	坏	13.0	3.8	6.8	ロクロ・糸切	32	壺	14.2			ヘラミガキ・ナデ
8	坏	11.8	3.6	5.8	ロクロ・糸切	B地区土壌 (III-224)					
9	坏	12.9	4.4	7.8	ロクロ・ナデ・暗文・内黒	1	椀	6.4			ロクロ
10	坏	10.2	4.1	(6)	ロクロ・糸切・内黒	2	坏	13.0	3.6	8.0	ロクロ・糸切
11	壺	13.3			ロクロ	3	坏	12.3	3.7	6.0	ロクロ・糸切
12	甕	23.0			ロクロ・カキメ	4	坏	14.0	3.9	6.0	ロクロ・糸切
13	甕			6.2	ロクロ・ヘラケズリ	5	甕	24.2			ハケナデ・ヘラミガキ
B35号住居址 (III-212)						6	甕			6.5	ハケナデ・ナデ
1	皿	8.8	2.4	4.6	ロクロ・糸切	7	坏	14.8	6.8	丸底	ヘラミガキ・ヘラナデ・内黒
2	皿	8.6	2.1	4.6	ロクロ・糸切	8	坏	10.3	4.4	5.6	ロクロ・ナデ
3	皿	8.6	2.2	5.2	ロクロ・糸切	9	壺	16.0			タタキ・ヘラケズリ
4	坏	14.8	4.3	7.5	ロクロ・糸切	10	高坏			6.9	ロクロ
5	皿	9.3	4.1	6.0	ロクロ・糸切	11	坏	12.6	3.5	4.9	ロクロ・糸切
A2号集石址 (III-216)						B地区ピット (III-225)					
1	坏	13.4	4.3	丸底	ロクロ・ヘラナデ	1	皿	10.1	3.5	5.4	ロクロ・糸切
						2	皿	8.7	2.1	4.6	ロクロ・糸切
						3	皿	9.1	2.1	5.8	ロクロ・糸切
						4	皿	8.9	2.5	5.5	ロクロ・糸切

番号	器種	口径	器高	底径	調整等	番号	器種	口径	器高	底径	調整等
5	皿	8.8	2.1	5.4	ロクロ・糸切	32	皿	9.1	2.6	5.6	ロクロ・糸切
6	皿	8.9	2.3	5.2	ロクロ・糸切	33	皿	8.8	2.1	5.8	ロクロ・糸切
7	皿	8.9	2.1	5.4	ロクロ・糸切	34	皿	7.8	2.1	5.3	ロクロ・糸切
8	皿	8.6	2.1	5.2	ロクロ・糸切	35	皿	8.4	3.1	5.2	ロクロ・ナデ
9	皿	9.8	2.2	6.8	ロクロ・糸切	36	皿	8.7	3.7	5.5	ロクロ・ナデ
10	皿	9.0			ロクロ	37	皿	9.4	4.0	5.5	ロクロ・ナデ
11	皿	9.8	2.4	5.1	ロクロ・糸切	38	皿	8.2	2.9	5.6	ロクロ・ナデ
12	皿	9.8	2.1	5.6	ロクロ・糸切	39	皿	11.4			ロクロ・ナデ
13	皿	10.4	2.7	6.0	ロクロ・糸切	40	坏	11.6	3.5	5.4	ロクロ・糸切
14	皿	8.8	2.3	5.6	ロクロ・糸切	41	坏	14.4	3.5	7.2	ロクロ・糸切
15	皿	9.1	2.3	4.8	ロクロ・糸切	その他 (III-228)					
16	皿	9.4	2.0	5.2	ロクロ・糸切	1	坏	11.7		丸底	ロクロ
17	坏	15.5	5.5	7.8	ロクロ	2	甗			5.0	ロクロ・ヘラケズリ
18	坏	15.8	4.1	7.4	ロクロ・糸切	3	高坏	14.7	11.8	9.5	ロクロ・ナデ
19	皿	9.0	2.0	5.0	ロクロ・糸切	4	壺	8.6	5.9	丸底	ロクロ・ナデ
20	皿	8.6	1.6	5.2	ロクロ・糸切	5	壺			8.6	ロクロ
21	皿	8.4	2.4	5.1	ロクロ・糸切	6	壺	11.6	10.8	5.0	ロクロ・回ヘラケズリ
B地区土器集中出土地 (III-227)											
1	皿	7.6	1.9	4.7	ロクロ・糸切						
2	皿	9.1	1.7	5.5	ロクロ・糸切						
3	皿	9.2	2.0	5.6	ロクロ・糸切						
4	皿	7.7	2.0	4.6	ロクロ・糸切						
5	皿	8.0	1.8	4.8	ロクロ・糸切						
6	皿	8.4	1.7	5.6	ロクロ・糸切						
7	皿	9.1	2.1	5.6	ロクロ・糸切						
8	皿	8.6	2.0	5.7	ロクロ・糸切						
9	皿	8.9	2.5	5.2	ロクロ・糸切						
10	皿	8.6	1.9	5.0	ロクロ・糸切						
11	皿	8.8	2.0	5.5	ロクロ・糸切						
12	皿	7.6	1.8	4.6	ロクロ・糸切						
13	皿	7.7	2.0	4.8	ロクロ・糸切						
14	皿	9.0	1.9	5.3	ロクロ・糸切						
15	皿	8.2	1.7	5.1	ロクロ・糸切						
16	皿	7.9	1.8	4.8	ロクロ・糸切						
17	皿	8.2	2.3	4.1	ロクロ・糸切						
18	皿	9.0	2.4	6.0	ロクロ・糸切						
19	皿	9.4	1.8	6.0	ロクロ・糸切						
20	皿	9.0	2.0	5.4	ロクロ・糸切						
21	皿	8.7	2.1	5.1	ロクロ・糸切						
22	皿	8.8	2.1	5.4	ロクロ・糸切						
23	皿	9.3	2.4	6.4	ロクロ・糸切						
24	皿	8.4	2.1	5.1	ロクロ・糸切						
25	皿	8.7	2.1	5.1	ロクロ・糸切						
26	皿	9.1	2.4	5.6	ロクロ・糸切						
27	皿	8.8	2.2	5.5	ロクロ・糸切						
28	皿	8.7	2.4	5.5	ロクロ・糸切						
29	皿	8.1	2.4	5.8	ロクロ・糸切						
30	皿	8.8	2.5	6.0	ロクロ・糸切						
31	皿	8.4	2.7	5.5	ロクロ・糸切						

IV 結 語

遺構を中心とする精査を実施した面積は、約1200㎡を2面にわたるもので単純に計算すると2400㎡になる。この範囲に弥生時代から平安時代にわたる住居址66軒、土壌墓1基、土壌12基、ピット群3ヶ所、溝址3ヶ所等が存在していた。以下調査所見から遺跡の性格を瞥見する。

遺跡の範囲についてはまだ確定しがたいが、遺構のあり方から皆神山麓部にはなく、蛭川による扇状地上に展開するものと思われる。この地は洪水によってもたらされた砂利や礫を多く含み、鉄砲水様の洪水が何度もみまわっており、必ずしも居住するのに適地とはいえない。何故にこのように多くの生活址が残されていたのだろうか。単純に考えると近くに松井泉と称される豊富な水量をはき出す湧水があり、飲料水等の確保がたやすかったこと、皆神山北麓を流下する藤沢川が開析した下流の平坦地が水稻栽培に適していたからと推定する。しかし歴史時代にあっては後述するように政治的立地も考えなければならないと思う。

弥生時代の遺構・遺物は少なく、偏在することは本文中で触れた。B36号住居址下層出土の甕は箱清水式期に属し、他はそれ以前に編年される吉田式期のものと考えられる。しかし土器を詳細に観察すると両期の様相を内在しており過渡期に位置付けられる可能性がある。

古墳時代の遺構のうち中期に比定されるものには、B21号・B32号住居址、B9号～B12号土壌を抽出するが、遺構全容を知ることができなかった。しかしこの地に住居址が存在していた意義は大きく、舞鶴山古墳・天王山古墳・長礼山古墳との関連を追求する資料を得たことになる。またB9号・B10号土壌出土の土器同時期のもので、祭祀遺構・遺物と考えたい。何の祭をしたのか不明である。他の遺構は全て後期に属するものである。カマドの位置は、確認できた15軒のうち北壁3軒・南壁4軒・東壁8軒である。このようなばらつきは時間差によるものであろうか検討を要する。カマドのほとんどが石芯粘土製両袖形のものである。B29号住居址は古墳時代終末に比定されようが、ヘラミガキを多様する壺の存在が気になる。この段階まで残存するのであろうか。

歴史時代の遺構のうち奈良時代のもは、A22号・B22号・B25号住居址のみで、他は平安時代の所産である。奈良時代の集落規模等の性格解明は今後の課題とするところが大きく、遺物では一般庶民が帯びることのできない帯(ベルト)飾り金具である銅製丸軋の出土が目される。出土地点はA2号集石址の南側で、トレンチ調査の際発見されたもので正確な時代比定はできないが、一応この時代のものとしておくが、これより古いものとも思える。どんな階級の官人がいたのであろうか興味深い。平安時代の住居址は不整形のものが多く、台形状を呈するものもある。カマドの位置も一定でなく北壁6軒・南壁1軒・東壁8軒・西壁2軒である。これらの住居址の中で注目されるものには、A2号・B5号住居址、A1～3号集石址内に残存する大量の礫の問題である。これらは生活遺構としてのあり方を示しているのではなく、A地区の集石内より弥生時代から平安時代にかけての各種の土器が出土しており、とりわけA2号集石址から硬質の須恵器が多量に出土したことは、住居廃絶直後に礫ともども投棄されたことを裏付けるものと思える。土器類では、平安時代全般にわたるものが出土しているが、B11号・B17号・B19号・B26号住居址及びB地区土器集中箇所出土の小皿類を中心とする土器群は平安時代末期頃に位置づけられ、編年上該期の穴を埋める好資料である。このほか東濃窯系の灰陶陶器が多量に出土し、二彩陶器小片があることも注目され、金属器特に武器類の多さ等は他の遺跡には見られない傾向で、特別な位置にあった遺跡ではないかと推定される。更に多量の獣骨の中に馬・牛・犬等のものがあり、ヒラメ骨や銚頭の出土は海との交流をうかがわせ、前述のことと合せて政治的・経済的に優位な遺跡であったことを想定させる。またB1号・B10号住居址出土の銭貨も年代比定には重要な資料である。

以上のほかに様々な問題が内在している遺跡といえ、考古学的事象等から総合的に考察を加える必要がある。



(上) 弥生時代後期土器
(中) B21号住居址
(下左) B 9号土壙
(下右) B10号土壙



B10号土壙



A19号住居址



Y 4 号住居址



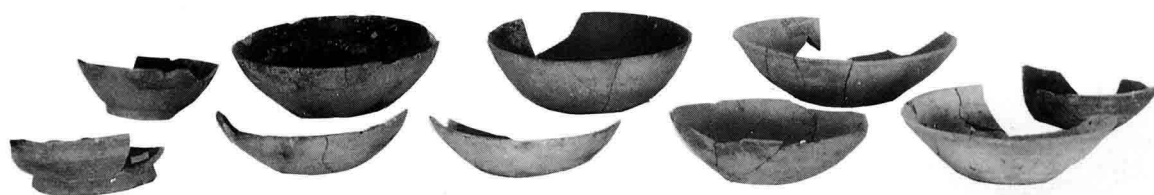
B24号住居址



B30号住居址



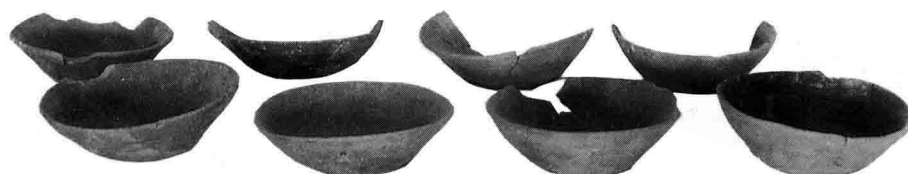
B29号住居址



B27号住居址



A13号住居址



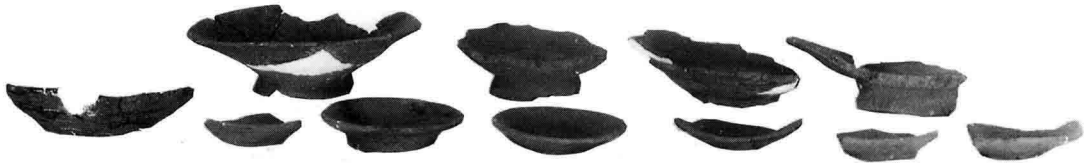
B19号住居址



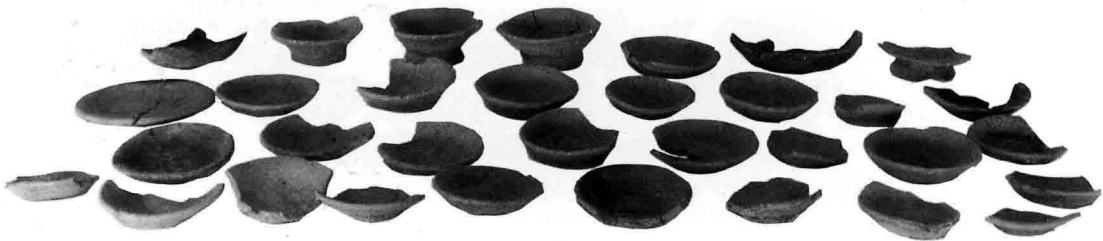
B17号住居址



B 9 号住居址



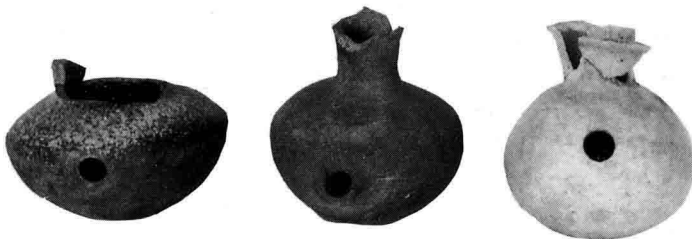
B26号住居址



B区土器集中個所

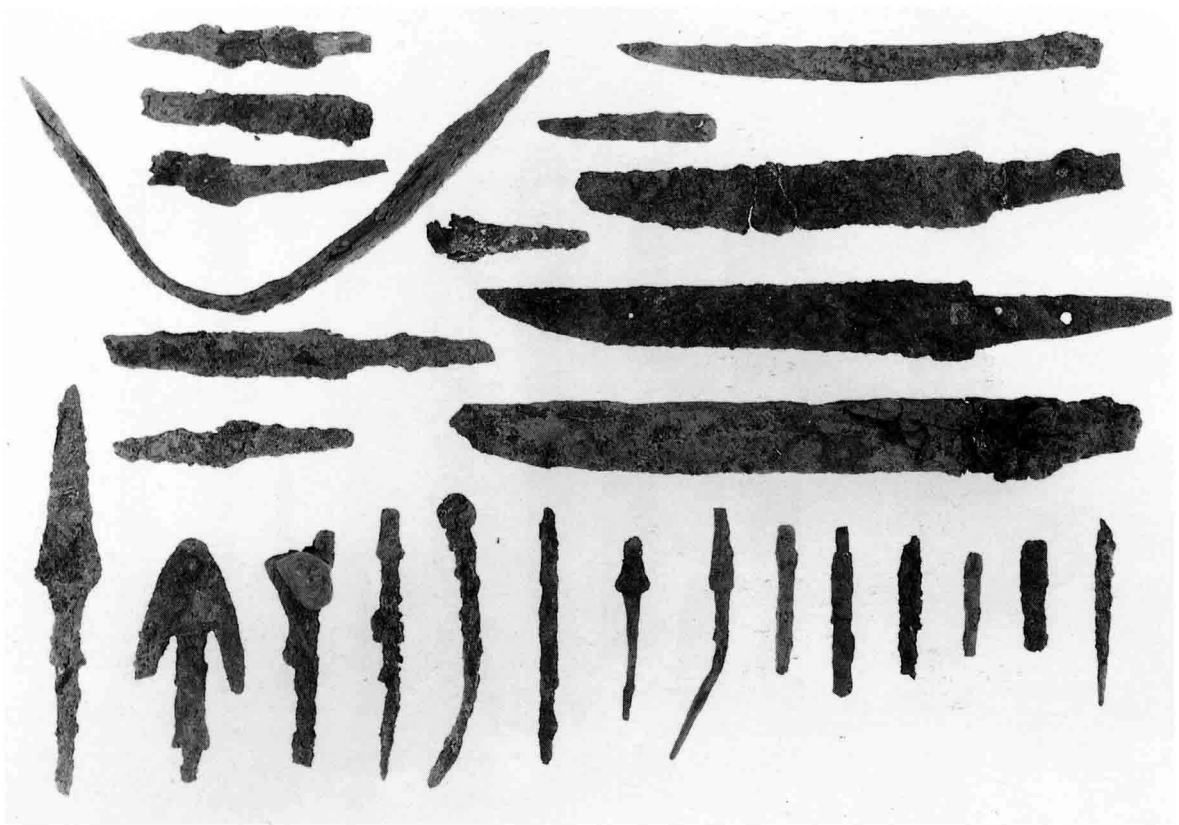


灰釉陶器

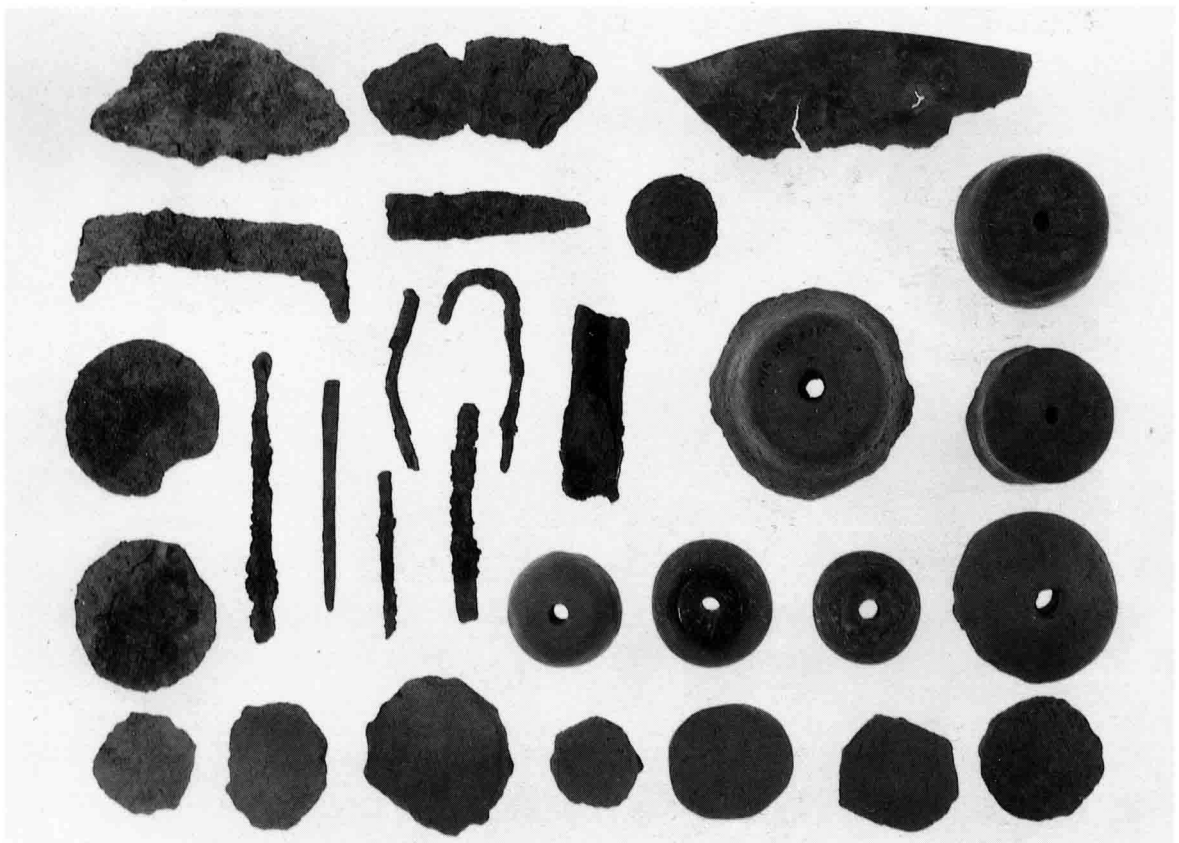


甕

- (左) B32号住居址
- (中) A16号住居址
- (下) B33号住居址



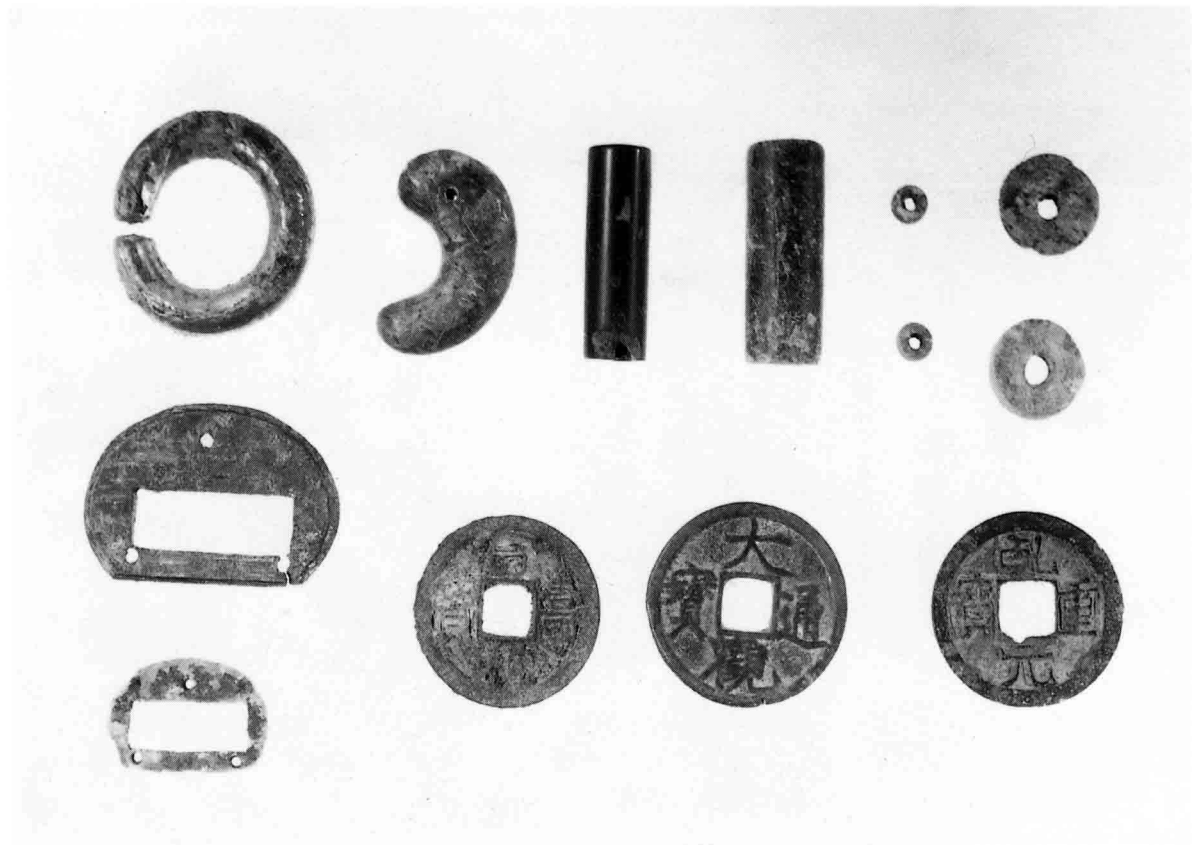
小刀・刀子・鉄鏃



火打金具・鎌・銅鏡・麻皮はぎ金具・釘・紡錘車・土器製円板等



鹿骨・加工材・猪牙・不明角製品・弓筈・銛頭・骨針・籠状骨角器



金環・勾玉・管玉・小玉・丸鞆・錢貨

- 長野市の埋蔵文化財 第1集『信濃長原古墳群』
 // 第2集『浅川西条』
 // 第3集『中村遺跡』
 // 第4集『塩崎遺跡群』
 // 第5集『塩崎遺跡群(2)』
 // 第6集『三輪遺跡－付水内坐－元神社遺跡』
 // 第7集『田中沖遺跡』
 // 第8集『篠ノ井遺跡群』
 // 第9集『四ツ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
 // 第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
 // 第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
 // 第12集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスA・E地点遺跡－』
 // 第13集『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里の遺構・石川条里の遺構』
 // 第14集『石川条里の遺構(2)・上駒沢遺跡』
 // 第15集『箱清水遺跡(2)』
 // 第16集『石川条里の遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
 // 第17集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスB・C・D地点遺跡－』
 // 第18集『塩崎遺跡群IV－市道松節－小田井神社地点遺跡－』
 // 第19集『土口将軍塚古墳－重要遺跡確認緊急調査－』
 // 第20集『三輪遺跡(2)』
 // 第21集『芹田小学校遺跡』
 // 第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』
 // 第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』
 // 第24集『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
 // 第25集『南川向遺跡』
 // 第26集『東番場遺跡』
 // 第27集『小柴見城跡』
 // 第28集『宮崎遺跡』
 // 第29集『浅川端遺跡』
 // 第30集『地附山古墳群』
 // 第31集『町川田遺跡』
 // 第32集『中条遺跡』
 // 第33集『鶴前遺跡・塩崎城跡』
 // 第34集『石川条里遺跡』
 // 第35集『篠ノ井遺跡群II』

長野市の埋蔵文化財第36集

屋地遺跡II

－国補中小河川蛭川改修事業地点－

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

発行 長野市教育委員会
 (長野市埋蔵文化財センター)

印刷 ほおずき書籍株式会社